



第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会報告書

The 6th Asia Oceania Camping Congress in Japan





はじめに・大会テーマ

キャンプは様々な可能性を秘めた宝の箱です。1861年に米国でこの箱が開けられてから150年以上の時間が流れ、この間にキャンプの箱の中からはたくさんの素敵なものを取り出されてきました。

キャンプは私たちにいつも、何が大切で、どうすればその大切なものを取り出せるかを教えてくれます。キャンプの体験は個人的な貴重な経験であると同時に社会的な意味を含んで私たちを育ててくれます。キャンプで大切なものは私たちの日常生活でも大切にしなければならないものです。

今大会のテーマ「アウトリーチ ～手をさしのべるキャンプ～」は今、私たちが生きていく上でたくさんの人々や様々な事柄に自分から積極的に関係結んでいこうとする態度や考え方を表しているように思います。ですから、この大会に参加された皆さんの積極的な関わりを期待します。

そして、この大会をきっかけにCamping for All がさらに拡大されることを心の底から願っています。

この大会を準備するに当たり、国内国外を問わず多くの方々から寄せられたご意見やお励ましに感謝します。また、キャンプを愛するたくさんのボランティアの方々がこの大会のために献身的な働きをしてくださったことを誇りに思い篤く感謝を申し述べます。

第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会 組織委員会

委員長 星野敏男



アウトリーチ -手をさしのべるキャンプ-

Outreach -Camp for a better society-

(AOCC2016 大会テーマ)

Outreach(アウトリーチ)は、「手をさしのべること」を指す言葉で、転じて「地域社会などに手をさしのべる支援活動」という意味も持ちます。

キャンプもまた、手をさしのべることで新しい社会貢献の形を創り出すことができます。例えば、子育てに四苦八苦しているお母さんに「一緒にキャンプしませんか?」と手をさしのべてみる。例えば、ガンなどの重たい病気の子どもに「一緒にキャンプしようよ!」と手をさしのべてみる。そうした取り組みが、着実に「前よりもちょっといい社会」を作ってきました。

キャンプのレジリエンスや市民性を育む優れた機能に改めて注目し、学び、考え、つながる時間を持ちたいという想いを込めたテーマです。



第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会 概要

期 間：2016年10月28日（金）～11月1日（火）

プレ・イベント 国際キャンプ・ディレクター・コース 10月23日（日）～10月28日（金）
 プレ・イベント 国際キャンプ連盟理事会 10月26日（水）～10月28日（金）
 ポスト・ kongress・ツアー 11月1日（火）～11月3日（木）

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町3-1）

公用語：英語、日本語

参加者数：

総参加者数 402名（招待含む）

オーストラリア	7名	マレーシア	4名	ロシア	36名	ベネズエラ	2名
カンボジア	1名	モンゴル	8名	シンガポール	7名	ベトナム	1名
カナダ	7名	ナイジェリア	4名	タイ	1名	ウクライナ	1名
中国	45名	パキスタン	3名	トルコ	5名	ペルー	2名
香港	10名	フィリピン	1名	アメリカ	9名	日本	248名

主 催：アジア・オセアニア・キャンプ連盟（AOCF: Asia Oceania Camping Fellowship）

（公社）日本キャンプ協会

第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会組織委員会/日本キャンプ協会設立50周年記念事業組織委員会

共 催：（独）国立青少年教育振興機構

後 援：国際キャンプ連盟（ICF: International Camping Fellowship）

文部科学省スポーツ庁

外務省

《組織委員会参画団体》

（公社）ガールスカウト日本連盟 （一社）日本オートキャンプ協会

（NPO）自然体験活動推進協議会 （公社）日本オリエンテーリング協会

（公財）東京YWCA （公財）日本サイクリング協会

日本アウトドアネットワーク （公社）日本シェアリングネイチャー協会

（公社）日本ウオーキング協会 （公財）日本YMCA 同盟

日本野外教育学会

（公財）日本レクリエーション協会

（一財）日本ユースホステル協会

（公財）ハーモニセンター

（公財）ボーイスカウト日本連盟

協 力：教育支援人材認証協会（JACTES）

都道府県キャンプ協会

協 賛（50音順）：

アイコム株式会社

奥鬼怒温泉八丁湯

株式会社阿吽

株式会社ウィンパル

株式会社オカモトヤ

株式会社グリーンハウス

株式会社ニュートラスト

株式会社ミズカミ

株式会社ヤマシタコーポレーション

公益財団法人関西テレビ青少年育成事業団

広伸防災株式会社

サントリーホールディングス株式会社

東海プラント株式会社

はつかいちキャンプ協会

ホシノ自動車整備工場

三菱商事株式会社

未来テクノ株式会社

有限会社エイコー東海

理想科学工業株式会社

大会スケジュール：

	10月28日（金）	10月29日（土）	10月30日（日）	10月31日（月）	11月1日（火）
午前		朝のミニプログラム 開会式 記念講演	朝のミニプログラム 基調講演 2 分科会 2	朝のミニプログラム 分科会 4 基調講演 4	チェックアウト ポスト・コンGRES・ ツアー
午後	受付 チェックイン	基調講演 1 分科会 1 集いの時間 NCAJ 設立 50 周年式典	基調講演 3 分科会 3	分科会 5 AOCF 総会 閉会式	
夜	ウェルカム・ パーティ	オープニング・ パーティ	ナイト・オン・ザ・ タウン	フェアウェル・ パーティ	





ウェルカム・パーティ

10月28日・大会1日目

「日本のお祭り」をテーマに、鏡開きや日本の伝統的な舞踊といった、参加者が日本文化を体験できるプログラムが用意され、その雰囲気を楽しみました。

鏡開き

日本の開会セレモニーを体験してもらうため、鏡開きを行いました。星野会長、ジョルゲンセン会長らが日本らしい法被姿で、掛け声に合わせて勢い良く酒樽を割りました。また併せて、大会ロゴがデザインされた枡を製作し参加者にプレゼントしました。

日本酒寄贈：はつかいちキャンプ協会

出店

日本のお祭り文化を体験してもらうため、射的（ゴム鉄砲）、スーパーボールすくい、宝釣りの3つの出店が会場に用意されました。参加者の中には、のめり込んでしまい出店から離れない方も。大会1日目の少しかたい雰囲気が、出店の体験を通じてはぐれていくのがとても印象的でした。

沖縄舞踊

沖縄県キャンプ協会からの紹介で「八重山エイサー団体 和琉風（とりかじ）」に沖縄舞踊を披露してもらいました。迫力ある踊り、身体に響き渡るエイサー太鼓の音、外国人参加者はもちろん日本人参加者もめったにない体験ができました。このパフォーマンスは、大変盛り上がりを見せ、参加者もステージに上り踊っていました。

舞踊：八重山エイサー団体 和琉風（とりかじ）





開会式

10月29日・大会2日目

開会式は、秋篠宮妃殿下のご臨席を賜り、盛大に行われました。

また、開会に先立ち演奏された、ア・カペラトリオ、CAPELLATE による美しい歌は、言語を超えて、参加者の心に響きました。さらに、今回の大会テーマを強く印象づける、キャンプの参加者も交えたスライドショーも行われました。

秋篠宮妃殿下 おことば

ご来賓並びにご参加の皆さま、本日、「第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会」の開会式が開催され、皆さまにお会いできたことを、たいへん嬉しく思います。こどもの頃より、キャンプに参加したり、お手伝いをしたりしてきた思い出を大事にしている私は、キャンプのご経験が豊富な皆さまとともにこの大会に参加することを、楽しみにしておりました。

海外からご参加の皆さまを歓迎いたします。美しい自然と文化がある日本においてのご滞在が、皆さまにとりまして思い出深いものとなりますよう、願っております。

皆さまが取り組まれているオーガナイズド・キャンプは、参加者が普段の生活とは異なる経験をする中で、人との関係を築き、精神的回復力を身に付け、自己肯定感を高める機会を提供すると思います。自然や多様な文化と親しむ活動は、参加者が自らの能力を伸ばす助けになると感じます。このようなキャンプは、良い訓練、経験を経て必要なスキルを身につけたスタッフをはじめとする多くの熱心な人々の協力によって、実現してきました。クオリティの高いキャンプを行うために努力してこられた皆さまに、心から敬意を表します。

例えば、「スペシャル・ニーズ・キャンプ」が催されていること、ユニバーサル・デザインのキャンプ場がいくつかあるということは、大変勇気づけられることです。障害をもつ子どもたちが、キャンプで自然とかかわり、能力を伸ばし、達成感や成功体験を得たことを知り、嬉しく思います。また、難病の子どもたちやその家族が、特別に配慮されたキャンプでかけがいのない時間をすごしていると伺い、ありがたく思っております。

「グリーフ・キャンプ」が、心の傷みを持ち、困難な状



況にある子どもたちを支えてきたことに、深い印象を受けております。愛する人を失った悲しみの中にいる子どもたちにとって、自らの気持ちを伝えあつて、ひとりではないと知ることのできるグリーフ・キャンプは、価値ある贈り物だと思います。この機会に、2011年の東日本大震災の後、キャンプを開催するために支援してくださった方々に、感謝の気持ちをお伝えしたく存じます。

皆さまお一人お一人が、それぞれのキャンプの歴史を築いてこられたことと思います。喜びに満ちたキャンプもあれば、難しい課題を伴うキャンプもあったかもしれませんが、どのキャンプも、よりよいキャンプをオーガナイズするための皆さまの能力に貢献したに違いありません。この大会が皆さまに、経験や考えを分かち合い、キャンプの一層の可能性をひらくために話し合う、実り多い時間を提供することを希望しております。また、この大会が、オーガナイズド・キャンプの重要な役割についての認識を高める、よい機会となることを希望しております。

結びに、皆さまのご健康とご活躍を祈り、オーガナイズド・キャンプが人々に貴重な経験をもたらすようお願い、式典に寄せる言葉といたします。 (文責 事務局)

※秋篠宮妃殿下が英語でスピーチされたものを日訳いたしました。

ビル・オークリー アジア・オセアニア・キャンプ連盟会長 あいさつ

秋篠宮妃殿下、そして日本、世界各国の今回お越しいただきました皆さま、この国立オリンピック記念青少年総合センターでの第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会（以下AOCC）へようこそお越しくございました。

2000年にこの地で行われた第5回国際キャンプ会議の時にあったアジアキャンプ連盟（ACF）という組織が、メルボルンでの第6回国際キャンプ大会の後、アジア・オセアニア・キャンプ連盟（以下AOCF）となり、今日に至りました。その間に5回のAOCCがこのAOCFを構成する主要な国々により開催され、今回、このAOCFという組織の形成に最も大きな影響を与えてくれた日本で開催されるということは、それだけで大変意義深いものだと思います。

そして、同時に日本キャンプ協会が50周年を迎えられたということへ、心よりお祝い申し上げます。

また、この大会に先立ち、国際キャンプ連盟の理事会、そして国際キャンプ・ディレクター・コース（ICDC）が行われ、次世代を担う指導者の育成が行われていることが誠に喜ばしいことです。そしてそれに続くAOCCが皆さまにとって意義深いものとなりますよう、心より祈っております。



星野敏男 第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会組織委員会委員長 あいさつ



ようこそ、第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会にご参加いただきましてありがとうございます。

今回の大会には、アジア、オセアニアを中心に世界の20を超える国と地域から400名を超える方々のご参加をお迎えすることができました。主催者を代表しまして感謝を申し上げます。

さて、今回の大会テーマは、「Outreach -Camp for a better society-（アウトリーチ -手をさしのべるキャンプ-）」です。世界には様々な人が暮らしておりまして、様々な楽しみがあり、様々な困難があり、様々な日々の生活があり、そして、様々なキャンプの形があります。そうしたことは、通常個人的な事柄として捉えられやすく、同じ問題意識を持つ者同士がつながり合

って、その問題意識を共有したり、もっと幅広く社会への人々への共感を広げる機会は意外と少ないものです。

今日のように、社会の仕組みが複雑になり、個々の事柄にまつわる問題が多様化するにつれて、私たちにはお互いに手を伸ばし合いながら、相互理解の努力をすることが求められています。この大会の中で、キャンプを通してのより良い社会形成のためには、具体的に私たちひとりひとりがどういうことをすべきなのかが見つけられれば幸いです。

本大会を実施するに当たりまして、力を合わせていただきました、たくさんの方々、ご共催をいただきました国立青少年教育振興機構、ご後援をいただきました国際キャンプ連盟の皆さま、文部科学省スポーツ庁、外務省の皆さま、そしてこの日のために大変お忙しい中、ご臨席いただきお言葉を賜りました秋篠宮妃殿下に心より御礼を申し上げ、私の挨拶の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。





記念講演

10月29日・大会2日目

劇作家でもあり、年間を通じて様々な演劇に関するワークショップも行っている平田オリザ氏をお招きし、「コミュニケーション」についてお話をいただきました。



講師プロフィール 平田オリザ

劇作家・演出家・青年団主宰。

こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督。

東京藝術大学 COI 研究推進機構 特任教授。

オフィシャル WEB サイト：<http://www.seinendan.org/hirata-oriza>

© T. Aoki

おはようございます。

記念すべき大会の記念講演になぜ劇作家なのか、私もよくわからないんですけども、いくつか理由があるかと思っています。まず、作家というのは本を読んだり、書斎にこもって原稿用紙に作品を書くのが仕事なんですけれども、ずっと作家をやってきたわけでもなくてですね、16~17歳の時に自転車で世界一周をしました。それから学生時代はずっとワンダーフォーゲル部におりましたので、皆さんの活動とそれほど遠いところにいるわけではないと思っています。2点目はですね、演劇とキャンプというのは、遠いようでいて近いところはあるのではないかと思います。私も海外で時々サマーキャンプなど見せていただくこともありますけれど、欧米ではよくサマーキャンプの最後に演劇を子どもたちが作ったりしますよね。それはやはり親和性が高いのではないかと思います。

私、ちょっと今日原稿無しでしゃべっているものですが、先に忘れないように結論だけ言っておきますと、要するに、演劇もキャンプも子どもたちの居場所が作りやすいんじゃないかということです。多様な子どもたちの在り方を受け止めることに非常に優れているんじゃないかと。

僕はよく、後でご紹介しますが、演劇教育の指導をする際にですね、小中学校の先生方には「おとなしい子には無理に大きな声を出させないでください」と言います。「おとなしい子っていうのは、おとなしい子っていう役をやれば一番上手いんですよ」とよく申し上げます。キャンプも似たようなところがあるのではないかと。

もう一つは、共に何かをする。そして一定時間内にアウトプットを必ず出すということですね。火を起こす、食事を作る、テントを建てる。これ一定時間内にやらないと、

どんどん日が暮れて、寒くなってしまうわけですね。演劇も同じように、お客さんが入って幕が上がると、もうこれ、どうにかしなきゃいけないんです。この集団でどうにかする力、ということが演劇とキャンプの共通点かなと思います。

前者と後者、ひとりひとりの居場所を作ることと、集団で何かをやるということは、矛盾したように見えて、しかしこれからの日本社会にとって非常に重要なことではないか。今までの価値観を一つにする方向の教育から、価値観がバラバラなままで、そのバラバラな人間が、どうにかして社会を上手く構成していく、そういう持続可能な社会に日本社会が変わっていかなければならないとすればですね、この演劇教育もそしてキャンプを使った教育も、非常にこれから重要な役割を果たしていくだろう、と。ここまで言ってしまうともうこの後しゃべらなくても良くなってしまうんですが。もう少し詳しくそれを見ていきたいと思っています。

先にせっかくなので私の仕事のスライドを持ってきました。

これ^{*1}は2002年のワールドカップの記念事業として、日本と韓国2つの国で作った作品です。これ、日本の俳優さん6人と韓国の俳優さん5人に出演していただいて作った作品です。日本と韓国の両方で大きな賞をいただいた作品になりました。真ん中の方はもう亡くなられましたが、ペク・ソンヒ先生という、韓国の人間国宝級の俳優さんに出ていただきました。

これは私の代表作で、東京ノートという作品です。今、たぶん15カ国語くらいに翻訳されて世界中で上演されている作品です。その日韓版ですね。手前の2人

は韓国の俳優さんです。奥の 2 人は日本の俳優です。次は同じ東京ノートのフランス語版ですね。全員フランス人で作った作品です。同じ芝居に見えないかもしれませんが、同じ作品です。今年は台湾で台湾の俳優さんたちとこの作品を作ります。来年はタイのバンコクで作品を作ります。そういう活動をずっとしてきました。



© T.Aoki

一方で私は今、東京芸術大学の教員をしているんですけども、長く大阪大学にも勤めてまして、大阪大学ではこういったロボットを使った演劇を作ってきました。こちら左側がアンドロイドですね。右がアメリカ人の女優さんです。

これ^{※2}は、フランスで作った作品ですね。彼女は、映画が好きな方はご存知かと思いますが、イレヌ・ジャコブさんという、カンヌ女優賞をとったフランスの国民的な女優さんに出会って作った作品です。

最新作はオペラ^{※3}ですね。昨年の 12 月から今年の 1 月にかけて、ドイツのハンブルクに滞在して、ハンブルク州立歌劇場でオペラを作りました。これは福島を題材にしたオペラで、最後は防護服を着てお墓参りに行くシーンで終わります。

こういった仕事を国内外でしてきましたが、一方で演劇教育や、小学校と中学校の国語の教科書を作る仕事をずっとしてきました。今でもだいたい年間で 30 から 40 校くらいは小中学校で実際に演劇の授業をしています。これはたまたま福島県の南相馬市、福島第一原発に一番近いところで開校している相馬市立原町第二中学校というところで昨年行った授業の風景です。それ以外に大学ではこういったワークショップ型という体験型の授業をしています。



提供：大阪大学 CO デザインセンター

（「旅行ですか？」というテキストをスライド上に写しながら）これは一番よく使っているテキストです。列車の中という設定で、2 人は知り合いで、ここにもう 1 人入ってきて席を譲りあったりしながら、「旅行ですか？」と話しかけるというテキストです。

これは簡単に見えるんですけども、日本の高校生とか大学生がやると意外に難しく、初対面のはずなのに、妙に馴れ馴れしくなってしまうと、「旅行ですか～？」になっちゃったりとか、あるいは逆にすごく一生懸命「旅行ですか！？」と聞いたりするんですね。どうして上手いかわからないのか最わからなかったんです。それまではプロの俳優としか仕事をしたことがなかったので、それで、高校生たちに聞いたらですね、「私たち初めて会った人と話しをしたことないから」と言うんですね。誰でも最初は初対面だろうと思うんですが、要するに他者との接触が少なくなっているということなんだと思うんです。それ以来、ちょっと参加者に聞くようにしているんです。

今日ちょっとたくさんの国の方がいらっしやっているので楽しみなんですけれども、列車の長旅自体がですね、日本では少なくなっていましたね。私たちが大学生ぐらいまでは、学生が九州や北海道に旅行に行くのに、10 時間位電車に乗るっていうのは普通だったんですけども、今は飛行機の方が安いですし、それから日本ではボックス席の列車とか、コンパートメントの列車がほとんどなくなってしまって、こういう機会自体が少なくなりました。でも、皆さん例えば海外に行く飛行機の中で、他人と乗り合わせたりした時に、自分から話しかけるって人もいると思うんですね。自分からは話しかけないな、話しかけられれば答えるけれども、自分からは話しかけないなって人もいると思うんですね。それから場合によって人もいると思うんですけど、ちょっと手を挙げてみてください。自分から話しかける方だという方。意外と少ないですね。キャンプ大会だからもっといるかと思ったんですが。これだ

たい日本では1割なんです、自分から話しかける人は。だいたい全国どこに行っても1割ですが、大阪だけちょっと上がるんです。それでは自分からは話しかけない、という方。ああ、これはやっぱり多いですね。半分くらいですかね。

(以下会場とのやりとり)

じゃあ、場合によるという方。どんな場合に話しかけますか？

—話しやすそうな時、話しかけやすそうな雰囲気を持った人には自然に話しかけちゃいます。

相手が話しかけやすそうだったらですね。

(別の参加者に問いかける)

—話しやすいというよりも、例えばその方が本とか何か夢中になっている時はちょっと様子を見ながら。

はい。実際に話しかけますか？

—はい

相手はびっくりすると思うんですけど。

—あ、そうですか？びっくりしないようにしたいと思います。

わかりました。

はい、そうですね、やはりあの、相手による、あるいは相手の状態によることなんだと思うんですね。もちろん話しかける側の体調とかもあると思うんですね。あんまり落ち込んでいる時は人に話しかけないと思うんですけど、ほとんどの場合が相手によります。例えば今話しかけると手を挙げられた方の場合でも、とても怖そうな人だったら、話しかけないと思うんですね。あるいはイヤホンなんかで音楽を聞いていたりするとこれは、話しかけにくいですね。それから、話しかけないと手を挙げた方でも、例えば相手が赤ん坊を抱いてて、赤ちゃんがじゃれついてきたりしたら、何か言いますよね。可愛いですねとか、可愛くなくても、何か言わないとですね、今度こっちが怖い人だと思われるってしまうからなんか言うということですね。これも相手によるところが大きいわけです。

これ全く同じワークショップをですね、オーストラリアの大学でやった時に、やはり学生たちに聞いたんです。どんな場合に話しかけますか？と。もちろんこの「相手による」ということもありましたが。しかしですね一方で、このAさん、話しかける主体の人種とか民族によっても違うんじゃないか、文化によっても違うんじゃないかという答えが出てきました。やっぱりワークショップはいろんな国でやってみるもんだなあと思ったわけです。彼らの解説によると、Aさんがイギリスの上流階級の教育を受けた男性だ

ったら、話しかけないんじゃないか、ということなのです。これには、明らかにオーストラリア人によるイギリス人への偏見も入っていると思うんですけど…。しかしイギリスの上流階級では、人から紹介されない限り、他人と話してはいけないというマナーがあるので、話しかけないんだというわけですね。私たち日本人から見ると、欧米の人は、みんな社交的に見えて話しかけるように見えるんですけども、欧米であってもみんなが一律ではないということです。

皆さんもご経験のある方が多いと思うんですけども、アメリカとかオーストラリアのような多民族国家の方が、やはり圧倒的に話しかけてくるのではないかと思います。アメリカでも、東部より中西部、西部の方が圧倒的に話しかけてきます。開拓からの歴史が浅く、自分が相手にとって安全な人間であるということを、早く声や形にして示さなきゃいけない風土が残っているところの方が、話しかけてくるのではないかと思います。イギリスは、同じ英語を使っている、古い社会ですから、階級とか住んでいる場所によって、ずいぶんイントネーションが違いますね。そうすると、おそらくですね、相手を紹介してもらわないと、どんな英語で話しかけていいのかが決まらないんだと思います。多少話しかけにくい言語、あるいは社会なんだと思うんです。そうやって考えていくと、日本も少し話しかけにくい社会で、日本語とか韓国語というのは、敬語が発達していますので、相手との関係が定まらないと、どんな言葉で話しかけていいのかが決まらないわけですね。私、多少韓国語を話すが、韓国語は年齢による敬語が非常に厳しいのです。少し上でも敬語で話さなければなりません。日本語は、どちらかと言うと社会的な関係で敬語が決まりますね。例えば、皆さんのお子さんの担任の先生が自分より若くても、先生という立場なので、敬語で話すわけです。いずれにしても、封建社会であつたらこれで良かったんですね。相手との関係が決まっていますし、変わりませんから。しかし私たちは、今、現代社会に生きていて、同世代の人と初対面で会うということがしょっちゅうある。ほんとに困るんですね、韓国で同世代の方と会った時。一つ年上でも敬語で話さなければならないのですが、年がわからないと話しかけられないんです。ところが、言語というものは上手くしたもので、韓国語の場合は相当早い段階で、相手の年齢を聞くという習慣があります。だいたい「何年生まれですか？」と聞きます。韓国は数え年を普段使うので、満年齢か数え年かでまた誤解が起こると困るので。たまに干支で聞いてくる人がいるんですけども、干支で一回り間違えちゃうと、ますます悲惨なことになっちゃう。とにかく、これで男性同士はいいですけど、女性に

は聞きにくいですよ。韓国の女性は、年齢を聞かれるのを嫌がらないというんですけれども、でも、やっぱり初対面の人になかなか年齢を聞けないです。これ、逆のこともあってですね、日本から韓国に行く観光客の8割は女性だと言われています。向こうに行った日本女性が、韓国の男性からいきなり年齢を聞かれて不愉快な思いをしたという報告がよく政府観光局に届けられる。でも、しょうがないですね。これは文化として、年齢を聞くという文化がある国なので。こういう風に話しかけるという文化一つとっても、お国柄とか、民族性とか、国民性というものが現れます。例えば、アイルランドでワークショップをやった時にはですね、いきなり全員が話しかけるという風に手を挙げたんですね。場合によるという話さえできなくなってしまったんです。しかし、アイルランドとイギリスなんて隣の島ですよ。こんなに違うんです、コミュニケーションのとり方が。

さて、私たち演劇人は、台本をもらって、なんとなく役作りというものをします。このAさんは上品な人なのか、ちょっとがさつな人なのか、教養のある人なのか、ない人なのか、いろいろ考えてしゃべります。この「旅行ですか？」というセリフ、これ自体はそんなに難しいセリフではないですね。英語に翻訳しても韓国語に翻訳しても、意味の取り違いのない簡単なセリフです。ただ、このAさんが何人なのか、あるいはこの台本を書いたのがどの国の人なのかによって、「旅行ですか？」というセリフの書かれた意味はずいぶん違ってきますね。いいですか。セリフの意味は同じなのですが、セリフが書かれた意味は大きく違うんです。例えば、このAさんがアイルランド人だったら、これは普通の人です。Aさんは標準的なアイルランド人です。先日、フィリピンから来た留学生に聞いたら、このシチュエーションで話しかけなかったら失礼だと言っていました。120%話しかける。イタリアから来た留学生に聞いたら、相手が女性だったら100%話しかけると言っていました。これも多少偏見が入っていると思いますが。そして私たち日本人は、1割しか話しかけない。ということは、このAさん役の俳優は、日本人としてはちょっと積極的な人、ちょっと図々しいぐらいの人という役割を演じないと上手く言えないはずなんです。さらに、このAさんが、イギリスの上流階級の教育を受けた男性だったとします。今度は、話しかけてはいけないはずなんです。マナーとしては。でも、台本には「旅行ですか？」と書いてある。ということは、作家は何か別のメッセージを、この「旅行ですか？」というセリフに込めているということになりますね。

これ、実際に私、中学校や高校の国語の授業で、国語の立体化と呼んでいるんですけれども、演劇的な手法で国語の授業をいろいろと作っているのですが、その中の教材の一つです。高校生にいろいろ聞きます。いろんな答えが返ってきます。最近の高校生は結構優秀なんで。例えば、Cさんが、そのルールを破ってでも話しかけたいくらい美しい人だった。あるいはAさんが、その貴族か何かの身分が嫌でわざわざ放浪の旅に出た。だから、無理して「旅行ですか？」と言っている。

先日、ある高校でこの授業をやった時に、とても良い答えがありました。「Aさんが馬鹿」という答えがありました。Aさんは、上流階級の教育を受けたんだけど、馬鹿だから話しかけちゃった。でもこれ、とっても良い答えなんですね。なんでかって言うと、例えば、イギリスの観光客がこのシーンを見て、「旅行ですか？」というセリフを聞いただけで、もう爆笑になるかもしれないわけです。この貴族のドラ息子の子Aさんが、無理して旅行に出てきた珍道中が始まるんだと言う情報を客席は得るかもしれない。あるいは、Cさんをすごく美しい女優が演じていれば、この後AさんとCさんの身分を超えたラブロマンスが始まるんだという情報を客席は得るかもしれないんです。「旅行ですか？」というたった一言のセリフでも、受け止める側の文化や、教養や、経験が違えば、全く違う言葉として聞こえてくる。普遍的なコミュニケーション能力なんてないということなんです。

さて、もう皆さんはですね、数十年生きてきて、こういう言葉から受けるイメージがそれぞれバラバラです。それから、言語には個性というものがあります。先程、皆さんに手を挙げていただいた、話しかけるか話しかけないかというの、皆さんの個性ですね。こういうものを言語学の世界ではコンテキストと言います。コンテキストというのは狭い意味では、「文脈」という意味ですが、ここではもうちょっと広い意味で、皆さんがどういうつもりでその言葉を使っているのか。「旅行ですか？」というセリフをどんなつもりで使っているのか、アイルランド人のように普通に使っている人も、ちょっと勇気を出して使っている人も、相手に関心があるから聞く人も。「旅行ですか？」というのは、旅行かどうかを聞いているのではないですよ。いろんなコンテキストで使われる言葉だということです。

俳優には俳優のコンテキストがあります。劇作家には劇作家のコンテキストがあります。これが重なれば、そんなに苦労しないんですけれども、そう簡単には重ならないということですね。高校生は上手く言えないと言いました。上手く言えなくて当然なんですよ。「旅行ですか？」って

簡単なセリフなのですが、高校生に聞くと、もう日本の高校生 99%くらい話しかけない方に手を挙げます。日本の中学生、高校生、すごくシャイなんです。若い方と付き合っている方はご存知だと思いますが、初対面の人が苦手なんです。友だち同士はすごくしゃべるんだけど、初対面の人とはなかなかしゃべれない。ということは、この「旅行ですか？」というセリフは、簡単に見えるけれども、その子のコンテキストの外側にあるセリフだったということです。もっと簡単に言えば、簡単に見えるけれども、その子は普段使っていない言葉だったということです。この簡単に見えるけれども、コンテキストの外側にあるものが、一番コミュニケーションの落とし穴、ディスコミュニケーション、コミュニケーション不全と私たちは言いますが、このディスコミュニケーションの原因になりやすいんじゃないか。これを私たちは、コンテキストのずれと呼んできました。コンテキストのずれはコンテキストの違い以上にコミュニケーションの落とし穴になりやすいということです。



ではコンテキストの違いとは何でしょうか。例えば、文化的な背景がものすごく違えばですね、もうちょっと皆さん注意して考えると思うんです。例えば、チャーホフさんという作家がいます。100 年位前のロシアに生きていた作家です。100 年前のロシアが舞台になってますので、私たち日本人には全然意味のわからないセリフが出てきます。例えば、「銀のサモワールでお茶を入れてよ」なんていうセリフが出てきます。今日は、たくさんの海外の方が来ていらっしゃるの、サモワールでお茶を入れた経験のある人もたくさんいらっしゃると思うんですが、日本人の方で、サモワールでお茶を入れたことのある人？たまにいるんですけどね。いないですね。僕は今まで 20 年間ワークショップやって、46 人会ったことがあります。ものすごく微妙な数字ですね。では、海外の方でサモワールでお茶を入れたことのある人？当然ありますね。サモワールって、こんな壺みたいな紅茶を入れる機械です。ロシアの家庭には、必ずあります。でも日本人には全く馴染みのないもの

ですね。もし、「銀のサモワールでお茶を入れてよ」というセリフが出てきたら、俳優は考えます。いろいろ百科事典調べたり、ロシア料理店に行って触らせてもらったり、いろいろ研究をします。俳優もプロですから。でも「旅行ですか？」は考えないですね。どういう意味か、どう言えればいいのかと考えるので、スルって言うってしまう。だから失敗する。

演劇というのは、基本的に、他人が書いた言葉をどうにかして自分の体から出てきたかのように言う技術なのですけれども、だから、「銀のサモワール」も「旅行ですか？」も同じように難しいはずなのですが、この「旅行ですか？」の方が簡単なセリフなので、逆に、コンテキストのずれに気がつかないということです。これは異文化理解でも同じようなことがよく起こります。

例えば私たち日本人は、靴を脱いで家に上がります。皆さんご承知ですね。その時に私たちは、靴を揃えて、反転させて上がります。これ、韓国の方、嫌がる方結構いらっしゃるのですね。韓国の方からすると、そんなに早く帰りたいのかと思う。でも、これは、靴を脱いで家に上がるという文化を共有しているから起こる摩擦なわけです。日本人の皆さん、こういうお仕事をされているので、欧米の方との付き合いも多く、家に招くこともあると思うんですが、家招いた時に、「ここで靴脱いで」ってところから始まりますよね。自然状態だったら、このまま上がってっちゃうわけですから。そして脱ぐ時は、ほぼ 100%脱ぎ散らかします、靴は。そっちの方が自然です。揃える、まして反転させるというのは日本固有の文化なのです。これを美しいと思うのも日本人だけなんです。美しいと思っちゃいけないというわけではないです。文化ですから。でも、これを他者に強制するほどの客観合理性はないということです。利便性も何もないということです。反転させても 0.5 秒位早く帰れるだけですからね。これが文化です。そして文化というのは、基本的には、理解不能なものです。合理性はない。もう一つ問題があります。私たち欧米の方が、靴を脱ぎ捨てていくと、揃えてあげますね。「しょうがないなあ」と。その時私たちそんなに不愉快になりません。それは別に欧米人に対するコンプレックスではなくて、相手がそのルールを知らないということを知っているから。相手がそのルールを知らないということを知っているから、悪意がないということを知っているから、悪意がないということを知っているから、悪意がないということを知っているから。でも、なまじ靴を脱いで家に上がるという文化を共有していると、当然相手も自分と同じ行動をとると思ってしまいます。そして同じ行動をとらないと、それが野蛮に見えたり、悪意があるように見えたりするということなので

す。ここに近い文化と触れ合うことの難しさが、意味があります。ですから、若い世代にですね、とにかくたくさん交流してもらって、ずれに見えるけどやっぱり違うんだよね、と、いろんな違いをきちんと認識するということの方が大切なのです。それはその時には、関係がギクシャクするかもしれません。でも最終的に、大きな破綻、大きなコンフリクト(衝突)を回避できるということなんです。この小さなずれが積み積み、様々な紛争とか、差別とか、偏見の原因になる。ですから、きちんと違いを理解していく、文化の違いを理解していくということが必要なんじゃないかということです。

さて、このチェーホフはですね、100年前の話ですけれども、もっと最近の事例で、テネシー・ウィリアムズという作家がいます。20世紀のアメリカを代表する作家ですよ。この作家の作品が、1950年代に日本に紹介されました。その時に、「ボウリングに行こうよ」というセリフがあったんですね。当時の俳優は、このボウリングが理解できなかったのです。日本の俳優は、翻訳した先生のとこに、「ボウリングって何ですか」って聞きに行きました。当時、日本の翻訳の先生も今みたいに自由にアメリカに行ける時代じゃなかったんで、ボウリング、やっぱり見たことがなかったんですね。辞書で調べて、どうもボウリングというのは、鉄の玉で棒をたおす遊びらしいよと答えたそうなんですけれども。これじゃ、ボウリングの意味はわかりますけれども、ボウリングのイメージはちっともつかめないし、まして「ボウリングに行こうよ」というセリフのコンテキストは全然わからないですね。私たち劇作家が、「ボウリングに行こうよ」というセリフを書くということは、ボウリングに行くことが大事なんじゃないんです。この2人は「ボウリングに行こうよ」と言い合う間柄なんですよということを、そういう情報を客席に伝えたい。今、皆さんは、ご自身がボウリングをする、しないに関わらず、「ボウリングに行こうよ」ってだいたいどのような時に使うイメージができますよね。だって初対面の人に、「つかぬ事をお伺いしますが、今日ボウリングに行きませんか？」とは言わないですね。あるいは、18歳の男の子が17歳の女の子をデートに誘うのに、「今日、ちょっと将棋指さない？」とは言わないですね。言ってもいいけど、これちょっと女の子困りますね。「私、今何に誘われているの？」と思いますね。要するに、「ボウリングに行こうよ」じゃなきゃダメなわけです。これが、「ボウリングに行こうよ」というセリフのコンテキストです。書かれた意味です。

私は、大阪大学の大学院では、科学コミュニケーションとか、医療コミュニケーションとか、科学者や医者の方

ちに演劇を通じてコミュニケーション能力をつけてもらう仕事をしています。そこでよく、学生たちにこういうクイズを出します。皆さんが小学校の1年生くらいのお子さんがいると思ってください。そのお子さんが学校から嬉しそうに走って帰ってきた。そして「お母さん、お母さん、今日僕宿題やってなかったんだけど、平田先生全然怒らなかったんだよ」って言ったとします。さあ、なんて答えますか？学生たちからは「宿題やんなきゃダメ」とか「どうして怒らなかったの？」とか、「良かったね」とか、いろんな答えが返ってきます。コンピューターにこの文章をインプットすると、主に2つの情報がコンピューターに伝わります。一つは、宿題をやらなかった、もう一つは、にもかかわらず怒られなかった。コンピューターは過去の蓄積からしか答えが出せないんで、宿題をやらなかったに対しては、「宿題やんなきゃダメ」という答えが出てきます。もう一つ、にもかかわらず怒られなかったに関しては、「良かったね」「儲かったね」という答えが出てきます。でも、子どもが、お父さん、お母さんに伝えたかったことは何なのでしょう。宿題やなかったのに、怒られなかったよ、平田先生全然怒らなかったんだよ、という言葉のコンテキストは何なのでしょう。これは、実は、「平田先生優しい」とか「平田先生大好き」とか「平田先生のクラスで良かった」とかの気持ちを伝えたかったのではないかと、そう考えないと、「嬉しそうに走って帰ってきた」の部分の説明がつかなくなってしまうからです。嬉しそうに走って帰ってきてまで、宿題やなくて儲かっちゃったよと伝えたいひねくれた小学生、どこにもいませんね。本当に伝えたかったのは、平田先生に対する気持ちなんじゃないんだろうか。これもコンテキストなんです。5歳の子どもでも、小学校1年生でも、みんなコンテキストを使ってコミュニケーションを行っています。

あるいはこういう話もあります。皆さん末期ガンの患者さんが入る終末医療の機関、ホスピスはご存知ですね。ある50代の働き盛りの男性が入院してきました。余命半年、と。奥さんがつきっきりで看護をしています。看護師がある解熱剤を投与するんだけど、なかなか効かない。そしてその奥さんが看護師さんに、「なんでこの薬使うんですか？」と聞いたわけです。ホスピスに集められているのは有能な看護師さんですから、看護師さんは「こういう薬で、こっちの薬の副作用でなかなか効かない。もうちょっと頑張りましょうね」懇切丁寧に優しく説明をする。奥さんはその場では納得するわけです。ところが、翌日なるとまた同じ質問をするんですね。また一生懸命答える。毎日繰り返されるわけです。どんな優秀な看護師さんでも人間ですから、だんだん嫌気が差してきますね。この人クレー

マーなんじゃないの、とナースステーションでも問題になります。ところがある日、ベテランのお医者さんが回診に行った時にですね、やっぱり奥さんが同じように食って掛かったんですね。「どうしてこの薬使うのか」と。そして、そのお医者さんは一言も説明せずに、「奥さんつらいね」と言ったそうなんです。で、その奥さんはその場では泣き崩れたんだけど、もう二度とその質問はしなくなりました。奥さんが伝えたかったこと、訴えたかったこと、聞きたかったことは、薬の効用なんかじゃなかったことです。そうではなくて、なぜ、私の夫だけが今ガンに侵され死んでいかなければならないのかということを、誰かに訴えたかった。誰かに伝えたかった。もちろんその答えを、近代医学は持っていません。科学はHowやWhatについては、答えられるんですけども、Whyについてはほとんど答えられないんですね。大雑把には答えられますよ。「この人食生活が悪かった」とか、「タバコ吸いすぎです」とか。でも、同じだけタバコ吸っても、がんになる人もならない人もいますよね。じゃあ、「奥さんつらいね」と言ったところで、ガンが治るかと言ったら、治りません。治りませんが、皆さんご承知のように、ホスピスというのは、ガンを治すための施設ではないんですね。治らないガンの患者さんとそのご家族に、残り半年間を有意義に充実して過ごしてもらうための医療機関です。だとすれば、その患者さんがどう生きたいのかというコンテキストをくみ取らないと、治療には当たれないということなわけです。でもちょっと考えていただければわかると思うんですけども、余命半年と言われて、じゃあ半年間こうこうこう過ごしたいです、と理路整然と説明してくださる患者さんの方が稀ですよ。みんな泣いたり、わめいたり、パニック状態になったりする。その中からこのコンテキストをくみ取らないと。「どうしてこの薬使うんですか？」という奥さんの悲痛な叫びから、そのコンテキストをくみ取らないと、治療行為には当たれないということなわけです。

実際私、10年前に大阪大学に呼ばれた時に、医学部出身の副学長からこんなことを言われました。「昔は、医者や看護師なんて言うのは、病気を治してあげればみんなから感謝された。貧乏だけど、誇り高い、いい仕事だった。でも今は、医療が高度化しすぎて、もう治すということ自体、誰にもわからなくなっている」。1分1秒でも延命したいのか、痛み緩和したいのか、家族と一緒にいたいのか、仕事を少しでもしたいのか、一人でひっそり死にたいのか。一人の患者さんの中にも複数の気持ちがあります。ご家族なんてみんなもうそれぞれです。でも治療法は決めないといけな。どういう治療をするか。しかも医療が高度化すればするほど、いろんな治療のオプションが出

てくるわけです。いろんな治療のオプションはあっても、決めるのは人間なんです。だから、医療が高度化すればするほど、コミュニケーションの方が重要になっていく。どう生きたいんですか？ということ、理解できない医者だと、治療ができない時代になってしまった。「そういうことを少しでもくみ取れる、医者や看護師を育てたいので、劇作家であるあなたを大阪大学へ呼びました」と、私は当時言われました。これもコンテキストを理解するということです。

どんな脳科学者、どんな人工知能の学者に聞いても、人間と同じだけのコンテキスト理解ができる、ロボット、コンピューターは、後30年や50年は無理だろうと言われてます。皆さんが元気なうちは、まだ無理ってことですね。ということは、子育てや、教育、介護や看護はやはり私たち人間がやらざるをえない。ロボットやコンピューターはいくらでもその手助けはしてくれるけれども、最終的には私たちが行わざるをえない。なぜなら、皆さん、子どもたちと普段から付き合っているからわかると思うんですが、子どもに代表される社会的弱者は、コンテキストでしか気持ちを伝えてこないからです。大人から見たら、平田先生が好きなら、平田先生が好きって言えばいいじゃんと思うけれども、それを宿題の話で伝えてくるでしょ？全然関係ない話で気持ちを伝えてきますよね、子どもというのは。これを理解できるのは今のところ人間だけなのです。

今、リーダーシップ教育というものが強く叫ばれます。そこで言うリーダーシップというものは、人を引っ張っていく力とかですね、ディベートに強いとかですね、行動力があるとか。もちろんそういうリーダーシップも必要だと思います。しかし、これからの日本社会で、もう一つ必要なリーダーシップは、この社会的弱者のコンテキストを理解する能力なんじゃないかと思います。論理的にしゃべる能力はもちろん必要です。今、日本の教育では、ロジカル・シンキング、クリティカル・シンキングとかがたくさん言われます。論理的にしゃべる力、必要です。でも、もう一つ大事なのは、論理的にしゃべれない人の気持ちをくみ取る能力なんじゃないか。少なくとも、社会のリーダーになる人たちには、そういう力の方が、より重要なのではないかということなんです。

日本では今、コミュニケーション能力、コミュニケーション教育とヒステリックなほどに叫ばれています。しかし本当に必要なコミュニケーション能力というのは、社会的弱者のコンテキスト、社会的弱者の想いに、自分の想いを重ねられるような能力なんではないかということなんです。ただ、こういう話をする、大阪大学の学生たちはとてもまじめなので、「それってとっても大変そうです」

と言います。僕はよくそういう学生たちには、「普段はみんな普通にやっているんだよ」って話をします。例えば、18歳の男の子が、17歳の女の子に「ボウリング行こうよ」と言っていたとしますね。それを皆さんがまたま立ち聞きしたとします。立ち聞きしてて、「ああ、この男の子、ほんとにボウリング好きなんだな」と思いますか？これ、どう見てもデートに誘ってるんですよね？女の子が「え？ボウリング？」って言ったら、「じゃあ、映画にする？」って言いますよね？でも、これ、コンピューターは全くわかりません。「ボウリングに行こうよ」には「好き」も「嫌い」も入ってないんですよね。これを情報価値判断と言います。コンピューターは、情報をフラットに扱います。私たち人間は、価値判断をしてから、情報を扱います。なので早い。でもよく間違えます。これが人間のコミュニケーションの特徴です。私たちは、普段はそのようにコミュニケーションをとっているのですが、例えばビジネスの現場のように時間が限られていたり、医療の現場のようにパニック状態が起きやすかったりすると、相手のコンテキストを上手く受け止めずに先に進もうとして、コミュニケーション不全、ディスコミュニケーションが起こるということなんです。

じゃあどうすればいいかということなんですけれども。「旅行ですか？」簡単なセリフですね。しかしなかなか上手く言えない。今まで皆さんが受けてきた国語教育ですと、Aさん(話し手)がどう言うかを一生懸命考えてきました。国語の朗読の時間だったら、気持ちを込めて丁寧に読みなさいとか。あるいは演劇だったら、腹式呼吸できれいに言いなさいとか。体を鍛えて、パワーとスピードで言いなさいとか。丁寧にきれいな、パワーもスピードもAさんの能力、あるいは努力に関わってきました。でも現実の社会はどうでしょう。話しかけるかの大きな要素は、Cさん、話しかけられる相手によるものだったのですよね。すると困りますよね、Cさん役をやる人。話しかけられやすい演技って何？ってこと。これ、体鍛えても駄目ですよ。体鍛えて、頑丈になったら、話しかけにくくなっちゃいますから。そこで、こういうものを関係とか、場の問題として捉えていこうというのが、90年代以降に出てきた、新しいコミュニケーション教育の考え方です。話しかけやすい環境になっているの？話しかけやすい関係になっているの？ということです。実際のワークショップでは、例えば高校生のA君が「旅行ですか？」というセリフをなかなか上手く話しかけにくいという時に、このCさんに、A君がサッカーが好きだったら、Cさんにサッカーの雑誌なんか持ってもらって。

「サッカー好きなんですか？」

「ええまあ」

「どうですかねえ？代表チームは」

「頑張って欲しいですね」

「ところで、今日は旅行ですか？」

という感じになれば結構言えるようになります。

要するに、どうすれば、コミュニケーションがとりやすくなるか。これを私たちは、コミュニケーション・デザインと呼んでいます。コミュニケーションの問題を一直線に捉えないで、つまり、個人の能力の問題だけで捉えないで、きちんとそれを場、環境の問題として考えていくということです。例えば先程の医療の問題で言えば、本当に大事なものは、説明の上手いお医者さんを作ることも大事なんですけれども、患者さんが、お医者さんと話がしやすいような椅子の配置になってるかどうとか、壁の色はどうとか、天井の高さはどうとか、受付から診察室までの道のりが患者さんを緊張させてはいないかどうかとか、これ全部デザインの問題ですよ。あるいは、事故が起きにくい組織になっているかどうか、事故が起きた時に下から上へきちんと情報が伝わるかどうかとか、組織や情報のデザインの問題です。もっと広げていくと、病院の建物自体が、患者さんを緊張させてはいないかどうかとか。これ、建築のデザインの問題です。もっと広げていくと、街の中のどこに病院があればいいの？交通アクセスはいいの？これは、まちづくりや交通アクセスのデザインの問題になってくる。患者さんがお医者さんに質問がしにくいのは、お医者さんが威張っているからではなく、患者さんがバスを3台も乗り継いできてヘトヘトになっているからかもしれない。原因は何にあるかわからないんです。原因が何にあるかわからないから、それを複雑系の問題、原因を一つに特定するのではなくて、いろんな原因が複雑に絡み合ってるんじゃないかと考える。これがコミュニケーションをデザインするという考えです。

ここまで申し上げれば、もうすでに共感していただいていると思うんですけども、演劇も、そしてキャンプもまさにこのコミュニケーションをデザインしている。上手くいったキャンプというのは、おそらくこのデザインが上手くいっているんじゃないか。演劇も同じなんです。ただ単に俳優の能力が高いだけでは、いい演劇にはならないんです。この、上手いコミュニケーションの場が作れているかどうかということが、演劇を成功に導きます。おそらく、皆さんが行っていらっしゃるキャンプも、良いキャンプ、ちょっと失敗したキャンプ、いろいろご経験があるんじゃないかと。実はこのデザインが、非常に重要なんではないかということなんです。

では、演劇教育をなんで学校教育でやっていかなきゃいけないのか。そこだけちょっと整理していきます。

コミュニケーション能力は、基本的に、子どもたちが遊びの中で身につけてきたものですね。ままごととか、ごっこ遊びとか。大阪大学の大学院に入ってまでですね、演劇やってコミュニケーション能力をつけるなんていうのは、おこがましい話ですね、本来はもっと自然に身につけるものなんだと思うんです。しかし、それがなかなかできない環境になってきた、という風に私たちは整理していく必要があるんじゃないかということです。例えば、地域社会の崩壊。昔、駄菓子屋さんてのは、絶対にコミュニケーション能力の高い子が得するシステムでしたよね。駄菓子屋のおばちゃんと仲良くなると、5回に1回当たりくじを引かせてもらったりして。それを見て、子どもも早く大人になりたいと思う。今はコンビニエンスストアに行けば、どんな子どもでも無言で買い物できるんです。ですが、子どもたちのコミュニケーション能力は上がってるくらいなんです。少なくとも、音感とかリズム感とか、ファッションセンスとか、これ全部自己表現ですから、そういうものは、上がってるくらいなんです。

しかし、社会がグローバル化していく中で、社会が要求するコミュニケーション能力はもっと上がっています。しかも、子どもたちが育つ環境はコミュニケーション能力がいない方に、いない方になっている。例えば、昔のように兄弟が多ければ、子どもがケーキ、ケーキと言っている、無視されるか、せいぜいケーキぶつけられるくらいでどうにもならなかったんですけども、今は、もう優しいお母さんで、一人っ子だと、ケーキって言うとすぐケーキ出しちゃうでしょ。もっと優しいお母さんだと、ケーキって言う前に、ケーキ出しちゃいますね。言語っていうのは、使わなくてすむものは、使わないように、使わないように、変化するという原則があります。ケーキと言って、ケーキが出てくるんだったら、ケーキを焼きたいのか、ケーキを食べたいのか、ケーキを買いに行きたいのか、ケーキをぶつけられたいのか、言わなくなります。これ、子どもの能力の問題ではないのです。社会がそういう風に変化している。コミュニケーションを必要としない社会になっている。子どものうちは、ですよ。しかし、現実には、グローバル化によって、非常に高度なコミュニケーションを大人たちは要求します。要するに、このギャップが広がっているということなんですね。このギャップを、じゃあどこで埋めるのか。これを、こんな社会を作ってしまった私たち大人が、真剣に考えていってあげなきゃいけない。そのように整理をしていってあげないとですね、単純に、今の子どもたちのコミュニケーション能力がなくなっている。だ

から演劇だ、だからキャンプだ、とどんどん子どもを追い詰めるだけになってしまいます。そうではないんだと。そもそも、子どもにはこういう能力があって、そもそも自然状態から、だんだん人間の社会性を身につける。そういうシステムを私たち人類は築いてきたにもかかわらず、それをたった50年、100年のこの近代社会の中で、そういうものを急速に失ってしまった。だからこれをどう回復するんだという風に整理をしていくべきなんではないかということなんですね。

さて、最後にせっかくなので、今日大変素晴らしい開会式でした。私も仕事柄よく、不登校の子どもたちと付き合います。フリースクールではよく演劇を使っていたくんです。居場所が作りやすいということだと思います。不登校の子どもたちは、それまでいい子だった子たちが多いですね。口を揃えて、その子たちは「いい子を演じるのに疲れた」という風に言います。僕のところに来るような子たちは、引きこもりからの回復期が多いので、その子たちにはですね、私は演劇のプロですから、「お前たちは本気で演じたことがないくせに、いい子を演じることに疲れたなんて言うな」とからかいます。もう一つ必ず言うのが、「本当の自分はこんなじゃない」と言います。そういう子たちには、「本当の自分なんか見つけちゃったら大変なことになるよ。新興宗教の教祖になるしかないよ」と言います。大人は、サラリーマンという自分、教員という自分、家に帰ったら、夫という自分、父親という自分、あるいは親と暮らしていれば子どもという自分、週末はボランティアのサークルの職員、スタッフとしての自分、趣味のフットサルサークルのフォワードの自分とか、いろいろな社会的な役割を演じ分けながら、かろうじて自分の人生の時間を前に進めています。そんなことを大人はみんなわかっているのに、子どもには、本当の自分を見つけないと。人間はそんなもんじゃないんじゃないかということです。玉ねぎはどっからが皮で、どっからが玉ねぎってことではないんですね。皮の総体が玉ねぎを形成しています。人間もそんなもんなんじゃないかということです。これを演劇や、心理学の世界では、ペルソナと言います。ペルソナというのは、personの語源となった人格という意味と、仮面という意味を兼ね備えています。要するに、仮面の総体が人格を形成しているんじゃないかということです。人間はいろんな仮面をかぶって生きているんだよということです。

ただ教育の問題で言いますとね、やはり、一つの仮面が重すぎると、体が傾いて。子どもは辛くなっちゃうんじゃないかと思うんです。今で言うと、やはり多少、学校での

仮面が重すぎるんでしょうね。昔だったら、学校があって、でも放課後はドラえもんに出てくるような原っぱという世界があって、また家に帰っても兄弟もたくさんいて、と。これ、そんな難しい話じゃありません。学校で同世代の友だちと無邪気に遊ぶ。でも、そこでなんか嫌なことがあっても、原っぱに行けば優しいお兄ちゃん、お姉ちゃんが待っていて遊んでくれる。要するに甘えられる自分がいる。それから、家に帰ると今度は、弟や妹がいてしっかりしなきゃいけない自分がいる。無邪気に遊べる自分、甘えられる自分、しっかりしなきゃいけない自分。いろんな自分を演じ分けることで、子どもは少しずつ社会性を身につけてきたんじゃないかと思うんです。

例えば、軽度アスペルガーの子どもたちの中には、年上の方が話しやすいという子がたくさんいます。これは日本語の問題もあるのですが、敬語の方がずっと変化がないので、ずっと敬語だけしゃべってればいいので、年上の方が話しやすいって子が一定数います。すると、おそらく、軽度アスペルガーの子たち、昔、そんな名前すらつけられていなかった時代には、原っぱでそういう社会性を身につけてきたんじゃないかということです。でも今は、学校での時間が長くて、部活動もあって、それからずっと放課後もLINE でつながってたりするとですね、やっぱり学校での仮面が重すぎて。これが重すぎると、日本で言う“キャラ疲れ”ですね。自分のキャラクターに疲れてしまう。それが不登校、さらには引きこもりにつながっていくのではないかと思います。

この、不登校の子どもたちが「いい子を演じるのに疲れた」と言っていることを10年以上扱ってきたのですけれども、その中で最もショックを受けたのが、あの秋葉原の連続殺傷事件です。秋葉原で多くの死者が出た殺人事件がありました。その加藤死刑囚がですね、犯行直前に携帯サイトの掲示板に「いい子を演じさせられてきた」と書いたんです。「いい子を演じさせられてきた」。こんな日本語があるのかと、最初見た時思いました。演じる、というのは主体的な行為でしょ。演じさせられてきたって、誰に？って思いますよね。彼の場合は明らかに母親に演じさせられたという強迫観念があったわけですが、問題の本質は明らかです。演じることがいけないんじゃないんですね。それを演じさせられると感じた瞬間に、仮面が重くなってしまふわけです。

私たちは演じる生き物です。厳密に言うと、人間は演じ分ける生き物です。例えば、ゴリラは父親になると、父親

ゴリラという役を演じると言われています。餌を前にすると、ニホンザルなんかは、ボス猿でも小猿と餌を取り合ったりするんですね。しかし、ゴリラだけは、父親になった瞬間から、子どもや自分の妻に餌を分け与えるという行為を始めます。いきなりそういう行動が始まるのです。明らかに演じていると考えられています。でも、そのゴリラも演じ分けるという行為はしないんですね。子どもに対する態度と、妻に対する態度が違うってことはないんです。演じ分けるのは人間だけなんです。なぜなら、人間だけが、家族という単位と、群れという単位の両方に所属するからです。ゴリラは家族単位で行動します。チンパンジーは群れ単位で行動します。この両方に所属するのは人間だけなんです。厳密に言うと、グラダヒヒという特殊な猿がいて、これは両方に所属するんですけども、この話をすると後2時間かかってしまうので、ちょっとはしります。

だから、私たちには高度なコミュニケーション能力が備わっています。あるいは、逆に言うと、この高度なコミュニケーション能力が、人間の複雑な社会を支えています。だとするならば、この演じ分けるという能力は、人間を人間たらしめている最も重要な能力の一つと考えられる。でも、私たちはすぐ子どもたちに、もう演じないでいいよ、と言ってしまいます。「いい子を演じるのに疲れた」という子どもたちに、もう演じないでいいよ、本当の自分を見つけないといけない、大人の欺瞞にすぎない、嘘にすぎないと僕は思います。少なくとも、教育の役割は、いい子を演じるのに疲れない子どもを作ることです。できることならば、いい子を演じることを楽しむくらいの、したたかで、しなやかな子どもたちを作りたい。日本語では、残念なことに“演じる”という言葉にマイナスなイメージがあるんですね。自分を偽るとか、嘘をつくというイメージがあります。ですから、このいい子を演じるのに疲れない子どもを、ちょっと受け入れがたいと思われた方は、「様々な社会的役割を担う」と言い換えてもいいです。様々な社会的役割を担うことに疲れない子どもを作るのが、教育の目的です。一つの能力を伸ばすのではなくて、様々な役割を担う。そしてそれを交換していく。それはまさにキャンプじゃないですか。それはまさに演劇じゃないですか。ここに演劇とキャンプの大きな親和性があるんじゃないか、と思います。ぜひキャンプを通じて、いろいろな役割を担う、そしてその役割を担って、共に楽しむ。そのことに新しい価値を創造していく。そういう方たち、若者たちを育てていただければと思います。



基調講演 1 「地域の未来とキャンプ」

10月29日・大会2日目

長年にわたり、世界中で「地域に根ざした教育」に携わってきた高野孝子氏をお招きし、広い意味での「キャンプ」と社会とのつながりについてのお話をさせていただきました。



講師プロフィール 高野孝子

NPO 法人エコプラス代表理事

早稲田大学教授

NPO 法人エコプラス WEB サイト : <https://ecoclub.org>

今日は、キャンプというタイトルでお話させていただくのですが、ここでお話しするキャンプは広い意味です。人と自然が関わる、その中にあるいろいろな活動のことをキャンプと呼ぶという風にご理解ください。そして今日はそれに「社会」をつなげてみたいと思っています。今回の大会の大きなテーマが Camp for a better society、より良い社会のためのキャンプということでもあり、その枠組みでのお話です。



これはつい数日前に自宅から撮った写真です。ちょうど紅葉が始まっていて、今どんどん、刻一刻と進んでいます。見えている山々が越後山脈の一部となります。巻機山(まきはたやま)ですね。あの山の向こう側が関東へとつながります。私の家からはこのように、田んぼが広がっております。実はこの場所は、「いいところがあるぞ。お前が何もしなくても、素晴らしい光景を他の人たちが作ってくれる」と言って、父が教えてくれたのです。実際、もう少し季節が進むと、降雪でホワイトアウトの状態になります。冬の南魚沼です。でも春がくると、雪が溶けて、田んぼに水をはられて、しばらく静かな状態になります。この時が最高に美しいです。山が写っていて、木が写っていて、夜

は星と月が写ります。そしてカエルたちの鳴き声がどんどんどんどん大きくなってきて、まるで、湖の中に暮らしているような気分になる時です。そして時間が経つと、次は稲が育ち、美しい緑の光景となります。

今日は、「場」というものに注目したいので、まずこのような写真を見ていただきました。

私はこの新潟県南魚沼市(合併前の名前は塩沢)で生まれ育ちました。町の部分で生まれ育ちましたが、当時は牛もいましたし、田んぼもありました。今暮らしている場所はスキー場のすぐ側ですが、農村地域になります。この地域を離れてから、私は世界のいろいろな場所に行くチャンスがありました。自然の中での活動もたくさんありまして、アマゾン川を下ったり、オーストラリアの海の中で調査をしたり、アラスカ、カナディアンアークテクなどでの出会いもあったりしました。また、空や海の中や川、北極や南極や暑いところ含めていろんなところで活動しました。身体で得た知識、経験というのはすごく大きいものがあります。そして地球を立体的に見ることもつながりました。その大きなエネルギーの中で人は生かされているのだなとも感じました。でも、私は、自然の中での旅そのものやいわゆる冒険をしたくてやってきたのではなくて、むしろそこにどんな暮らしがあるのか、が知りたかったのです。自然に近い暮らしをしている人たちと出会うきっかけが最初でありまして、その人たちに魅せられたというか、人としての力がとても大きい、と思ったんですね。私も同じ人間なんだから、同じことができるはずだ、って思ってみたり、例えば、聞く力、見る力、物理的な力(パワー)とかも含めて、すごく大事なものを持っていると感じたんですね。

特に、私が一番最初に一人で、守られない形で、旅に出たのはアマゾン川なのですが、そこで出会った人たちが強烈だったんです。人の価値を考えさせられました。その後あちこち旅しながら、多様な人たちに出会い、彼らから教

わったことが、今の私の哲学、活動の基盤になっていると思います。

最初にもらった問いがこれです。

「豊かさって何だろう」

今の私たちは本当にクリティカルな時を生きていると思います。文明がどこまでもつのか、というクリティカルな時です。私たちが死ぬまでは大丈夫だろう、と皆さん思っていますよね。でも、そのすぐ先はわかりませんし、今私たちが何をやるかがその先を決めるという、そういう時期に入っただいぶ経ちます。今、すべての私たちが、「豊かさって何だろう」、「幸せって何だろう」と問うことが、実は未来につながっていくんじゃないかと思っています。私はその問いを持って「エコプラス」という活動を25年前に始めました。人、自然、異文化というものを柱にして、少しでも平和な、“豊かな”、この豊かなが曲者なんですけど、豊かな社会につながるよにということで、小さいですけども、活動を続けてきています。そこで大事にしているのが、多様な人たちとの共同作業です。「豊かさって何だろう」というこの問いを、直接掲げることもありますし、プログラムの中に埋め込んでいる時もあります。関わった人たちの中で、違うものと一緒に生きていくという姿勢につながったらいなと思ってやってきています。そして大事なものは、身体性を伴った経験、体験です。今、大学でも教えているのですが、学生さんたちと話をしたり、旅やこういうNGOの活動をしながら、疑いなく私たちはグローバルイゼーションの中に生きていくことを実感します。そして大きな恩恵を受けてきています。でも同時に、影の部分が日増しに濃くなっていくように感じます。でもこの影が、実に多岐にわたっていて、間接的に関係し合っていることもあります。貧困だとか、紛争だとか、テロだとか、飢餓だとかですね。それは日本国内でも起きていることです。不寛容性だとか、いろんな課題が出てきています。もっともっとマイクロな課題も、グローバルイゼーションにつながっていて、今の社会の在り方が起こしている、子どもたちの中に埋め込んでいる課題もたくさんあると思うんですね。では、そういったものをどうしたら良いのでしょうか。今、キャンプに関わる私たち、親としての私たち、もしくは子どもとしての私たちは、こういったことにどう関わっていったら良いのか。私はいろいろな関係性を回復することが、その解の一つにつながるんじゃないかと思っています。ここで言う関係性というのは、「私」と「他人」だけではありません。もっと多様なもので、それもバーチャルなものではなく、身体性を伴うような関わり方です。私とあなた、私と私、家族と私、そして時間と私、スパー

ス(場所)と私、などといったいろんなものとのつながりです。そういったものが、合わさって、自分の形が見えてくる。自分は何者なのか、どうやってここに生かされてきているのかということがわかってくるのではないのでしょうか。そしてこれが、今グローバルイゼーションに伴って揺らいでいることを改善するために、少し貢献するんじゃないかと思っています。深い自然体験、人と一緒に関わることで、その場に根ざすことというのが、今ほど重要な時ではないのではないのでしょうか。ここで、地域や場に根ざしたキャンプの効果があるのではないかと考えています。

では、その場、地域というものは何かということですが、決まった定義があるわけではないですが、ここではただの人々の集まりということではなく、ただの場所(スペース)でもなく、先程申し上げたようないろいろな関係性からなっているものだと思えてみたいと思います。

これまでは体験から何かを学ぶということが、私たちの活動にとって大切だと申し上げてきましたが、こういった問題意識を持ってから、場から学ぶという新しい柱もできました。

私は、旅をしながら、人と自然の関係というものに興味を持ち、センス・オブ・プレイスといったものを尋ねて世界を回っている時に、教育に関してハッとさせられることがあったんですね。ミクロネシア地域で、電気や現代的な機械を意図的に排除している島があります。そこを訪問していた時のことなのです。あるおじいさんと立ち話をしていました。目の前にたくさん島の若者たちがたむろしていました。ふんどしをつけていて、すごくたくましい20代の意気盛んな若い人たちでした。でも、そのおじいさんが彼らを見ながらふと私に言ったのです。「見てご覧よ。この若い連中は、大学まで出ているんだけど、ここでこうやってぶらぶらしているだけなのだよ」と。つまり、その若い彼らは、島を出て高校に行き、大学に行き、高等教育を受けてきたわけですが、でもその高等教育は、島では役に立たない。島の暮らしでは役に立てることができない。一方で何年も島を離れている間に、彼らはこの場所で生きていく術を身につけられなかったんです。小さい頃の記憶はあるけれども、発展的に教わらなければならない、一番大事な10代から20代にかけての機会を完全に逃してきてしまったわけですね。

そんな話しをしていたら、その後訪ねたスコットランドで、「スコットランドも一緒だよ」と言われたわけです。勉強をしていくと村から離れていく、村や島であるほど、親は一生懸命勉強をさせようとする、自分たちが受けなかった教育の機会を子どもたちに与えたいという教育熱心な親が多いのだけれど、その子どもたちはみんなその地元

から離れて帰ってこない、と。その話を聞いて、「それ、私！」と思ったわけです。新潟県の田舎に生まれた私は、高校を出て東京の大学へ行き、ずっとそのままだったわけです。「教育とは何のためにあるのだろう」とハッとしたのです。私は学校で何を得て、それは何のためだったのだろう。こんな風に地域にどんどん人がいなくなって、学校で教育を受けて帰ってきても役に立たない、これはおかしいのではないかと思い始めていたら、世界中でそうだったと。アメリカではとっくの昔からそのような問題意識があって、こんなことが言われてきていました。学校教育が一律に、都市労働者向けの教育をしているという批判なんです。いろいろな意見があると思うのですが、チョイスがなくなってしまうということです。例えば、ある小さな村で暮らしを立てたいと思っても、その村で暮らしを立てるすべをその学校が与えていない、他のことを与えてしまうので、街に出て会計士になったりとか、そういう風になってしまうこともあるわけですね。こういった問題意識があって、場に根ざした教育、地域に根ざした教育、教育の在り方というようなものが問われるようになっていきます。そうはいっても現代はグローバリゼーションです。AI も進化しています。仕事がロボットに置き換わってしまったりとか、そんな時に地域とは何か、どのような意味があるのか、と考えるのは当然です。田舎ではなく、みんなが都市を目指すのが良しとされた時期がありました。国を離れてもっと大きなチャレンジをしに行こう、といったことが言われることもあります。では地域を見つめる意味とは何なのでしょう、場に根ざす学びの意味とは何なのでしょう。6つくらい私は思いつくのです。

**グローバリゼーションの時代、
地域に注目する学びの意味は？**
Why do we pay attention to "local"
in globalised time

1. アイデンティティ Identity
2. 学ぶ意欲と意味 Significance of learning
3. 役割や貢献 Ability to contribute
4. 周囲の自然や社会環境への関心 Interests in surrounding nature and society
5. コミュニティ、民主的な社会の構築 Building social capacity
6. 変化し続ける社会に対応する能力 Ability to cope with changing society

自分は何か家という、アイデンティティを獲得するためには、場を知ることや多様な関係性を築くのが大事だと思うのです。次に、学ぶ意欲と意味、意味がある学び。そして社会での役割と貢献。社会の中で自分に役割がある、場所がある、誰かの役に立っているという実感がある、というようなこと。さらに、自然や社会環境への関心。地域に

根ざした人づくりは、コミュニティや民主的な社会の構築につながります。今、出したようなことが、場に注目した学びの価値ではないかと思うのですが、上の5つは、最終的に最後の、急速に変化するこの社会への対応力をつけるということにつながるのではないかと思います。これはすべてが絡み合っていて、それぞれ独立した項目ではありません。

アラスカの事例をお話しします。アラスカの先住民たちは狩猟採集民族としての歴史を長く持っています。今でも、街ではない部分では、大地から直接いただくものが、ローカル経済を回しています。狩りや川や大地から採るものがすごく大事なんです。アラスカがアメリカ領になって150年位経つのですが、そうってから学校というものが入ってきて、学校に行くには村が点在しすぎているので、物理的に子どもたちをコミュニティや親から引き離して寄宿舎に入れたんです。そして、アメリカの別の州から来た人たちが先生として、英語で、子どもたちに、いわゆる教育をしました。子どもたちは一切わかりません。先生との言葉も違うし、アラスカにはたくさんの民族が住んでいますから、子どもたち同士、お互いの言葉も違うんです。そして教科書には、アラスカにはないような、バスだとか、芝刈り機だとか、チューリップだとかが書いてあり、ちんぷんかんぷんです。そういう中で子どもたちはドロップ・アウトしていきます。アラスカの先住民の子どもたちは馬鹿だと、長い間思われてきました。そうやって村に帰ってきた子どもたちは、今度は母国語が十分使えない、狩猟の技術を知らない、自然との関わりが断絶されてしまったために、ミクロネシアの例のように、自分の生まれ育った場所で役に立つ人になれないんですね。これは問題だとして、アラスカ中の先住民の中で、教育を見直す動きが始まりました。フェアバンクス大学などが中心となって、いろいろなムーブメントが起こりました。私が縁あって訪ねた内陸部にある一つの村のロシアン・ミッションの話をしたいと思います。

ロシアン・ミッション、見ていただいたこれがすべてです。人口が360人位の村です。ユピックという民族が暮らしています。ユーコン川流域の湿地帯で、辺りには道路がありません。なので、この村はこの村で完結しないといけないのです。ですが、この大地で生きていく術を知らない世代が、3世代、4世代、5世代になってきています。なので、釣りの方法や、いどこに行けばどんなものが採れるかなどを、親も教えられないんです。かと言って現金をここで得るのも、また難しいのです。そのような中で始まったのが、学校が地域に根ざした教育を取り込んでいく試



みです。具体的には、この村で生きていくのに必要な活動や知識を学校の授業として、村の人たちが講師になって教えたということです。例えばビーバーの罠を仕掛けるとか、カリブーの狩りに出かけるとか、ベリーを摘むといったことです。そしてただやるだけではなく、事前に本やインターネット、年上の村人に聞いたりすることで準備、リサーチをし、そして繰り返し外に出かけて活動し、記録にとりインターネットで発表する、文字化する、ということを行います。その他、解剖などは理科の素材に、算数や国語の素材にもなり、活動内容を教科と結び合わせていったのです。なので、カリキュラムがまずあって、子どもたちをそれに合わせるのではなく、ここの暮らしと子どもたちにカリキュラムを合わせて作った、作り直したんですね。そこで校長先生がおっしゃっていたのは、自分たちがこれを行う理由は、ここの暮らしに必要な知識と技術を子どもたちに与えること。なぜならば、この学校を出た後、9割以上の子どもたちがここに残るという選択をするのです。だからここで生きていくために必要なことを教えなければならない。そして同時に(自分が)何者かを知ることが課題になっています。高い自殺率、ドラッグ問題、ドメスティック・バイオレンスといった、アラスカの先住民族の中で起きている様々な社会問題が、もしかしたら、誇りや夢を失った結果なのではないか、自分が何者かわからなくなっていることが理由ではないかと、様々な研究で指摘されています。ユピックは、人、スピリット、自然という概念があり、その関係の中で自分たちが生きているという世界観、考え方を持っています。大地とのつながりを取り戻すということは、彼らにとっては自分を取り戻すということでもあったのです。

このカリキュラムを始めて、いろいろなことが変わりました。例えば、レイチェルという女の子は、最初は学校が大嫌いでした。同時にこの村も嫌いで、早く出て行きたいと思っていました。自宅も小さく、その上姉弟が多く、プライバシーもないような生活なので、気持ちはよくわかり

ます。しかし、村の外に出たからといって静かに暮らしていけるかというところではありません。なぜなら、村の外は手付かずの大自然、野生の世界が広がっているからです。つまり、野外での知識や技術を持たない人にとって、それは死を意味します。だから村の中にいざるをえないのです。しかし、その彼女が、この場に根ざしたカリキュラムに則った教育を受けてからは、「ユピックでいることはとてもスペシャルなこと。私たちの文化を通じて私たちは川や大地とつながっている。彼らは私たちの家族でもあるし、彼らは私たちが必要なものをすべて与えてくれる。」と作文に書くようになりました。他にもたくさん良いことが起きました。例えば、子どもたちが学校に行きたくてしょうがなくなってしまいました。ドロップ・アウトして学校に来なかった子どもたちが「また帰ってきていいですか?」と、戻ってくるようになったのです。みんな狩りに出かけた、こういうことがしたかった、と。きちんと勉強もするようになりました。そうすると学校の先生との関係も変わり、コミュニティと学校との関係も変わり、子どもたちがやりたくてやるようになり、彼らの学びが意味を持つようになったのです。そうして成績がどんどん良くなって、アラスカ州の共通テストで、他の学校が成績を落とす中、この学校が唯一、教育改善指標という指標をクリアしたのです。この時にアラスカ州の教育者たちから「彼らは馬鹿ではなかった。間違っていたのは自分たちであった。自分たちが彼らに適したやり方での教育を知らなかったのだ」という反省が出てきました。

このような「地域に根ざした教育」を行っている、他の3つのキャンプをご紹介します。

アサバスカン・インディアンたちのキャンプでは、年長者がワタリガラスの真似をしている場面がありました。ワタリガラスは彼らにとって世界の創造者なのですが、なにより彼らは、とてもよくワタリガラスを観察しています。しっかり観察するというのが、彼らのサバイバルの第一歩なのだと思います。また、この行為はアクティビティとして行われていたのではなく、自然発生的に行われていました。年長者がいるところに若者が集まり、年長者が行うこ

とを受け取っていくという形のキャンプでした。

ユピックのキャンプでは、子どもたちがうさぎの罠を仕掛ける場面がありました。その時、先生役の地元の人は何も具体的なアドバイスはしません。最初にどのように仕掛けるのかやって見せ、後は子どもたちに任せるのです。仕掛けが出来上がってから、「これではうさぎがかからない」と伝え、なぜそうなのか考えさせ、やり直しをさせるのです。そのやりとりを3回ほど繰り返し、ようやくもう一度

手本を見せ、子どもたちに自分たちのやり方との違いに気づかせるのです。そのようにし、体に身につくような教え方をしていました。

イヌイトのキャンプでは、自分たちの先祖がずっと使ってきた土地に、年長者が若者を連れて旅に出ます。年長者は若者にその土地のことを伝え、若者は一緒に狩猟し、その獲物を分配することを体験をします。獲物(肉)を持ってきて分配することで、地域の中で大切な人となることができ、地域の中に役割ができ、さらに自分や家族を誇りに思う体験につながるのです。また、実際の場面では、文字や言葉で伝える場面が非常に少ないのですが、これは、その土地の文化に適した方法で行われるということが一番良いということです。

皆さんも、皆さんの地域に適した方法はどのようなやり方なのか、ぜひ想像してみてください。風土に合った教育と申し上げましたが、私たち、皆さんがどこで学びの場を作るのか、誰と一緒にやるのか、そしてそれは何のためなのか、ということ意識してみると、少し変わってくるかもしれません。そしてできることならば、その地域の課題を意識して取り込んでみる、それが社会につながる一つの窓になると思います。

以上を最初に6つ挙げた中の特に「自分は何者なのか」「学ぶ意味・意欲」「社会への貢献」への例としてご紹介しました。それ以外の「コミュニティ、民主的な社会への構築」については、「人を信頼する力」「人から信頼される人」「コミュニケーション、コンテキストを理解する力」、それが民主的な社会ではとても大切です。自分が思うことをわかりやすく伝える力、一方的ではなく、多面的な側面を思い計った上で論理的に説明できる、コミュニティ構築(ソーシャル・キャパシティ・ビルディング)ということにも、場に根ざしたキャンプは貢献できるのではないのでしょうか。そして「自然や社会環境への関心」については、キャンプ指導者の皆さんが得意としているところだと思います。

私のプログラムでは、いろいろな年代の人たちが関わって活動するようにしています。田んぼでは、手での田植えをします。現代では機械化されていますから、地元の子供たちでさえ、このような田植えはしません。それをあえて無農薬の田んぼを使わせていただき、異なる年代、様々な人たちと一緒に素足で田んぼに入り、植えるというのをします。日本にはお米を食べる文化があります。主食として食べていますが、田植えから稲刈りも含めて、お米がどのように育つのか、経験として理解している人がどのく

らいいのでしょうか。どうやって稲が育っているのか、米がなっているのか、知っている人は少ないように感じます。

自然観察のプログラムでは、普段だとすぐに通過ぎてしまうような100mもない短い距離を2時間ぐらいかけて観察します。そこにすごくたくさんの生き物、命があるということに気づきます。たくさんの希少種があることを知ったり、専門家からその生態を聞いたり、村の年長者から聞く地域に密着した知識を得ることができます。その科学的知識と、在来知が合わさることで、素晴らしい学びの場になり、その子どもたちにとっては自分のアイデンティティになりますし、地元以外の子供たちにとっては、その場の生態系のつながりに興味を持ってもらうことになるのです。

冬の南魚沼は、最近は少ないですが重い雪が積もります。山間地では3m程積もります。これは累積積雪量だと20mほどになり、とても重いものです。ですが、現在独居世帯が増えており、特にお年寄りにとっては、家をつぶしてしまうかもしれないこの雪が恐怖です。そういったところを中心に助けに入ります。外国の人と一緒に活動を行ったりしますが、心からの「ありがとう」を毎回いただきます。雪掘りをする人は、澄み切った空気の中で体を使い、爽快感と達成感があります。もちろん毎日だと大変ですが、たまに行くとなじみやすいです。みるみる雪が片付いて、かつ感謝の言葉を受け取って、すごくいいことをした気分になれるのです。そしてそこから会話が始まります。雪国の暮らしや少子高齢化などの日本の課題についても目を開くことができます。

他の場所では地元の子供たちが、地元の川の調査をするプログラムがあります。科学的な調査をするだけでなく、もちろん遊びもします。そして在来知も共に学ぶことができます。そのほか和菓子屋さんに行き、知っているはずだった自分の暮らす土地について、新たな面を発見します。このようなことを通じて誇りやアイデンティティを育みます。誰かにやらされるのではなく、今まで自分の知らなかったことを、主体的に自分で調べるということ、キャンプやいろんな学びの中に練りこんでいくことで、前述したような様々な力を身につけることができるのではないのでしょうか。こうして社会と関わることで、民主的な社会で動く、それを構築する力を養うことにつながります。またこうしたものは、いろいろな人と対話をしないと成立しないプログラムなのです。大人にとっても、地酒を飲みながら意見交換をするのは、大切なコミュニケーションですが、その子どもバージョンといったところです。多国籍の人たちが関わり、言葉がわからなくても、コミュニケーションができる、怖くないということを知る。コミュニケ

ーションのツールは言葉だけではないということを、共同作業をしながら理解することができます。そうして自信をつけた子どもたちは非常にたかましいです。

今年の春に、雪の中で暮らすキャンプを行いました。その中で、「村の不思議を探す」というプログラムがありました。歩きながら2人1組でなぞを見つけ、かつそれを解くのですが、参加者は夢中になって取り組んで、積極的に村人の家を訪ね、そして子どもの目線で、面白いものを見つけてきたのです。例えば神社の床下の割れたお皿についてどういったものかと疑問を持ち、そのことを村人に尋ね、調べてきました。皿のストーリー自体すごく面白いのですが、彼らにとっては、この村のことを知る良いきっかけになったのではないのでしょうか。この他にも、地元の方でも知らないようななぞもありました。これは逆に地元の方の宿題になりました。

変化し続ける社会に対応する能力とはどういうことか。既存の知識や今あるものでは、5年後の社会に役に立たないかもしれないということなのです。いろいろなことが変わり続けていて、5年後には、今ない仕事の仕事として成り立っているでしょうし、今ある仕事は5年後にはなくなっているかもしれません。5年後にこの仕事に就こうと思って、今準備をしていますが、なくなってしまうかもしれないということです。なので、今の時代は、刻々と変化する中で何を知らなければいけないのか、そしてどうやらそれを知ることができるのか、という力の方がずっと必要なのです。そのためには、人と関わる力が欠かせませんし、調べる力など、いろいろな力が必要となってきます。それが、地域に注目したキャンプから養うことができるのではないかと考えています。

グリーンランドでは、温暖化が問題になっています。これは地球規模で進んでいますが、この問題が現地の人の暮らしを脅かしていることも、この場所でキャンプをすればわかります。実際世界中でいろいろな課題が起きていて、日本も例外ではありません。そこを常に意識し、また、どうやってそこに意識をもっていかなせるか、自然にもっていくことができるか、という点が1つの大切なポイントかと思っています。

ミクロネシアでも温暖化が急速に問題として現れており、大潮の日には、道が沈んでしまうほどになっています。ここを訪れた人たちがこの問題、そして島の人たちの苦悩

や困惑を共有することが自分のアクションにつながる可能性があります。

ヤップ島には、日本が戦時中に支配していた時の高射砲やゼロ戦などの残骸がたくさんあります。ここには、間違いなく70数年前に自分と同じような都市の人が立っていたのだということを思いながら、今の若い人たちが立っています。これは時間との関係性だと思います。今生きている自分は、今生きている自分だけでなく、時間や空間との関係性があるのだということに気づかされるということです。

ミクロネシアのごみ捨て場には、お菓子の袋などのごみがたくさんあります。現地で生産しているものはないので、すべて持ち込まれたものです。世界のどこかで生産されたものが、ごみになり、汚染につながろうとしているのです。このような現実を見て、このことについて話し合う、自分たちに何ができるか、という想いにつながっていく。そしてそれが社会を変える力、なんとかしようという力になっていくのです。

日本の農山村には、それを象徴するように、「閉ざされた農山村」という言葉が使われてきましたが、今やグローバル化、いろいろな人たちが来ます。その中で、子どもたちが大きくなっていきます。あるイギリスの子どもが、地元の子どもと一緒に遊んでいたのですが、言葉が通じなくても遊べるのです。村の中の活動では、村のいろいろな人たちと話しをします。その中で、ビジターとしても、村に生まれ育ったものとしても、いろいろな関係性を作ることができるのです。その関係性の中で、自分の輪郭が見え、そして今何が起こっていて、自分がそれにどう関われるのか考え、その中から、明日が見えてくるんじゃないかと思っています。

今のような時代の中で、地域に注目する意味というものを挙げてみましたが、こういったことを意識するだけで、キャンプの中身がだいぶ変わってくるでしょう。地域や場に注目したキャンプというのは、今必要とされている力に、直結しているのではないかと思います。そうした「必要とされる力」を持った人が、ここに生きる人、ここ以外に生きる人、それから人間以外の生き物、命のないものも含めての大きな生態系の中で、共に生きるという姿勢を持ちながら、地域の未来や社会の未来に関わっていけたら素晴らしいと思います。そのために、我々キャンプに関わる人間ができることがあるのではないかと思います。



集いの時間

10月29日・大会2日目

全国の都道府県キャンプ協会が一同に介し、ワークショップやポスター発表が行われました。

北海道・東北ブロック 竹でつくろう！



関東ブロック 木の実の民芸品と組み紐のペンダントをつくろう！



中部・北陸ブロック つくって遊ぼう！中部・北陸



近畿ブロック ザ・忍者！



中国・四国ブロック 「竹取物語」と日本の文化



九州・沖縄ブロック ハブとバツタをつくろう！・ちょんかけごま





日本キャンプ協会設立 50 周年記念式典

10 月 29 日・大会 2 日目

日本キャンプ協会は 2016 年、設立 50 周年を迎えました。今までの日本キャンプ協会を支えてくださった多くの方々にご参加いただき、記念式典を執り行うことができました。

永年継続会員表彰式

長く会員として（30 年以上・1986 年以前に入会された方）日本キャンプ協会をお支えいただいた会員の皆さまに深い感謝の気持ちをお伝えすべく、永年継続会員表彰、表彰式を執り行いました。
全表彰対象者 472 名のうち、45 名の方がお越しくださいました。



日本キャンプ協会設立 50 周年記念事業 キャンプの魅力フォトコンテスト 表彰式

日本キャンプ協会設立 50 周年を記念し、キャンプの魅力を伝える写真を募集し、フォトコンテストを開催しました。
8 月末にて募集を締め切り、その後の選考を経て 12 作品の入選、入賞作品が決定し、その発表と表彰式を行いました。



日本キャンプ協会将来ビジョン発表

設立 50 周年という節目の年を迎え、150 を上回る団体が加盟する、国内唯一のキャンプに関する専門的な公益法人である、“わたしたち”日本キャンプ協会、そこに関わるすべての人々が、使命達成のために次の一步を踏み出すべき方向を確認し、共有するための「ビジョン 2020」がビジョン策定委員会より答申されました。





オープニング・パーティ

10月29日・大会2日目

大会中、参加者数が最も多いパーティとなりました。参加国からのパフォーマンスや音楽などのアトラクションが行われ、日本人も外国人も言語も関係なくコミュニケーションできる場となりました。

和太鼓演奏

パーティ開始を飾ったのは、玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科の学生による和太鼓演奏です。海外でも演奏経験が豊富な学生たち自身が演奏内容を作り上げ、迫力はもちろんオリジナリティのある演奏でした。他では聞くことのできない若さ溢れる演奏に参加者も盛り上がっていました。

演奏：玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科

参加国パフォーマンス

参加している国々の代表がステージに上り、自国の紹介を行いました。映像、歌、踊り、ゲームなどで各国の特徴が見られる、刺激溢れる時間になりました。

キャンプソングステージ

2000年の国際キャンプ大会でも活躍された、じんぺいさん率いるアウトドアミュージシャンの皆さまにキャンプソングステージを披露してもらいました。参加者も歌いやすい歌から、英語の歌まで様々な歌を堪能できました。キャンプ特有の温かく和やかな雰囲気だったのが印象的で、歌いながら集合写真の体形を作り、撮影したのは良い思い出です。





基調講演 2 「スペシャル・ニーズ のためのキャンプ」

10月30日・大会3日目

海外で様々な立場からスペシャル・ニーズ・キャンプに携わっている3名のパネリストと、コーディネーターの野口和行氏をお招きし、それぞれの事例に基づいてスペシャル・ニーズ・キャンプについてお話しいただきました。



コーディネーター 野口和行
慶應義塾大学准教授

スペシャル・ニーズ・キャンプ・ネットワーク WEB サイト：

<http://sn-camp-net.wixsite.com/sn-camp-net>

プチ冒険倶楽部 WEB サイト：<https://www.petit-adventure.jp>

野口：日本でも様々な形のスペシャル・ニーズのためのキャンプが行われてきましたが、アメリカやオーストラリアの欧米各国にも様々な優れた実践があります。スペシャル・ニーズとは、様々な障がいを持っている方や医療的なケアが必要な人たちのことを意味します。そのような方々のためにどのようにキャンプを提供していけば良いか、ここで皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

事例発表「シリアスファン・チルドレンズ・ネットワーク」



講師プロフィール Linda Pullium (リンダ・プリアム)

シリアスファン・チルドレンズ・ネットワーク コンサルタント
国際キャンプ連盟 事務局長

シリアスファン・チルドレンズ・ネットワーク WEB サイト：<https://www.seriousfunnetwork.org>

国際キャンプ連盟 WEB サイト：<http://www.campingfellowship.org>

そらぶちキッズキャンプ WEB サイト：<http://www.solaputi.jp/>

私は、アメリカで様々なキャンプでディレクター、コンサルタントとして仕事をしてきました。また、アメリカキャンプ協会の一員として、プロとしても、ボランティアとしても活動してきました。また、国際キャンプ連盟(ICF)での活動を通じて、22カ国の子どもたちのための素晴らしいキャンプを訪れる機会にも恵まれてきました。そしてこの11年間は、夫のリチャードとともに、ポール・ニューマンの設立したシリアスファン・チルドレンズ・ネットワークでコンサルタントとして仕事をしています。これまで7カ国のキャンプを見てきており、いろいろなインスピレーションを得て、また、キャンプがスペシャルな子どもたちにもたらす、いろいろな効果を感じてきました。

今日はアジアのキャンプ、そしてシリアスファン・チルドレンズ・ネットワーク(以下シリアスファン)のことを皆さんにご紹介したいと思います。

命の危険もあるような重い病気の子どもたちのために、1988年にアメリカのコネチカット州にホール・イン・ザ・

ウォール・ギャング・キャンプがポール・ニューマンによって設立されました。彼は、子どもたちが病気を忘れて、子どもであることをシンプルに楽しめるような場を作り出したかったのです。そのキャンプは、子どもたちに素晴らしい1週間をプレゼントするだけでなく、子どもたちが病気や自分たちの境遇を跳ね返す力を育てることにつながったのです。そしてキャンプへのサポートもどんどん広がり、才能あるボランティアが、遠くはヨーロッパを含む、様々なところから集まりました。また、同じような目的を持つキャンプが世界各地に誕生し、そのネットワーク組織としてシリアスファンができました。

現在、世界中で30のキャンプがこのネットワークに関わっています。1988年以来、50カ国732,000人もの子どもたちやその家族がこのシリアスファンのキャンプに参加をしています。実はこれらのキャンプへの参加費は無料で、寄付と前述の通りたくさんのボランティアによって支えられています。例を挙げますと、2015年度は205,800人のボランティアが関わってくださいました。また、すべ

ての寄付はキャンプやプログラムの費用に充てるように保証しています。

私たちのキャンプでは、楽しい活動と人生を変えるような大きな経験を提供できるようにしています。そして、自分と同じような状況の子どもたちや家族とつながれるようなプログラムを提供しています。加えて、医療面でも医師、看護師、そして設備と万全の体制を整えつつ、子どもたちに配慮した楽しい雰囲気を作っています。

シリアスファンは、コネチカットにサポートセンターを置き、4つの大陸にグローバル・パートナーシップを結んだキャンプがあり、それぞれのキャンプやプログラムをサポートし、ネットワークの拡大も続けています。現在ある30のキャンプは、アメリカに9つ、アイルランド、イギリス、フランス、ハンガリー、イタリア、イスラエル、日本にあります。グローバル・パートナーシップを結んでいるプログラムはアジア、アフリカ、カリブ諸国に14プログラムあります。

プログラムの参加者が抱えている病気の種類もガン、HIV、血液障害、心臓疾患、重篤な喘息など50種と多岐にわたっており、病状のバリアを超えてつながりを作り、跳ね返す力を作ることができます。このネットワークのキャンプが持っている目的は、病気の子どもたちが、病気に縛られずに、普通の子どもたちと同じように様々なことにチャレンジすることです。楽しい環境を提供するということ、生きていくスキルを身につけるということ、病気からの影響を少なくすること、跳ね返す力を提供することです。

プログラムや設備はそれぞれのキャンプで違います。サマーキャンプはもちろん、病気の子どもたちの兄弟のためのキャンプ、その家族のためのキャンプ、週末だけのキャンプ、青少年向けのリーダーシップトレーニングもあります。

私たちの根底にあるのは、楽しいキャンプであることですが、いくつかの専門機関による研究によって、楽しいだけではない、その効果が裏付けられるようになってきました。例えば2014年にイエール大学によって45家族に調査し、行われた研究では、自信がついた、自尊心を高めることができた、自立心が高くなった、社会活動への興味が出てきた、病気によるストレスが減少した、などの効果が報告されました。このように、今まで私たちが体験的に知っていたことが、学術的に裏付けされていくことが進んでいます。

シリアスファンに加盟している各々のキャンプは、アメリカキャンプ協会の認定もしくは、アメリカキャンプ協会

の基準に基づく国際キャンプ評価(International Camp Evaluation)とクライテリア(ネットワーク独自の運営基準)による継続的な評価によって、高い水準を保っています。アメリカキャンプ協会は、アメリカにおけるキャンプのリーダー的組織で、安全なキャンプを運営するための基準を定めています。これは、医療的なケアを行うキャンプだけでなく、すべてのキャンプに適用できるものです。アメリカにある、シリアスファンのキャンプはすべてこの基準の認定を受けることが求められています。ただし、アメリカキャンプ協会は、アメリカ国内のキャンプのみ認定しますので、他国のキャンプへも対応するため、その基準を基に他国の文化や法規制を反映し、国際キャンプ評価(International Camp Evaluation)が作られました。そして、私たちの独自の基準ですが、これはネットワーク内の運営基準で、積極的に責任感を持ってリスク管理をしているためのものです。また、病児のために質の高いプログラムを提供するためにはどうしたら良いか、というロードマップも示し、子どもたちにとって、それぞれのキャンプがより参加しやすいものになるように定めています。

それでは、これからネットワークに関わっているアジアのキャンプについてご紹介いたします。

まず、北海道の滝川市にある、「そらぷちキッズキャンプ」をご紹介します。このキャンプは、シリアスファンの最も新しい仲間で、そのディレクターは若野貴司さんです。2005年9月に、滝川市から無償で20年間の土地の提供を受けました。また、その後の20年間の土地の提供も含まれた条件で提供を受けています。シリアスファンとのつながりという点では、まずネットワークの暫定メンバーになり、そして最近正規のメンバーとなりました。1月に私たちもこのキャンプを実際に訪れ、プログラムを見学しました。その際、1mほど雪が積もっていたのですが、活動に適した服の提供も受けることができ、安心して参加ができるようなサポートが整っていると感じました。このキャンプのプログラムには、バナナボートやチュービング、森の散策、乗馬やそりすべりといったプログラムがあり、また、敷地内には体を温めるためのツリーハウスが整備されていました。

次に私たちとグローバル・パートナーシップを結んでいる、ベトナムの「キャンプ・カラーズ・オブ・ラブ」をご紹介します。このキャンプのカントリーディレクターはチェイ・ニオウさんで、2008年よりパートナーシップを結んでおります。このキャンプの母体となっている、ワールド・ワイド・オーファンズ・ファウンデーションは、子ども

もや青少年のために、社会リスクを低減させる活動を行っている団体です。現在 970 人の子どもたちが宿泊型のキャンプに参加しており、アウトリーチ型のプログラムには 1,400 人の子どもたちが参加しています。この、ワールド・ワイド・オーファンズ・ファウンデーションはニュージャージーに本拠地があるのですが、このベトナムのキャンプの他に、エチオピアやハイチのシリアスファン・チルドレンズ・ネットワークのキャンプの運営にも携わっています。

カンボジアには「キャンプ・ロータス」という、ルーシー・サムさんがファイナンス(財部担当)・ディレクターを務めるキャンプがあります。このキャンプはカンボジアの子どもたちに向けたものになっており、2009 年以降 1,100 人の子どもたちが宿泊型のキャンプに参加しました。アウトリーチ型のキャンプには 2,500 人の子どもたちが参加してきました。このキャンプの母団体の、ニュー・ホープ・

フォー・カンボジアン・チルドレンは、カンボジアの子どもたちの身体的、情緒的、社会的、知的な健康や幸福に焦点を当てています。特に HIV、AIDS を患う子どもたちに重点的なサポートをしています。

インドには、「キャンプ・レインボー」というキャンプがあります。このキャンプも、グローバル・パートナーシップ・プログラムのキャンプの 1 つで、インド国内の HIV、AIDS の子どもたちに向けたプログラムを提供しています。

このように私たちのシリアスファン・チルドレンズ・ネットワークを紹介してきましたが、これからも、病児の子どもたちのために、またこのネットワークの創始者のポール・ニューマンの目指した「違いを生み出していく。ひとつのほほえみごとに。(Make a difference, one smile at a time)」を目指し、活動していきます。

事例発表「自閉症の人のためのキャンプ」



講師プロフィール Sara Gage (サラ・ゲージ)

ノースカロライナ州自閉症協会 ソーシャル・レクリエーション・サービス・ディレクター

ノースカロライナ州自閉症協会 WEB サイト : <http://www.autismsociety-nc.org/>

キャンプ・ロイヤル WEB サイト :

<http://www.autismsociety-nc.org/index.php/get-help/social-recreation-programs>

[/camproyallinfo](#)

私はノースカロライナ自閉症協会で、長年自閉症の子どもたちや家族を支援してきました。私たちの組織のミッションは、自閉症の方に向けて、いろいろな機会や体験を提供することで、その方自身と、その家族を支援することです。私たちは、自閉症の方を含めすべての人々が野外での活動を体験する権利があると考えています。キャンプでの体験は、私たちの国で子どもたちの成長における重要な糧となっています。自閉症の子どもたちも、その体験ができることに意味があると思っています。

私たちの活動の価値ですが、お互い個人を尊重するというにあると思います。それぞれ違っている、ユニークな力を持っているということを共有していく社会を作っていくことです。様々な課題を抱えている中でも、それぞれの子ども、個人の中にあるユニークさを尊重し、それを社会の中に取り込んでいく、自閉症の子どもたちがそれぞれのコミュニティの中で成功を収めることができるようにしていくよう支援活動を進めていきたいと思っています。同時に公平なサポートを提供していくことも重要だと

思っております。

誠実に、オープンに、そして高い目標を掲げ、ノースカロライナ州の自閉症協会は 1970 年に設立されました。熱心な家族が子どもたちのために様々な活動を提供するところから始まりました。当時のアメリカでは、自閉症のことがよく知られていなかったという実情がありました。そのような中で熱心に活動をし、組織を確立していきました。

1972 年にはサマーキャンプを始めましたが、その時の参加者は 6 名の子どもとその家族で、1 週間テントに宿泊し生活しました。それから 45 年後の 2015 年には、2,000 人の参加者がキャンプに行きました。私はキャンププログラムに 20 年間関わってきましたが、そのキャンプは 1976 年にできたもので、サマーキャンプだけではなく、年間を通じたプログラムという特徴があります。私たちのプログラムは、ノースカロライナ州の住民だけに提供されていいますが、自閉症のある人々がとても多いので、すべての方にプログラムを提供できているわけではありません。診断書の確認など、それぞれのプログラムについて基準を決め、

行っています。

自閉症のある人々を対象としたキャンプとしては、州で一番歴史が長いキャンプが、キャンプ・ロイヤルですが、アメリカ中を見渡しても、同じようなキャンプはなかったように感じます。キャンプ・ロイヤルにはいくつかの特徴があります。例えば、キャンパーとスタッフが1対1という体制で手厚いサポートを行っています。そしてハイキングやボート、水泳、乗馬、クラフトといった、オーソドックスなサマーキャンプのプログラムも取り入れております。視覚的なサポートにも力を入れて手厚く行っております。スタッフとして、自閉症のサポートにつながる教育、心理学、言語学といった分野の大学生を雇い、きちんとしたトレーニングを行い、サポートについていただいております。そのほか、キャンプには問題があった時にきちんと対応できるよう、看護師などの医療スタッフが詰めています。

非常に多くの自閉症の診断を受けた方がいらっしゃるので、キャンプへの参加者は抽選で決定をしています。例を挙げますと、サマーキャンプでは、320人の定員に対して600人程度の応募がある状況なのです。その他、優先受け入れ制度もありますが、その場合ご家族の方にかかなりの資料や書類を作っていただかなくてはなりません。私たちもなるべく受け入れたいとは思っているのですが、コスト面での課題があります。一人につき700ドルほどかかる費用を、いろいろな寄付を受けたり、補助金を活用したりしてまかなっています。

サマーキャンプ以外にも、デイキャンプやミニ・キャンプ、ファミリーキャンプ、放課後のプログラムなど8種類のプログラムを年間通じて提供しています。

すべてのプログラムにおいて自分がどのような人間か、自分の状況を確認し、キャンプの体験が成功し、自信を高めてもらう。自分の殻を破ってもらえることもあります。自閉症の方はなかなかコミュニケーションをとる、他の方々となつながりを持つのが難しいのですが、キャンプの場においては、それすら楽しんでもらっているような気がし

ます。しかし、環境を提供するだけでなく、キャンパー自身、周囲の人双方にメリットがあるキャンプになればと思っています。キャンパー自身もキャンプに来ることが楽しみで、また周りの人にとっては、自閉症の子どもを育てるというのは、24時間休みがなく、とても大変なことです。キャンプに参加することで家族にも休息をとってもらい、つまり、レスパイトケアになるということです。また、受け入れる大学生のスタッフについても、前述の通り、自閉症とつながるような分野の大学生を雇っておりますので、専門的なキャンプのトレーニングとともに、彼らの将来のためになっていると感じます。スタッフ自身も、受容性が高く、またこのような子どもたちをサポートできるような人になれるようなトレーニングにもなっていると思います。キャンパーやその家族を受け入れることができるようになる、お祝いできるような場所になれるよう、キャンプという体験を非常に大切なものと感じてもらえるような環境を提供したいと思っています。そしてそれがコミュニティに広がっていくよう活動しています。

ハード面の話になりますが、キャンプ場の敷地は130エーカー以上ありまして、体育館、池、キャビン、スタッフの宿舎もあります。ダイニングホール、クラフトセンター、プール、運動場などもあり、キャンパーのニーズを満たしていけるようにしています。

ある親御さんよりいただいたメッセージを紹介します。

「彼がキャンプを楽しんだと言うだけでなく、キャンプが彼を楽しませてくれた。そのことが私たちにとって大切なのです。自閉症の子どもを育てる親にとって、その子のありのままを認めて、受け入れるということがすべてなのです。7歳の少年に人生の素晴らしい時を与えてくれてありがとうございます。そしてこれからの人生にいいことがあるよう、特別な日々があるよう、そんな楽しみを家族にもたらしてくれて感謝しています」

つまり、このようにキャンプ・ロイヤルはとても特別な場所なのです。

事例発表「Camping for All」



講師プロフィール Maree Feutrill (マリー・フートリル)

YMCA キャンプ・マンユン キャンプ・マネージャー

YMCA ビクトリア WEB サイトサイト : <http://victoria.ymca.org.au/>

YMCA キャンプ・マンユン WEB サイト : <http://www.camps.ymca.org.au/locate/manyung.html>

今日は、オーストラリアのビクトリア州の YMCA と協働している州政府を代表して参りました。私たちは、ビクトリア州のスポーツ・レクリエーション局 (Sports and Recreation Victoria) と協働をしています。印象的な (Impressible な) キャンプの環境をどのように作っているのか、お話ししていきたいと思います。

私たちのキャンプは、多様な人々と関わることでできる幸せに溢れています。様々な年齢の人、身体的、知的な障がい、能力を持った人々、文化的背景の違う人、いろいろな背景を持った人たちとキャンプの中で関わることで非常に光栄に思っています。多様性に触れることができることを非常に誇りに思っています。

キャンプのコミュニティというのは、ある価値観に基づいて作られていると思います。私たちの場合は、相手を尊重する責任、そしてソーシャル・インクルージョンというものを掲げています。

6〜7 年ほど前になりますが、スクール・キャンピング・プログラムという年に何回かあるプログラムに参加した子どもたちの中に、車椅子の男の子がいました。1 週間のそのプログラム中、彼は写真を撮影する係を担当していました。その時は、カメラが好きな男の子なのかしら、と思ったのですが、キャンプの最終日にその男の子と話したところ「写真は大嫌いだし、下手なんだよ。それにお手伝いをしたいじゃなくて、僕も同じことをやりたいんだよ。」と話してくれたのです。そこで私は、オーストラリアの整ったキャンプ場のプログラムでも、参加できない人たちがいるという状況を改善しなければならないと気づきました。インクルージョンという言葉が価値観として掲げられているにもかかわらず、私たちは実践できてなかったと。その後キャンプ場のスタッフを集めてどのようにしたら良いか考えました。また、州政府の人たちも同様の課題に気づいていました。そして、ユニバーサル・デザインという考え方に沿って、改善していくことを考えました。

ユニバーサル・デザインとは、知識、環境、デザインを、

その人個人の状況に関わらず、なるべく多くの人アクセス可能な形にしていくことです。これは、もともと建築の分野で生まれた概念で、どの部分のデザインや設計を改善したら良いかということが始まりだったわけですが、このプロセスを私たちもキャンプで行おうと思ったわけです。

まずは、ユニバーサル・デザインの理論を理解し、実際の場面を考えていきました。例えば、まず入り口に階段があります。そして階段を使えない人のためにスロープがあり、設計の最低限のラインは満たしていました。ですが、ユニバーサル・デザインを考えた時には、もう一步踏み込んで考える必要があります。つまり、使い手の状況によって区別されてしまう設備があることで満足するのではなく、全員が使えるひとつの入り口を考える、という考え方なのです。

なるべくお金をかけずに行っていきたいと考えていましたし、何かその改善の柱になるものが必要だということで、まず、スタッフは、自分たちの言葉でそのビジョンを表しました。具体的に言うと、ユニバーサル・デザインには公平、柔軟、簡単、理解、安全、省力、空間という 7 つの原則があります。この原則に当てはめると様々なものの形が決まってきます。この原則をスタッフで私たちに理解できる言葉に当てはめ、誰もがその原則に則って考えていけるよう、自分たちだけの原則を作りました。

・キャンパー全員が自立した活動ができるようになっていくのか

例えば、補修のスタッフが施設を補修する時に、車椅子を使用する方、視覚障害者のある方が自立して動くことができるのか。オフィスのスタッフであれば、英語が母国でないキャンパーとどのようにコミュニケーションを図るのか。

・それぞれのキャンパーにとって、ここでのキャンプ経験が公正で平等かどうか

例えば、知的障害のある方、自閉症、ADHD のある方がキャンプを行う時に、その方々に活動をどのように理解して

もらうのかということ。

・キャンパーを中心に考えているかどうか

キャンプの終わりに聞いた感想から改善点を見つけていくのではなく、最初から私たちがわからないことをキャンパーに質問し、その答えを専門家にも相談し、プログラムの改善など、キャンプに反映していく。

このようにとても小さなことから始めていきました。

例えば、施設内のファイアサークルですが、そこへアクセスするためには、まず段差がありました。そしてサークルを取り囲むように作り付けの椅子があり、車椅子を使用する方では簡単に入っていけないような作りになっていました。そこでまず道路からの段差をなくし、作り付けの椅子の一部を取り外し、車椅子でのアクセスを容易にしました。そうすることで、車椅子を使用する方に限らず、子どもたちやベビーカーを押したお母さんなど、様々な方が入っていけるようになりました。

また、施設内を移動するための道路ですが、「すべてのキャンパーが動き回れるようにしよう」と考え、道幅を広く、勾配も緩やかに、また視覚障害のある方のことを考え、道の両端には色をつけました。

このようなハード面以外にも、例えば子どもたちや知的障害のある方に対して何かを伝える時、たくさんの言葉を使って説明するのではなく、なるべく実際にやって見せて伝えるようになりました。この試みは非常に上手くいっています。また、様々な人を受け入れる中で、英語が第1言語でない難民の人々を受け入れることがあります。そのような時には通訳をつけることを考えます。また、聾唖の方々を受け入れることもありますので、手話を習い、コミュニケーションの手段として取り入れたことは良かった点の1つです。このように工夫することでキャンパーと様々な場面できちんとコミュニケーションを図ることができるのです。

他にも、食べ物についての例があります。オーストラリアでも多くのキャンパーは、様々な食品に関するアレルギーを持っています。毎週、受け入れる子どもたちの持つアレルギーについて、どのように対応するか検討を行っています。以前アジア・オセアニア・キャンプ連盟の前会長でもある、ビル・オークリー氏に私たちのキャンプへ来ていただいた時に、このことについてお話をしました。その際に、私たちは特別な食を提供すべきキャンパーに最初に食事を提供し、その後普通の人たちに食を提供していますのですと話すと、もっと包括的な考え方を示してくださいました。その考え方に基づいたメニューについては、目下研究中なのですが、例えばみんなが大好きなブラウニーの、グルテン、ナッツ、卵、乳製品フリーで、そしてベジタリア

ンの人も含めてみんなで同じものが食べられるようなレシピを作り上げることができました。この考え方は、食べ物に限った話ではなく、多くのプログラムで実践されています。上級者向けのロープコースの話ですが、ユニバーサル・デザインに基づいて設計をした時には、若い運動神経抜群の子どもたちも楽しめて、でも高齢者や体力がない人でも楽しめるにはどうしたら良いかと考えました。

ユニバーサル・デザインを実践する中で、ある程度の基金も必要であると感じています。例えば、ロープコースなどに使用するハーネスひとつとっても、様々な状況の人が使えるよう、様々な大きさ、形のものを用意しておく必要があります。また、自転車のプログラムでもそうです。2輪の自転車だけでなく、3輪、4輪といった変わり種自転車を用意しておくことで、全員が自転車のプログラムを楽しむことができます。ですが、たくさんの種類のものを用意するということは、やはりそれだけお金がかかるということです。海のプログラムもそうです。様々な大きさのウェットスーツ、様々な器具を用意することで、様々な子どもたちが海のプログラムを楽しむことができます。

今進めている、ユニバーサル・デザインの考え方に基づいた新しいマウンテン・キャンプを作るプロジェクトについてお話します。このキャンプを作るにあたってオーストラリア国内の障がい者団体や政府の支援を受けることができました。たくさんのキャンパーの方の知恵を集め、いろいろなセラピストや専門家の方を巻き込み、どうしたら、「障がい者向けの特別な建物」ではなく「誰もが使える単なる建物」になるか、入り口や、トイレやドアのことなど考えていきました。この建物が間もなく竣工するのですが、とてもワクワクしています。

最後に、このユニバーサル・デザインを取り入れたことでの、社会的な成果についてお話します。私たちはこの考え方を取り入れたことで、様々な人たちを取り入れる(内包する)ことができました。そしてすべての人たちの身体的、精神的な健康の向上に寄与することができます。そして文化に対する尊敬と理解を促すこともできました。なにより、キャンプに参加する人が、障がいを持った人たちも含めて、このキャンプに来れば自然にすべての活動に参加することができるということです。常にある、自分たちの権利のために戦わなければならないというプレッシャーを取り除くことができるのです。そしてみんなハッピーになれるのです。誰にとっても、自分が取り残されることは、取り残すほう、取り残されるほう両方にとって、悲しいことなのです。このようにして、幅広い人、様々なコミュニティの人の参加を得ることができ、キャンプの定着率も上がり、評判も良くなりました。つまり、良い口コミが広がってい

くので、事業としても上向きです。

さらに、新しい市場も見えてきました。オーストラリアは日本同様、高齢社会を迎えています。全人口に占める65歳以上の割合が大きくなっています。皆さん健康で運動もできるのですが、もちろんその中にはアウトドアでの活動を楽しみたいという方も多くいます。まだまだどのようなプログラムが良いか模索中ですが、高齢者の方とのキャンプを私たちも楽しんでいます。例えば90歳のおばあちゃんが「カヤックをやってみたい」ということで参加されました。そして実際体験したことで、希望を持って、私たちのキャンプに毎月参加したい、次はどんな冒険をしようかと、彼女の人生が大きく変わったのです。また、ある

77歳のおばあちゃんはこのキャンプに来たことで今まで知らなかった、アーチェリーの才能を発見することができました。今では地域のアーチェリークラブに入って毎週アーチェリーをやっているそうです。彼女の人生もまた77歳にして大きく変わったということです。

「ユニバーサル」という考え方を私たちが持つことによって、多くの人々の社会をよりよくしていくという変化をもたらすことができました。そして社会へ手をさしのべるというキャンプができ、さらにキャンプの精神を息づかせることができるのです。

質疑応答

Q1 スペシャル・ニーズのある人たちへのキャンプを行うことにどんな意義を感じていますか？

リンダ：医療的なサポートが必要な子どもたちへの影響はもちろんですが、まずはその家族にレスパイトケアの時間を作ることができるということです。北海道にあるそらぷちキッズキャンプもそうですが、家族の方もケアをしていく必要があると思います。また、日本の方はなかなか感情を表に出すことがないかもしれませんが、特にお母さんから「素晴らしい経験でした」と感想をいただくと私たちもとても感銘を受けます。

サラ：キャンプのプログラムを通じてキャンパーが理解され、平等に機会を提供されるといった経験をし、自信をつけ自尊心を育てることができるというところです。さらにそのことは、キャンプの後の人生や家族の感情、サポートしている側にも影響を与え、非常に良い成功のサイクルが出来上がると思います。

マリー：社会的な意義はもちろんですが、それ以外にもスペシャル・ニーズ・キャンプを提供することで、スタッフの側の包容力や理解力を育てることにつながります。どのように取り入れていくか、ユニバーサルに考えていくのかといった視点を持つことができれば、今までとは違うやり方を考えることができます。またその地域のリーダーがスペシャル・ニーズ・キャンプを支援してくれるということがあれば、それがさらに社会において大きな意味を持つと思います。

Q2 日本のスペシャル・ニーズ・キャンプへのアドバイスをお願いします。

リンダ：重要なことは、どのような状況の方が、どれくらいの人数いらっしゃるのか、どのような障がいがあるのかということ踏まえて、組織、パートナーシップを作っていくことだと思います。どのような設備でどのように運営していくのか、どのようなニーズがあるのか、既存の取り組みにはどのようなものがあって、その取り組みと協働していくことはできるのか、ということを考え、知ることです。

サラ：キャンプ・ディレクターとしては、コミュニティの中でネットワークを作っていくこと、そしてそのプログラムを必要とされている方にアウトリーチしていく、手をさしのべていく、そしてキャンプを作っていくということが非常に重要だと思います。そうすることで、ネットワークやコミュニティからもサポートを受けることができます。それは非常に嬉しいことです。お互いに学び合うこともできます。

マリー：リンダさんもおっしゃっていましたが、キャンプの恩恵を受けていない方々、物理的に活動ができていない、孤立している人を把握し、そこに手をさしのべるということが大切です。私たちの持つ能力を活かして、そのような人々を見つけキャンプにつないでいくことが、社会全体にとっても意味があります。

**Q3 スペシャル・ニーズ・キャンプを行うに当たり、家族の理解をどのように得ていますか？
スタッフ等も含め事前に説明を行っていますか？**

リンダ：事前の説明は、とても大切です。親御さんにとってそのキャンプにきちんとした医療設備が整っているということとをきちんと医師などから説明されるということに意味があると思います。また、すでに参加したことがある子どもの両親から、新しくキャンプに参加する子どもの両親へ、キャンプの価値について説明してもらうのが良いと思います。親御さん同士のコミュニケーションも非常に重要です。

サ ラ：いろいろな情報を前もって家族に提供していきます。できる限り情報を提供していかないと成功はありません。私たちはまず、参加者に関わる、医療履歴や学校のことも含む様々な情報を提供してもらいます。それを踏まえ、電話なども使い、きちんと参加してもらえるようにフォローをしていきます。例えば、ロープコースのプログラムを親御さんによっては、「とても怖い」と感じる方もいます。特に車椅子を使用する子どもの中には、急に空中につられることや、高いところに行くことが嫌だと感じる子どもももちろんいます。なので、まずキャンプの前に事前説明を行い、実際にキャンプに来てそのプログラムを見た後でも、何か不安なことだったり、希望があったりした場合にはそれに対応していきます。

Q4 施設で生活している孤児へのサポートを考えているのですが、スタッフ、参加者それぞれの個性を生かすためにどのような工夫をしたら良いでしょうか？

サ ラ：採用に当たってその人の個性を見るような質問をしますし、キャンプにあった知性、人格を持った人を採用するよう心がけています。またトレーニングの場面では「誰でも受け入れる」という人を養成するよう、また、手本を示すということを心がけています。そしてコミュニケーションに関するトレーニングも行っています。これは一般的なコミュニケーションについても、特に自閉症の方を意識したコミュニケーションについてもです。人をどう選ぶのか、どのようにトレーニングするのか、ということが私たちの活動につながっていくと思っています。

Q5 スペシャル・ニーズ・キャンプを特に自然の中で行う意義についてどのように考えていますか？

サ ラ：キャンパーは普段なかなか自然の中にいることができません。なので、自然の中で活動する。特にそのための体制を整えていくことが重要だと思います。

リンダ：例えば、そらぶちキッズキャンプでは雪の中でのキャンプが経験できます。これはなかなかできる経験ではありません。その経験を成功させるためには、それに適した、安心して活動できる施設が必要で、スタッフもそこでの活動をきちんとサポートする必要があります。病院から出て、自然と触れ合うことができる、医療スタッフも充実しているということはいいいことだと思います。

マリー：他の子どもたちと変わりません。自然の中において、自然とつながりを持ち、自然を理解し、そして周りに対する意識を高めていく、五感を刺激するということです。私たちが見ている中で、知的障害のある子どもたちは、自然の中で大きく伸びていきます。自然の中では私たちが計画した通りには物事は進みませんが、違った形で発展していきます。例えば、蝶やミミズがいることに気づくと、すべてが蝶やミミズの話になってしまったり、穴を掘りだすと、穴を掘り続けることになってしまったりといった具合です。

Q6 スペシャル・ニーズ・キャンプを始めるにあたって、何をしたら良いのか教えてください。

サ ラ：まずは一人ずつ、どこからでも始めていくということだと思います。やってみたいという意志から始まりますので、その疑問を持ったことが良いきっかけだと思います。

マリー：小さな一歩から始めていくことだと思います。今までこのようなことを行ったことがないということであれば、経験者に質問をし、話を聞いていくことだと思います。ゆっくりでもいいので前に進むことで、正しい知識が身についていくと思います。まずは経験のある人に相談をしていく、実際にそのようなキャンプに行って、理解を深めることが役に立つと思います。

Q7 スペシャル・ニーズ・キャンプでのアクティビティの選択において、大切にしていることは何ですか？

リンダ：シリアスファン・チルドレンズ・ネットワークのキャンプではすべてのアクティビティをすべての子どもたちへということで行っています。それは準備がとても大変です。子どもたちのスペシャル・ニーズが何なのかということをもまず理解し、それを踏まえてスタッフが丸となって準備をします。私たちにはチャレンジ・パイ・チョイスという考え方を持っており、子どもたちがそのアクティビティを行いたいと思ったら、それができるような環境を整えておくという準備をしています。

マリー：例えば、何か既存のアクティビティがあって、特別な器具があれば障がいのある方がそのアクティビティを行うことができるということであれば、それを準備すれば良いと思います。ですが、インクルーシブという考え方に則つるのであれば、誰かが見学していなければならないというアクティビティは避けます。例えば以前のロープコースですが、とても人気のアクティビティでした。ですが、ロープコースができない人も多かったのです。そこで、先程説明したように、政府に掛け合い、専門家を集め、ユニバーサル・デザインを実現するということが必要になったのです。そこに意志、目標があるならば、苦勞をする甲斐があると思います。他にもアーチェリーも特別な矢と弓を開発してもらい、誰もができる形にしました。視野を広げ、そのように工夫することが可能かどうかということを考えると良いのではないのでしょうか。

サラ：マリーさんが述べたことは素晴らしいと思います。最終的には、どんな基準もなく誰もが参加できるアクティビティを準備するということだと思います。そこに意志があれば、必ず実現できるということだと思います。何でもやりたいと思ったことは、やりたいと思います。そこにきちんとしたサポートがあれば、そこにきちんと答えがあると思います。

Q8 大きく社会を変える活動をする上で、心がけていることは何ですか？

マリー：一言では言い表せないのですが、あえてまとめるなら、心の中に「Inclusion(インクルージョン)」という言葉をつねに忘れないということです。あらゆる人を包み込む社会をつねに忘れない、そしてそれを自分の原動力にしていくことです。

リンダ：ネットワークキング、つながるということです。素晴らしい方々がこの部屋の中にも、いらっしやいます。世界中を回中で、きちんとした環境が整っている国もありますが、まだまだスタートを切ったばかりの国もあります。そのような人々がつながり、コミュニケーションをとる中で、お互いにインスピレーションを与え合い、お互いを高め合っていくことが大切だと思います。

サラ：私たちは「情熱」という言葉を大切にしています。毎日歌う歌のようなもので、大好きな言葉なのですが、それが私たちの精神を表しているように思います。自分の行いたい活動に熱意、情熱があれば、必ず実現できる、道は開けてくると思います。



野口：このようなネットワークを作る機会は、本当に重要だと思っています。この場所には様々な文化的背景を持った方が集まっています。いろいろな言語を持っているということがすでにスペシャル・ニーズなのかもしれません。今は、スペシャル・ニーズと呼ばれていますが、本当に私たちが目指したいのは、スペシャル・ニーズを感じさせないような社会です。



基調講演 3 「子どもを支援する人材の育成」

10月30日・大会3日目

一般社団法人教育支援人材認証協会にご協力いただき、東京学芸大学の松田恵示氏をお招きし、子どもたちをどのように社会で支援していくかというご自身の取り組みを基にお話いただきました。



講師プロフィール 松田恵示

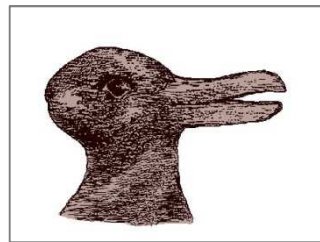
国立大学法人東京学芸大学副学長／教授

国立大学法人東京学芸大学 WEB サイト：<http://www.u-gakugei.ac.jp>

教育支援人材認証協会 (JACTES) WEB サイト：<http://www.jactes.or.jp>

本日は、このような大きな大会にお招きいただきまして、ありがとうございます。最近の私の職場に非常に関係します学校教育が、大きな変化を見せつつあります。そのようなことを、チーム学校というような言葉で表す時が多いんですけれども、この辺りの話を少しさせていただきながら、子どもたちが、様々な地域の人や、大人、自然体験といった様々な体験というものと、まさに今、出会いを求められているということを、皆さま方と一緒に考えることができればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

早速、皆さまに見ていただきたいスライドがございます。スライドに現れましたのは、大変よく使われる有名なだまし絵なんですけれども、2つの絵が見えますでしょう



か？一つはうさぎですね。ここが耳で、こちらが口ですね。もう一つはいかがでしょうか？鳥ですね。こちらがくちばしで、こちらが目ということで、鳥に見える。これ有名なだまし絵です。面白いなと思うのは、スライドを最初にご覧になられた時に、どちらがまず頭の中に浮かびましたか？うさぎの方がちょっとマイノリティですね。これ、よく使わせていただくんですけれども、うさぎと鳥は、だいたい半分半分になる時が多いんですけれども、今日はちょっと鳥派が多いようですね。キャンプ協会ちょっと鳥派が多いんでしょうかね。冗談ですが。

それぞれ事情があると思うんですけれども、今日この話で始めたのは、このだまし絵というのが、いつもすごく面白いと思うんです。なぜかと言いますと同じ刺激を受けたのに、捉え方が違うということが、人で出てきているということです。つまり、パッと最初に見られた時に鳥だと思われた方と、うさぎだと思われた方があるわけですね。鳥だと思われた方は、うさぎに見えるにも関わらず、どうして最初に鳥だと思ってしまったんでしょう？あるいは、

逆もそうですね。うさぎだと思われた方は、どうして鳥に見えるにも関わらず、うさぎになったのか。人によって違うわけです。

じゃあ、もう一つ。これは何を書いてあるかわかになりますか？おわかになった方、手を挙げてください。半分ぐらいですね、ありがとうございます。こういうクイズみた



いなものは、わからないと本当にイライラします。これをやっていると、時間がすぐに過ぎますので、ちょっと解説をいたします。グレーの色を見ていただくと、何かわけのわからない模様に見えるんですけれども、実は真ん中の帯の辺りの、青色のところに注目して欲しいわけです。そうすると左側から LIFE、ライフと書かれています。いかがでしょうか。私の作だったら、もっと誇らしげになるところなのですが…。これですね、LIFE というのに、一度認識してしまいますと、LIFE としか見えません。でも LIFE だとわからない時は、いくら見ても模様としか見えないのです。スライドの方は、全く変化はありませんから、見えないという状態から、LIFE だとわかるということは、皆さま方の頭の中で起こっている出来事なんです。言い方を変えますと、見ているものは同じなのに、それぞれひとりひとりが違ったメガネのようなものをつけていらっしゃるって、それでもご自身がご自身なりに解釈をされている。そういう状態が、実は私たちが生活しているという事実なんじゃないかと思ったりするわけです。

ではもう一つ。今度のスライドは、映し出す前に少し私が説明を入れておかないと、ややまずい面がございます。決して私の趣味で持ってきたわけではありません。心理学等でよく使われる有名なスライドです。いかがでしょうか？やっぱりちょっと空気感が変わりましたですね。ということは何かを見ていらっしゃるんですけれども、今までの流れでいきますと、もう一つ見ていただきたいものがあるんですが、おわかりになれますか？男女だけではなく、ヒントです。9匹のイルカが描かれています。ヒ

ントというか、答え言ってるんですけどね。どこにイルカがいるか、と言うですね、関西人が喜びそうな、私関西人ですので、声がかかりました。あの黒い影の部分がござ



いますが、ここが尾びれでここが鼻で目になってる、イルカが反対向きのその姿がここにいます。そうするとここにもいます、ここにもいます、ここに小さいの也有いますね。そんな風にカウントしていきますと、9匹イルカがいるというだまし絵です。おわかりいただけましたでしょうか？このスライドがですね、心理学でよく使われるのはなぜかと言いますと、このスライドを小学校1年生の子どもたちに見せます。そうするとどういう声が返ってくるかというと、多くの子が、すぐにこれを見て、イルカだと言います。ところがですね、大人はこれを見るとやっぱり男女が先に見えるんですね。つまり、子どもと大人でどれほどものの見方が違うか、ということを使う時によく使われるものです。ちなみに、6秒経った時にイルカが見えなかった方は、もう完全に子どもの心をなくされているそうですけれども…。冗談ですけども。

今はだまし絵を見ていただきながら、お話を聞いていただきましたが、今日の始めのところでこのようなお話を話させていただいたのには理由があります。同じ絵を見ました。同じスライドを見ました。ところが最後の絵だと子どもはイルカに見える場合が多いですけど、大人は男女に見える場合が多いです。こういうことが起こってるのは、それぞれの頭の中にメガネ、あるいは、見えない変換装置のようなものを持っているから、こういうことが起こるのだということになります。ところが、私たちは、普段自分がどのような変換装置を持っているのかということには気がつきません。

例えば、先程のスライドを見て男女がまず見えた時に、「何だこのスライド。ちょっと男女をモチーフにして」と思い込んでしまったら、イルカなんて見えないわけです。ところが、そこに子どもがやってきて、「うわあ、イルカの絵だ！」なんて言われますと、最初何を言ってるかわからない。ところが、よくよく見てみると、「本当だ、イルカに見える」っていうことで、自分が男女という風に思い込んでいたということに、その時初めて気づくわけですね。つまりそれは、出会いというものが自分自身のある種、癖のようなものを気づかせてくれる。出会いというものは、結局自分とは異なるもの、あるいは自分とは違うメガネを持った人と接点を持つことを言うのだと思います。そしてそのことが逆に自分自身をも気づかしてくれる。そんなことを物語っているように思います。そういうに考えますと、子どもたちに限らず、私たちが様々に成長したり、あるい

は、いろんなことを学んで、少し視野を広げていくというのは、その意味では異なった人との出会い、perspective(視点) みたいなものを共有していない、異なった人との出会いというものが起こらないと、そういうことがなかなか進まないということになります。この辺りを皆さまで一緒に考えてみたいと思います。

現在の日本の社会を見ますと、子どもたちの出会いというものが少なくなっている、そしてそのことから生じている様々な問題点があるのではないかと言われます。これは時代の状況や、あるいは社会の横のつながり、International なレベルでの変化というものもあると思うのですが、見ず知らずの人と話をする、異なった考え方の人と意見を調整する、一つのやり方を生み出していく、ということを手首にしている子がとても多くなっていると言われています。学校教育でそのような問題をしっかりと抱えていかないといけないということで、教育行政、つまり文部科学省が、教育の一つの指針として示している言葉が、チーム学校という言葉になっています。

ここからは、チーム学校という、今学校教育が指針としている一つ概念を皆さまで方にお話ししてみたいと思います。私自身、中央教育審議会という、国のですね、教育政策を決めていくような会があるのですが、そちらの学校・地域協働部会で副部会代表をやっておりました。そのようなこともあり、政策レベルで、どんなことを考えているのか、ということをお皆さんにまずご紹介したいと思います。

その前に、海外と日本の学校の違いを説明したいと思います。日本の学校というのは、子どもたちを育てる場合に、知育、徳育、体育に分けて考えることがありますけれども、特に徳育については、海外の学校ではですね、学校の先生の職務ではない場合が多いわけです。ところが日本の学校というものは、例えば給食当番を指導したり、あるいは掃除を指導したり、そういうことを通してこの徳育という問題にも非常に深く関わっていきます。つまり、子どもの生活全般を抱えるというのが、日本の学校の特徴です。あるいは、これは東南アジアに割と特徴的なスタイルです。それ以外の世界を広く見てみますと、学校の先生というのは基本的には勉強を教えるのが中心であって、それ以外のものを教えるということは、あまりしません。逆にイギリスなどでは、そのようにして学校の先生を使いますと、ペナルティを食らったりします。そのようなことから、日本の学校の特徴の一つとして、まずその知育、徳育、体育と呼ばれるような子どもの総合的な成長というものにすべてに関わって動いている、ということがございます。

一方で、先程よりお話ししていますように、今の子どもたちの中に様々な問題が生じています。これはここに収集

まりの皆さまも大変よく、身近に感じられていることじゃないかと思います。例えば、特別支援と呼ばれるような、個別な支えを必要とする場面が多くなっている。または、不登校と呼ばれるような事態が、非常に増加している。子どもの貧困の問題というのも、日本では相対的貧困率というのが16.3%を超えてきた。これはOECDの加盟諸国から見ても、大変高い割合なっています。そのようなことが、様々に子どもたちの問題として現れているわけですが、子ども、学校で支えるには、大変大きな、そして難しい課題だと言ってもいいと思います。

で、このような中で学校の先生は、大変頑張っているわけなんですけれども、その頑張るということが、具体的には労働時間の増加ということにつながっています。昭和41年(1966年)から平成18年(2006年)の40年間に、全体の労働時間が、120時間くらい多くなっています。これらを毎日に換算してカウントしていますと、おおよそ夜の8時とか9時ぐらいまでは必ず仕事をしないとイケない状況に追い込まれてる、という状態になっています。これは、世界的に見ても、ニュースでもやっていましたけれども、日本の学校の先生は、最も長時間労働している教員ということになっているわけですね。これは先程お話ししましたような、様々な背景がやはり影響を及ぼしているとしたら考えようがないというところになってきます。

それでですね、ここからチーム学校についての話になるわけです。けれども、それではどうすればいいのかということで、現在の教育政策として強調されておりますのが、従来は学校の先生が学校では子どもたちを教育する、それが当たり前であった。そこへ、スクール・カウンセラーとかスクール・ソーシャルワーカーとか、あるいは部活動の外部支援者、そしてキャンプ協会の皆さま方が関わられていらっしゃるような体験活動とか自然活動の支援員、そういう学校外のスタッフである方々を学校内にチームとして招き入れ、多職種連携という形で子どもたちを育てていきたい。そういう方策を今とらうとしているわけです。その場合ですね、従来のパターンとこれからのパターンがどう違うのかということ、簡単にまとめますと、これまで日本の学校というのは、先生はソロプラクティス、一人でできて当たり前という感覚が非常に強いという職場でした。ところがそれではもうやっていけないということで、みんなでできて当たり前という風に、先生の意識の転換をさせようとしています。従来、学校というところは壁が高いという言い方をよくされたんですけども、まずそれを取り払うという試みが現在進んでいるということです。現在の状態では、学校の教員が、子どもたちのすべての生活面を指導している。それを、教科の指導、つまり勉強の部分に少し焦点を当て直して、それ以外に必要な部分というのは、外部のスタッフの協力を得て、非常に多様な課題に

対して対応しなければならなくなっている、という考え方になっているところです。

こういう考え方を進めるために、さらに2つ、チーム学校と共に進めようとしているものがございます。

その中の1つはコミュニティ・スクールという考え方です。これはですね、学校というのは基本的に先生方の職員会議で、教育のやり方や目標を決めていったわけなんですけれども、そこに地域の方にも参画していただいて、学校運営協議会という委員会を構成しまして、地域の方と一緒に、小学校の運営のやり方、並びにその評価を行っていくというものです。文部科学省としては、日本の学校をすべてコミュニティ・スクールにしたい、とも言っています。

もう1つはですね、地域学校協働本部という、今までは地域の方が学校を手助けする、ということをお話してきましたけれども、地域の方が学校を手助けするだけではなく、そういう形で学校を中心に地域の方が集まることで、逆に地域のコミュニティに学校が役立つ形で作っていくというような取り組みです。つまり子どもたちに様々な、例えばキャンプのプログラムを、地域の方々が計画して実践する。そういうことを通して、スタッフを地域で募集するという、さらには地域の他の方も参画されるということ、そんなことをどんどん広げていって、逆に学校でキャンプ・プログラムを行うということが、地域のコミュニティ作りにも役に立つということを、積極的に狙っていくという考え方にです。つまり、学校と地域というものの連携や協働が、現在の学校の指針になっているということです。

チーム学校という体制を進めていく。そのためにコミュニティ・スクールと地域学校協働本部という事業を進めていく。そしてこういうシステムを支える、いわば人材を育成していく。この人材は、教員も変わらなければいけませんし、教員と一緒に進んでチーム学校を進めるスタッフも、養成と研修を行っていかないとイケないということです。

地域とともに、子どもたちが育っていくというのは、昔から言われていることではありますけれども、しかし自然に任せていたのでは、そういう状態がもう地域ではなかなか成り立たないという時代なんですね。それを日本の社会が実感していることであると思います。今後進めるにあたって、様々な課題が出てくるとは思いますけれども、基本的には、この仕組みというものを広げていきたいということで、様々なさらに具体的な施策が考えられているということになります。

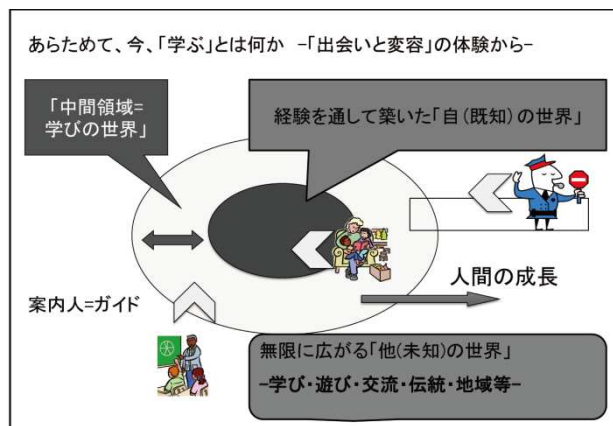
ここで、こういう話を、もうちょっと身近な話として考えていきたいと思います。皆さま方にちょっとお手伝い

ただきたいことがあるんですけど、今その場で、お近くの方と二人組を作っていただいてよろしいですか？そして左手で握手をしていただきたいのですが、協力いただけますでしょうか？それでは、左手で握手をしたまま、今度は右手でじゃんけんをします。じゃんけんをしまして、勝ったら、つないでいる相手の左手を叩きます。負けた場合は叩かれないように、右手で左手をカバーします。そして、カバーされずに、叩けたら1点。これを2点とったら勝ち、というゲームです。

簡単なゲームですが、楽しいゲームですね。性格が出るのでしょうか。負けていても迷わず叩きに行ったり、勝っていても、お構いなくカバーしたりしてますけれども。大変面白いゲームだと思います。

今のゲームも、こういう場で行うと大変楽しいんですが、何が楽しいと思いますか？今はもうシーンとされてますね。先程は非常に盛り上がっていらっしやっただすけれども。もちろん、ゲームだから楽しいんですが、よりもう少し考えていきますと、皆さま方のご様子を見てますと、失敗したとか、間違っただという時に実はすごく盛り上がっていらっしやいました。例えば、負けたのに相手の手を叩いた。普通なら、それちょっと駄目なんじゃないかと思うんですけども、その時大笑いされています。つまり、失敗した時が楽しいという感じがあるんだと思うんですね。失敗しても楽しいのはなぜかと言いますと、やっтерことが難しくって、失敗しちゃったって感じなんですけど、そもそも失敗してもなんてことないと言いますか、つまり失敗したことが、そんなダメだっという風には問われないからこそ、失敗しても気楽ですし、だからこそ、もう1回っという風に、チャレンジしたくなります。

これはいわゆる遊びの原理だと思います。つまり、言い方を変えますと、失敗してもオッケーな世界のことを、遊びと呼んでるんだと思います。ところが最近の子どもたちは、失敗することをすごく嫌がります。つまり、遊べない子どもたちが増えている。そんな風にもちょっと思えるんです。この、失敗してもオッケーだっというこの感じは、自分一人で思うわけにはいきませんので、実は、今、手をつないでくださった相手との関係が成り立っているから、思い切って失敗オッケーの世界を作れたんです。ですが、例えば、今、手をつないだ時に、相手の方がもうしかめっ面をして、叩かれたら、痛い、とかって大きな声でおっしゃったりされたら、もうちょっとこれは遊べないですね。そういうような意味で、失敗してもオッケーだっという世界や、チャレンジするぞっという気持ちというのは、往々にして、他者との関係に何か依存する場合が多い。この他者との関係をどう考えていけばいいのか、先程から国の話をしてきましたけれども、今度はそれを手前の話として、子どもたちということでは、どういうことなんだということを考えてみたいと思います。



真ん中には、子どもの今の世界、つまり経験を通して築いた、子どもの今の世界というものが表象されています。それに対して、子どもから見ますと、やっぱり外側に知らない世界がいっぱいあります。その知らない世界を子どもたちは、出会いを通じて獲得していきます。ただですね、この出会いというのは、自然発生するだけではないので、ガイドさんというこの存在がいて、大変その出会いは広がります。例えば、私たちが旅行なんかしますと、海外旅行に行った場合に、語学が苦手だっという方だと、ホテルのチェックインも大変難しいわけですよ。そんな時に、ガイドさんがいてくださると大変ありがたい。ガイドさんが、そういう形で、ありがたいと感じる役割を果たしてもらえるのは、自分の言葉も知っているし、現地の言葉も知っている。つまり、内部のこともよく知ってるし、外部のことも知っている。だから、つなげるという存在になるんだ、ということになります。

それに対して、子どもの今の世界をしっかりと守ってあげる、というような大人も、子どもには必要です。子どもの世界は傷つきやすいですし、移ろいやすいですから、背伸びするばかりではなく、安心感が持てる、そういう空間を守ってあげる大人も必要です。さらにはガイドさんのように直接子どもには関わらないが、子どもですから、何が危険で、何が安心なことかなんて言うのもわからない時があります。そういうものを優しく見守ってあげて、時には注意を促す、そういう大人も子どもには必要です。子どもの成長のそれぞれの場面に、違う役割を持った大人というのが、子どもたちに関わる必要があるということです。

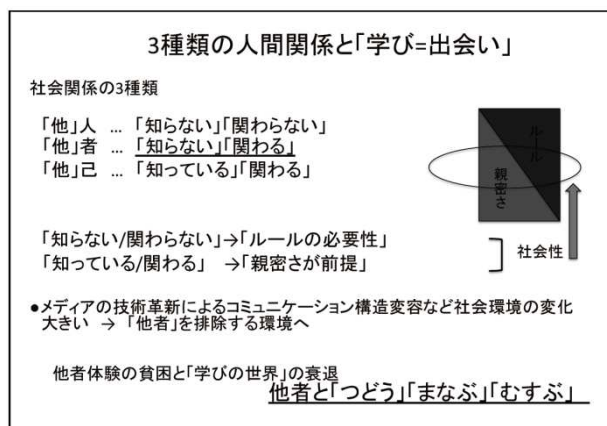
こんな風に考えることができたとしても、この3つの、世話をする大人、ガイドをする大人、そして見守る大人というのは、従来ですと、家庭、学校、地域というものが、ほぼ役割分担をしてきたのではないかと思います。もちろんガイドをする人というのは、何も学校の先生だけではありませんので、この辺りは、お互い重なり合う、もちろん、お父さんお母さんがあるガイドになることもあります。ですが、基本的にはこういう3つの役割を、3つの場所が担当してきた。ところが、現在、日本の社会では、家庭や地

域というものが、かなり変化してきています。その中で、その子どもに対する不足部分を、真ん中の学校が、カバーしようとしているようなところもあります。ですがこれは、先程来お話ししている、学校の先生の多忙さにつながるところがあります。そういう意味で、本来は家庭、学校、地域というような、社会全体で子どもは育てるものですから、ここまでにお話ししてきたチーム学校というような教育の施策は、まさに本来の子どもを育てるための社会の姿を、もう一度取り戻そうということではないかと思ったりします。

ただ、一つここで皆さま方にお考えいただきたいと思うことは、先程のじゃんけんゲームのことで。じゃんけんゲームが面白いのは、人との関係が上手くとれた時だという話をしました。相手の方がとてもいい方なので、じゃんけんゲームが楽しいんです。その相手の方との関係というのはどんな関係なのかということを、改めて振り返っていただきたいわけです。普通、社会生活を送っていますと、3種類の人間関係の取り方に囲まれるということも、よく言われます。3種類の人間関係が、どういう関係かと言いますと、少し聞き慣れない言葉ですが、他人、他者、他己という関係性です。

他人の関係から説明をしてみたいんですが、「あなたとは他人よ」という関係というのは冷たいですね。つまり、離れていく存在です。関わらないわけです。知らないわけです。ただ、知らなくて関わらない他人は関係自体がないかと言うと、そんなことはないです。例えば電車に乗っていると、お隣に立ってる方もいらっしゃる。この方は、もちろん知らない、関わらない、他人ですね。でも、だからといって、このお隣の方の前へ行って「わあ！」なんて言ったら怒られますね。知らない人の隣に立ってる時に、関わらない人であるからこそ、迷惑をかけないというルールは守ってるわけです。つまり、ルールがあるから、その場に一緒にいられる関係を、他人関係と言ってるんだと思います。

逆にルールがなくても非常によく成り立つ関係というものもあります。それは例えば家族とか友人、いつも一緒にいる方、親しい方ですね。これをここでは他己と呼んでいます。他己は、知ってるから関わるという意味で、非常に親密さのある関係です。親密だからこそ、ルールがなくても関われるわけです。例えば、家庭の廊下の真ん中に点線を引いて、右側通行ね、なんていうルールを作っている家庭はないと思うんですが、それは家族という親密さがあるから、ルールがなくても、親しく関われるからです。そうすると、知らないから関わらない他人と、知ってるからよく関わる他己という、関係性というのは、2つに別れる気がします。ところがもう1種類あるというのがポイントです。それは何かと言いますと、他者という関係です。



この他者という関係は、知らないけど関わるという人です。知らないけど関わる人なんているのかな。例えば生活の場面では、今日、こういう会に集まって初めて出会われた方々は、知らなかったけれども、まさに関わっていらっしやいますね。キャンプなんかのプログラムで、初めて集った子どもたちとの関係、あるいは、大人と子どもの関係。これも他者関係です。もっと身近な例で言いますと、コンビニエンスストアなんかで買い物をされる時に、店員さんと関わります。これも知らないけど関わってることになります。自動車学校の先生だとか、英会話スクールの先生だとか、この知らないけど関わるという関係は、たくさんいます。この他者関係の重要なところは、自分の知らない人と関わるということは、自分の知らないことを知っている可能性が一番高い人ですから、その意味では、出会いというものは、他者において起こるということです。つまり、関係を持てば出会っているわけではなく、知らないこと、あるいは自分の思い通りにならない人、あるいはわからないという存在だった人、そういう人と出会うということが非常に自分にとって、意味のある出会いになる。それは、他者関係にほかならないということです。そして先程のじゃんけんゲームなんですけども、ここにいらっしゃる皆さま方が、この他者関係を作るのが上手な方だったから、成り立ったということじゃないでしょうか。けれども、最近の生活の中では、この他者関係が大変貧しくなっています。例えばメディアや環境の変化が、大きな原因になっているところがあると思います。例えば携帯電話です。携帯電話に電話をかけますと必ず本人が出ます。昔は携帯電話はなく、家に1台電話がありました。その時には、電話をかけても本人が出なくて、誰か知らない家族の人が出る可能性もあったわけです。その意味では、家電では他者に触れる関係があるんですけども、携帯電話では他者に触れる関係がなくなっています。そのような形で、メディアの変化が子どもたちから他者体験というのを、かなりの程度奪っているんだと思います。ですから、そういう中で、キャンプ等のプログラムにおいて他者と出会うということを意図的に作られている、こんなことが、おそらく大変重要な

意味を持っているんじゃないかと思えるところがあるわけですね。

そんな風に考えていきますと、最初にお話ししました、チームとしての学校という関係は、子どもたちのいわば学校という日常生活に、他者を呼び込む施策でもあります。つまり、子どもたちに、斜めの関係とよく呼ばれますけれども、先生でも、友だちでも、ご両親でもない、そういう異なった人の学校への参画を促すことで、他者関係を広げていく、そんなことを、たぶんやろうとしてるのではないかと思います。この他者とどうつなぎ、どう学び、どう結ぶのかということが、実は問題になっている、そんな風に、身近なレベルでは読み替えることができるんじゃないかと思えます。ですので、環境を作れば何でもいいというわけではなくて、知らない人とつながるという、そういうある種、弱い関係というものが重要なんだと思います。また、他己だけではいかなのだかと、環境を作ると言っても、仲良しということだけに留まっていけないんだというように感じます。

それですね、他己というような強いつながりというのは、大変安定性の強い集団ですけれども、強いからこそ、実は弱さというものがあります。外部の刺激がないわけですね。それに対して、他者というような、知らないから関わるという弱いつながり、この中には、実はそのことで初めて自分がよくわかる、つまり最初のだまし絵の話ですね。あるいは、知らないからこそ、その知らないことを自分のものにして、新しい解決の仕方を探ることができる、そのような強さがあります。ですから、弱いつながりの持つてくる強さ、逆に強いつながりの持つてくる弱さ、ということを考えるというような課題でもあるんじゃないかな、ということです。

それですね、最後の話を進めていきたいんですけども、こういうことが、現実的に学校に進むとどんなことになるのかという事例を、少しここでご紹介させていただきたいと思います。

昨年、一昨年と、東京都にある小学校で、あるテーマで私と学校の方と一緒に、とにかく外部の人材を学校へ取り込むと、学校がどう変わるかということを1年間やってみました。まず進めてみるにあたって重要であったことは、外部と学校がつながるといふ時に、コーディネーターという存在が非常に大きな問題になった。何かと何かがつながる場合には、やはりその間、結節点が必要になります。その部分を、コーディネーターという方が担われると思うんですけども、この存在が基本的には必要であった、こんなところからスタートしました。

そこで、具体的な例を見ていただきたいんですけども、これは日本の小学校で行われている体育の授業、特に夏の水泳の時間です。普通は、学校の先生方が授業を行います。

ですが、ここで遠泳というイベントがあり、それに向けて児童の体幹を鍛えるというテーマで、地域の専門学校のトレーナーの先生がボランティアで入って来てくださった。そうすると、学校の先生方は体幹という言葉をご存知なかったですし、これを鍛えるために水中エアロビクスのようなことをされたんですけども、そのようなことは教科書には載ってないわけです。ただ、こういうことをすることで、大変子どもたちの興味関心が高まります。プールサイドでも、体操をされたみたいなんです。このように、学校の先生方も非常にご自身の知見を広げられたと共に、子どもたちの興味関心が非常にアップしたということがありました。

また、これは算数の授業で、角度についての勉強があるんですが、近所の方に「角度を測るアプリというのを持つてくるよ」なんて言う方がいらっちゃって、タブレットを持ち込みまして、その角度を測るアプリを使って学校の中にある角度をとにかく計ってみようという活動が広がりました。そうすると、「あっ、ここにも角がある」「あそこにも角がある」という話になりまして、結局子どもたちに角というものの感覚が、非常に育っていきました。子どもたちは非常にその角の存在ないし、算数の授業で狙っているものを理解した、という授業が生まれることになりました。

また他に、道徳の時間で家族愛という教材がありました。お母さんやお父さんが大変経済的に厳しくて、魚のアラを子どもたちが美味しいと思えるように一生懸命に料理をして準備するという内容です。ですが、今の子どもたちにはこのアラというのがわからなかったです。でもそこがわかりませんと、この教材の良さが伝わりません。そんな話を参観日にされた時に、ご近所で魚屋さんを営まれている方に臭い臭いと言いながら、わざわざこのアラを抱えて持ってきてもらったわけです。それで子どもたちが、初めてそういうものなのか、という形で非常に興味関心が湧き、教材の意味を理解していくことができました。

さらに、これは大変大掛かりな授業だったんですけども、音楽の時間に、大変有名な「星降る里」という歌を、みんなで合唱するという時間がありました。ところがこの歌の歌詞に、本当にシャワーのように星が落ちて来るといふような情景を歌う部分があるんですが、都市部の子どもなので、空に星がそんなにシャワーのようにあるという状態が全くわからないということが起こったわけです。この歌詞のイメージというのを、子どもたちに伝えたいんですけど、という話をした時にですね、たまたま子ども館にお勤めになられている方がいらっちゃって、移動プラネタリウムというのがあると。それで、学校に移動プラネタリウムを持ってきて、子どもたちにプラネタリウム体験をさせました。また、タブレットのビデオ通信を利用して、長野県のその歌詞の作詞をされた場所に転勤された学校の

先生がたまたまいらっしゃったので、それでビデオ通信でその現地の光景を映された。さらには作詞家本人に話を聞く場までネットワークが広がり、設けることができました。そのことで、非常に子どもたちの心が揺さぶられまして、私も最後の合唱会を聞きに行きましたけれども、これは本当に素晴らしいものでした。

そのような形で、学校も外部と連携することで、学校の内部の動きが、ずいぶん本当に変わってきたわけです。そのことを引き受けまして、大学でも何か試みないといけないんじゃないか、ということで、まず一つ、学生たちが企画を出しまして、家庭科の授業にミシンの専門家を呼んできました。ただ、呼んできたっていうのは、実際に来ていただいたわけではなくて、ビデオ通信を授業中につないだんです。その上で、子どもたちが教室の中でミシンの実習を行うんですけれども、そこでつまづいたところを、ビデオ通信先のプロの方にどうすればいいんだという風に尋ねる、そういうことで進めるというような授業が成立しました。また、大学に来ている留学生の皆さんに、これもまたビデオ通信で教室にいる子どもたちと会話をしてもらうことで、学校の中で学んだ英会話の授業を、即実践するというを行っています。さらには、大学の講義のひとコマなんですけれども、大学生たちが作った体育の授業のプログラムを実際に小学校の先生に行っていただいて、その様子をビデオ通信で教室で見ているということをしました。録画しているわけではなくて、オンタイムでつないでいるという状態です。

この3つの事例はICTを使って、外部との連携を図ってるわけなんですけれども、こういうことが非常に大きく小学校の活動を変えたという実感が、参加者の中には広がっています。

そのような形で、子どもたちに他者体験というものを広げるというところから、学校に様々な外部の人材をつないでくることが、現在の学校の課題になっています。そういう意味では今回ご参加いただいているキャンプ協会の皆さま方も、まさに学校外場で子どもたちに対して、自然体験あるいはキャンプを通した、様々な体験を提供されてきたと思いますので、その活動が、学校ないし他の団体を含め、子どもを巡ってネットワーク化していくということ、連携や協働をしていくということです。そのことを通して、さらに子どもたちに他者体験の輪を広げるということが、おそらく現在の日本では大変求められているんじゃないかと思います。

私自身も、小森伸一先生や、鈴木聡先生たちと一緒にあって、こういうことをさらに進めたいということで、現在、教育支援人材認証協会という大学が加盟する団体を起しました。そして、その団体で地域の皆さまが学校や様々な教育現場に出て行っていただく、その橋渡しの役割を担えるようにと活動しております。これはその頭文字をとって

JACTES（ジャクテス）と言っています。現在20程度の大学が加盟してまして、6,000名程度の認証者がおります。活動内容は、教育支援人材というような、学校の外部から教育に参画してくださる人材、そういう方々に講座を行い、ある基礎的な学びを行っていただいたことを証明するという教育支援人材の認証ということ、さらにはその認証のための講座の認証、さらにそういう制度の普及、あるいは研究開発ということを主に行っているところでございます。

この認証の制度は、具体的にはこどもパートナー、こどもサポーターという呼び方をしています。前者が4時間の講習で認証ができ、後者がそれにプラス8時間、トータル12時間の講習で認証が出ます。この認証の特徴は、基本的なところは共通化してるんですが、実際に講座を行う場合は、各地域の大学や、各地域の行政、さらにはNPO団体等との関係で講座自体をカスタマイズしているところです。こちらの基礎的な部分、例えば、子どもと関わ合うとはどういうことか、そういう時にどんな力が必要なのかなど。さらにはですねご自身を、ご自身で振り返る、詳察とでも言うんでしょうか、そういうようなことに関して定めておりまして、そこを踏まえた上で、それ以降の部分は講座が行われる現地で、カスタマイズしているということが原則になっている仕組みです。

この認証を考えた時に工夫しようと思った点は、基本的に資格というのは、信頼というものを社会的に作る時に非常に有益なものだと思います。子どもを巡って、学校外の人が学校に入っているということになりますと、大変、学校方もまずは身構えます。それはまさに、他者だからです。わからない部分があるからです。その部分を普通はルールという形で押さえるわけなんですけれども、そこが認証という制度があると、カバーされる可能性が出てくる。それだけで円滑に運営されるわけではありませんが、手がかりのところとしては、大変有益なものになるんじゃないかと思いたわけです。

ところが一方では、状況とかその場の特色があるにも関わらず、共通なものだけを履修して、それでにおいてなにかの認証を出すということ、それは本当に意味のある認証になるんだろうか、そういうこともずいぶん考えました。ですから、できるだけ現場でカスタマイズする。必要なことを、必要に応じて学ぶ。そのことが認められるという仕組みにならないかなど。その辺りは、この認証制度の設計において工夫したところでございます。それがどれほど上手くいっているかどうかは、まだまだわからないんですけれども。とりあえずこのような形で、7年ほど行っているところです。

キャンプ協会も指導者認定制度を行っていらっしやると伺っておりますので、そのような先輩の行われていることなんかを勉強させていただきながら、さらに申し上げま

すと、そういう認証間の連携とかネットワーク化を、今後ぜひ図らせていただき、一緒になって子どもたちの他者体験というものを広げる、そんなことがまたできたらと思っています。

最後に、こういう活動を私自身行っておりまして、連携、協働というような、「つながる」ということを、今日何回もお話しさせていただきましたが、実際にこのつながるということが、個人と個人、現場のレベルでは、割りとたやすく起こる場合があるのですが、組織と組織がつながるということの難しさということに直面する場が大変多い。そんなことを、体験の中でちょっと感じているということでお話しさせていただければと思います。

子どもたちを巡っては、やはり社会全体で子どもたちを支えていくというような環境作りが必要。だとしますと、様々な場面や様々な事柄が何かの形でつながっていくということが必要な気がいたします。その様々な場面という

のは、それぞれに焦点化された組織が普通は活動している場合が多くございまして、ただその活動している組織間の関係がつながっていく、あるいは円滑に何か共同して新しい事業を行っていく、そういうことがしかなかなか難しいわけでございます。そういう意味では、キャンプ協会のような本当に歴史や伝統も実績もあるような協会にぜひ声をかけていただいて、今後ネットワークというものを広げていくような活動のリーダーシップとっていただけると大変ありがたいと思いますし、お声をかけていただけましたら、教育支援人材認証協会も一緒に何かつながらさせていただけたらありがたいと思います。つまり組織と組織の間にも他者関係ということが必要なんではないか、また他者関係という言葉、出会いという言葉キーワードでお話しさせていただきましたけれども、それは単に子どもたちのためだけというよりも、活動に従事する私たちにとっても非常に大きな課題ではないかということで、私の話を終わらせていただきたいと思います。

協力：教育支援人材認証協会 (JACTES)

質疑応答

Q. 先生のお話の中で、案内人の必要性についての話をされました。私たちは指導者としてそのような位置付けが大切だと思ひながら活動しています。今、時代が変わってきているというところで、例えば、少子ということに関して、私たちが子どもだった頃には、案内人として地域のお兄ちゃん、お姉ちゃんがいました。まず第1の案内人には、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいて、いろんな次のステップを教えてくれるって言う世界があったのが、今はその関係性がなかったり、少子ということでその関係性ができない。そういうところが一番問題かなあと思ひながらも、そこ一番配慮しながら案内人は考えて、自分がどこまで出て行って、その関係性を作っていくのか、どこを見せるのかってことが重要じゃないかなと思ひながら聞かせていただいたんですけど、その辺りはどこでしょう？

A. 確かに、子どもたちの数が減る中でですね、地域の中にちょっと上のお兄ちゃん、お姉ちゃんとか、あるいは、世代、異年齢の関係性というのがなかなか作りにくくなっているというのは、おっしゃる通りだと思います。そういう中で、我々が積極的に、その逆に環境を整えていくということが求められているなと思うんですけども。

ひとつ、合わせて気になることがあります。ガイドさんも、例えば一人だったらいいんですけど、十人もガイドさんが付きますと、どのガイドさんの話を聞いたらいいかわからないんだと、そんなこともたまにはある。つまり、子どもたちが、その他者関係を広げるという時に、一方では、子どもの主体性という問題が同時に尊重されていなければならない。その部分にあまり大勢の大人にかぶさってしまいますと、やや見えにくくするような時もあるのかなと。そんな中で、じゃあどの部分を、誰がどんな風に、関わっているのかということを考えることになってきますと、やはり、大きな意味でのグランドデザインだとか、あるいはネットワークというような、そういう視点を持ち込んでいかないと、子どもたちの方が、そのお皿の中で外部からの水が多すぎて溢れてしまうというようなこともあるのかなと。これただそんなことも併せて思う、というようなことなんですけども



ナイト・オン・ザ・タウン

10月30日・大会3日目

東京の夜を楽しむことのできる、ツアーが開催されました。皆さん思い思いに夜の東京の街を楽しんでいました。





基調講演 4 「日本のキャンプ」

10月31日・大会4日目

今大会締めくくりの基調講演として、日本キャンプ協会会長の星野敏男氏に、その特徴や歴史について特に焦点を当てて、日本のキャンプについてお話しいただきました。



講師プロフィール 星野敏男

公益社団法人日本キャンプ協会 会長

明治大学教授

日本野外教育学会理事長

公益社団法人日本キャンプ協会 WEB サイト : <http://www.camping.or.jp>

私の講演にご出席いただきましてありがとうございます。金曜日から会が始まりましてもう4日目ですので、疲れているのではないかとかと思っています。どうぞ、リラックスして聞いていただければと思います。それでは、日本語でスピーチさせていただきます。今日の話について、針ヶ谷実行委員長の方から、キャンプと教育の関係とか、キャンプと文化の関係とか、その辺のことについても触れていただきたいということもありましたので、私は、大学の教員として野外教育の研究もずっとしてきていますので、前半の部分では、日本のキャンプの歴史や特徴などに触れまして、後半部分では、私が自身の研究専門分野としています野外教育の視点から Organized Camp を見るとどう見えるかという風な話をしたいなと思っています。普段は、大学で講義をしていますので、居眠りしている学生の前で話をするのは全然平気ですので、もし眠くなったらいつでも寝てください。

私のつたない思いや考えたことを英語で話すのはとても難しいので、今日は日本語で発表させていただきたいと思います。ご了承ください。また、配布資料の方には、英文もつけさせていただきましたが、私のつけた英文なので、もしかすると誤りがあるかもしれませんし、あるいは、不適切な表現があるかもしれません。もし、そのような内容がありましたら、私の責任になりますので、よろしくお願ひしたいと思っています。それからキャンプという用語をよく使いますが、基本的に Organized Camp、組織キャンプのことを指しています。

まず、日本の古い写真を紹介したいと思います。日本の Organized Camp、組織キャンプは、ちょうど1920年頃始まったと言われております。ICC2000(2000年に開催した国際キャンプ大会)の時にこの話をさせていただいていますが、これはボーイスカウトのキャンプです



けども、ちょうど100年ぐらい前の写真かなと思います。私たち日本キャンプ協会は1966年にできましたけども、これよりもずっと前から、古い時代から、日本の青少年育成団体のキャンプはスタートしていました。こちらがYMCA キャンプの古い写真です。この人は小林弥太郎さん。日本で大変有名なYMCAの組織キャンプを立ち上げた人なのですが、この写真は、もしかすると野尻学荘を作った頃か、あるいは山中湖のキャンプ場を開拓した頃かな、その頃の写真じゃないかと思っています。これらの写真は、それぞれの団体さんから以前お借りしてきたものです。ボーイスカウト、YMCA、ガールスカウトキャンプ、それから、これは、YWCAのキャンプ、たぶん野尻湖ですね。これも100年くらい前の写真かと思っています。



日本の最初の頃の組織キャンプは、民間の青少年団体によって推進されていきました。一方で、日本では、かなり古い時代から、学校が主催する林間学校が古くから行われておりまして、子どもたちを自然に囲まれた海とか山とか、学校以外の場所で教育することが行われていました。海水浴とかハイキングとか登山とか、もちろん学習なども一緒にやっているものがありました。キャンピングという名称は、当時は使っていませんが、これらも組織キャンプの一種と考えて良いんじゃないかと思っています。それから特に、日本の学校では、登山を学校行事として行なう習慣が昔からありまして、筑波大学の井村先生の研究によりますと、1889年、それから1890年頃にすでに長野の学校でこういう行事が行われていたということが明らかにされていて、先程お見せしましたこれらの写真より30年ぐらい前に、すでに学校で登山が行われていたという報告もあります。井村先生はこの学校登山を日本の野外教育の最初と位置付けていいだろうと言われております。それから、乃木希典学習院院長が臨海実習のための宿泊手段としてテントを用い

たという古い記録もあります。これは師岡先生が研究発表で紹介されていました。



さて、次の古い写真です。何に見えるでしょうか。昨日の基調講演で使われていたような、だまし絵ではないですよ。配布資料には載せていない写真なのですが。実は、これは、60年ほど前の私の写真なんです。隣にいるのが私の母で、今では珍しいですけど和服にかっぽう着というのを着ています。私が生まれ育った家の前で撮った写真です。もう一枚、最近撮った写真（配付資料の表紙に使われた写真）をご覧に入れましょう。先程の古い写真に映っている木造の橋、今は、この新しい写真の方の赤い橋と同じ橋です。配布資料の表紙の写真の川は、私と母親の写真のすぐ後ろを流れている川の写真です。今もこの川はそのまま流れています。川は、今も昔と変わらずに流れていますが、私が子どもの頃、この川の向こうに私の同級生の家があったんですけど、彼の家には、電気が来ていなくて、ランプの生活をしていました。電話はもちろん、テレビもありませんでした。今から考えますと、まるでタイムマシンに乗ってずっと昔に戻ったような生活でした。私はここで、高校3年まで育ちました。私は、7人兄弟の末っ子なんです。昨日の高野孝子さんの講演スピーチにもありましたけど、地域には学校以外の教育もありまして、私はここで生きていくためのノウハウを、両親からは元より、お年寄りや、青年団という人たちにいろいろとノウハウをたたきこまれました。もし、高校卒業後に東京に出てこなければ、ここで充分生きていけたかと、そのように思っています。ただ、この後、日本はものすごく急激な変化をしていきまして、高野さんが言われていたような、生きていくための技術を受け継いでいく世代はこの地域では、私たちがほぼ最後の世代になりました。私の4〜5歳下の人たちは、もうこういうノウハウを持っていないです。日本はその後急激に変化していきますが、この当時の、電化製品などがまだ何もなかった頃を知っている世代として、今、世の中がどんな風に見えるのかとか、そういう話も少ししておきたいなと思います。

第二次世界大戦後、日本の社会は急激に成長を遂げていきまして、高度経済成長時代がきて、私の田舎にもあつというまに電話やテレビ、冷蔵庫、洗濯機、家電製品類が普

及し始めました。人々の生活も安定しまして、夏は海水浴とか、冬はスキーとか、アウトドアレジャーが大流行して、この写真は、毎日新聞のネットからお借りしましたけども、確か新宿駅の様子だったように思います。それから、最初に紹介しました YMCA、YWCA、ボーイスカウトさん、ガールスカウトさんのキャンプも、戦後再び盛んに行われるようになりました。1951年、読売新聞社が第1回学生キャンプを戸隠高原でやりました。昨日この会場に、長谷川純三先生、斉藤保夫先生、田中祥子先生もいらっしゃいましたけども、その頃のキャンプに関わられていた方が、昨日は、この会場にもたくさんいらっしゃいました。

日本は1964年の東京オリンピック開催に向かって、社会が一気に変化していきました。この写真のおふたりが誰かは、私たち日本人にはよくわかるのですが、長嶋茂雄さんと王貞治さんと、2人が国立競技場でオリンピックを見ている写真です。東京オリンピックは1964年に開かれたのですが、それに先立ち、1961年に、このオリンピックを成功させるために、日本ではスポーツ振興法という法律が制定されました。この法律は私たちの日本のキャンプを始め、野外活動に大きな影響を及ぼしました。この法律では、スポーツ、例えばサッカーとかバスケットとか陸上競技などの各種のスポーツの他に、身体運動にかかわる徒歩旅行（ホステリング）、自転車旅行（サイクリング）、キャンプ活動（教育キャンプ、組織キャンプ）などの「野外活動」を振興させることも条文に書かれました、つまり、日本のキャンプは、スポーツ振興法の中で取り扱われましたので、法律上は、キャンプは「野外活動の一部」であり、野外活動は「身体運動としてのスポーツの一部」とされましたので、日本のキャンプは、行政的にはスポーツや体育として、長い間扱われることとなりました。このことが、その後の日本の学校キャンプや林間学校で行われるキャンプにも大きな影響を及ぼしました。この法律の影響もあり、日本のキャンプは、集団宿泊訓練、登山やオリエンテーリングなどの体育・スポーツ的な身体運動を伴う野外活動と野外炊飯、キャンプファイアーなどがキャンプの定番として行われるようになっていきました。

また、一方で、東京オリンピックを間近にひかえ、国立大学の体育学部にも野外活動、野外運動などを専門に研究する講座、研究室が用意されました。東京教育大学（現在の筑波大学）の体育学部「野外運動研究室」が開設されたのが、ちょうど1964年、東京オリンピックの年でした。私がこの大学に入ったのは、研究室ができて6年後の1970年ことです。

この写真、私が学生の頃の甲斐駒ヶ岳登山の写真です。右端が私で、その後ろに長谷川純三先生も映っています。

この時長谷川先生はちょうど 50 歳頃で、先生がこの登山の時に「星野君、50 歳になると山登りもきついんだよ」と言っていたことを今でもよく覚えています。実習をはじめ、いろんな野外活動を大学生の時にやりました。昨日式典に来られていました斉藤保夫先生もその頃研究室によく来られてました。多くの方に、いろいろとご指導いただきました。



その後、野外活動、野外運動などを専門とする研究室は、他の体育系や教育系の大学にも設置されていきました。日本では体育・スポーツ系の分野の人たちがキャンプに関わることが多いという特徴がありますが、その背景には、このような日本の歴史だとか法律だとかも関係しています。

その後、野外活動、野外運動などを専門とする研究室は、他の体育系や教育系の大学にも設置されていきました。日本では体育・スポーツ系の分野の人たちがキャンプに関わることが多いという特徴がありますが、その背景には、このような日本の歴史だとか法律だとかも関係しています。

日本キャンプ協会が設立されたのは、ちょうど日本の世の中がこんな時代の時で、1966 年に設立されました。協会の設立にはいろんな関係者が関わっていきまして、青少年団体、野外活動の研究者、それから、体育スポーツ、レクリエーション関係の人、いろんな人が関わりまして、キャンプの普及と振興や指導者養成を目的とする団体として設立されました。

関西の方でも、戦後盛んにキャンプが行われており、YMCA で阿南海洋センターを設立され、日本キャンプ協会の会長をされました酒井哲雄先生はじめ、キャンプに関わる錚々たる方々が関西には大勢いらっしゃいまして、そのような方々も多数日本キャンプ協会の設立には関わっておられます。

ちょっと話題を変えましょう。日本では、国、都道府県、地方自治体が青少年教育施設を保有していきまして、全国の学校や民間団体に利用されています。これは、おそらく、日本の特徴の一つだと思います。この写真は、国立中央青年の家（現在は、国立中央青少年交流の家）ですが、最初の国立の青少年教育施設です。ちょうど 2 週間前にも行ってきましたが、すでに施設ができてから 60 年近く経ちますが、今も多くの国民の皆さんに利用されています。国や自治体がこういう施設を持ち、運営しているというのは、たぶん世界の中でも日本のかなり特徴的なことのひとつだろうと思います。自治体が運営しているものですから、学校の子どもたちや青少年団体がこういう施設を使う時には、使用料はほぼ無料で使うことができます。食事代だけを支払うような形になります。これは日本のとても良い仕組みであり特徴だと思っています。

それからまた話題をちょっと変えます。ICC2000（2000 年に日本で開催した国際キャンプ会議）の時の発表でも述べさせてさしていただきましたが、日本のキャンプの特徴として、非常に多様化していると紹介させていただきました。この傾向は今も続いています。ICC2000 が開催された頃に、日本の NPO 法案が制定されたのも大きな影響を与えたと思います。それまで任意団体だったたくさんの民間の方たちがこれを契機に NPO 法人になり、キャンプを提供するようになっていきました。

多様なキャンプが行われていることは、日本の特徴です。冒険教育的なチャレンジ克服型の活動だとか、グループでの協力協調プログラムだとか、環境教育や地域の文化に関わる活動など、いろんな活動が日本のキャンプでは提供されています。たぶん、日本のキャンプには多様な分野の人が関わっているというのも関係があるのかなと思っています。でも、私が考える多様性の一番の要因は、日本の自然がものすごく豊かだということが挙げられるのではないかと思います。今回参加された各国の方々も気づかれたと思いますが、日本はすごくいろんな自然があります。春夏秋冬の四季もありますし、山も、川も、海も、湖もあって、それから都市部から農村部、里山や森林まで、多種多様な季節と場所、いろんなところでキャンプが展開できるというのが特徴ではないかなと思っています。もちろん、昨日、高野孝子さんが発表してくれましたけども、その土地、土地に、その土地固有の文化というものがあるので、その土地の文化を味わうようなプログラムも展開可能になっています。

この写真は、富士山の近くを子どもたちがハイキングしているところです。とてもきれいなところです。こちらは、長野県の戸隠というところなんですが、ちょうど今ごろは、こんな風に紅葉をしているんじゃないかと思います。この場所は、冬になると、池も凍って、雪もたくさん降るんですね。次の写真のような感じになります。私は大学生の頃から毎年ここに行っているんですけども、同じ場所が冬になりますと、こんな風になりますので、学生と一緒にテレマークスキーにも行きます。それから近くにはとても古い神社もありまして、アウトドアスポーツを楽しむばかりでなく、日本の伝統文化を直接肌で感じるができる場所でもあります。こういう場所が日本にはたくさんあります。今回参加されました各国の方々も、それぞれのキャンプ文化をお持ちだろうと思います。皆さまのキャンプ文化と、日本のキャンプ文化とを融合させて、新しいキャンプ文化を創っていきけるといいなと考えたりしています。

さらに話題を変えましょう。次の内容は、最初の開式にご臨席を賜りました秋篠宮妃殿下にもすでにお話しさせ

ていただいた内容なのですが、キャンプと教育に関する話です。私は野外教育の研究をずっとしてきましたので、日本国内で発表されている野外教育の研究結果を少しまとめまして、妃殿下にお話しさせていただきました。

キャンプの教育的効果は、大雑把にまとめますと、以下の3つに分類することができるかと思います。1つ目は個人の成長です。本人自身の成長や心理的側面の効果を明らかにした研究が多数あります。それから、2つ目は、他者との関係やコミュニケーション面での効果です。社会性や他者とのコミュニケーション、友だち作りなどですごく効果が上がる。それから3つ目が自然認識ですね。自然認識だとか環境行動への効果です。

研究発表された代表的な個別の項目を見てみますと、達成動機、自己効力感や有能感、他者受容感や凝集性という集団に関わる項目も挙げられています。それから自己判断力、自己決定力なども挙げられています。キャンプに行きますと、いろいろ自分で判断したり、決断したりしないといけないことがたくさんありますので、こういう自己判断力という効果なども表れてくるのではないかと思います。それから、自然認識面での効果です。先程も触れましたが日本には豊富な自然環境がありますので、こういった面での効果も得られるのだと思います。それから規範意識の向上ですが、これは、ここオリンピック記念青少年総合センターの調査研究機関の調査結果で出されたものです。センターでは、「体験の風を起こそう」というキャンペーンもやっています。研究センターの調査では、子どもの頃に生活体験、自然体験、社会体験なんかをたくさん経験した人ほど、将来、意欲や生きがいを持って生きている、規範意識が高くなるというような調査結果が出されています。

ここまで紹介してきました具体的なキャンプの効果項目は、データや数値として実証されてきた効果です。他にも様々な研究データや調査結果が報告されています。また、キャンパーへの直接インタビューや感想文などから分析する質的研究の結果の報告も多数あります。

なぜキャンプでは、こういう教育効果が得られるかということですが、多くの研究者が、教育効果が得られる要因として挙げていることは以下のような点です。

1番目は、グループ、集団です。小集団や仲間との協働生活で何かにチャレンジしたり何かを成し遂げる、そういう体験がすごく効果が上がると言っています。逆に言いますと、キャンプにこういう場面を用意しておきますと、すごく効果が得られるやすいという風に言えるかと思います。2番目がチャレンジ。それから3番目が自然や人も含めて本物に触れること。それから4番目がリーダーやカウンセラー、指導者の存在です。今回お集まりの皆さんもリ

ーダーやスタッフのトレーニングをしていると思いますし、私たち日本キャンプ協会もたくさんリーダー養成をしていますけども、指導者が関わるということが非常に大事だと言われています。それから、仲間と一緒に暮らすことや、日々ふりかえりをする、などが挙げられています。

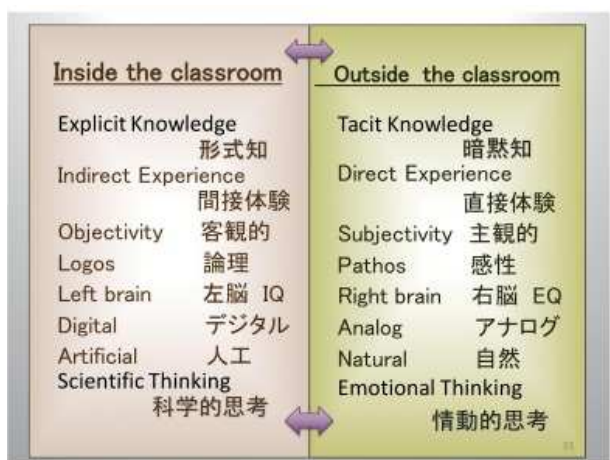
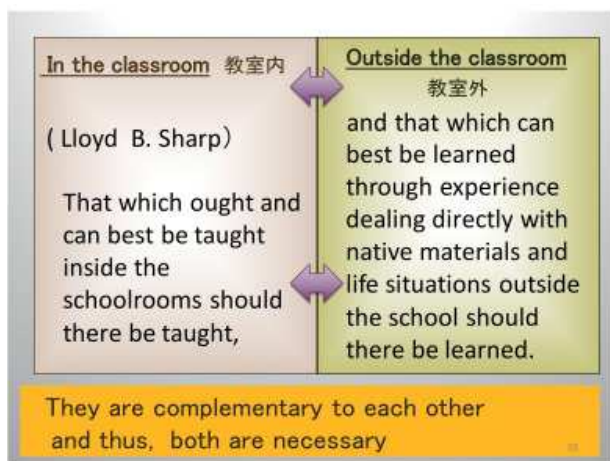


この図は、子どもたちの心が少しずつ大きくなって広がっていく様子を図示したものです。冒険教育の分野の人によく使われている図です。昨日、たまたま、松田先生も講演の中で同じような図を出されていました。子どもたちは、通常、真ん中の、自分が安心していられる場、コンフォートゾーン(Cゾーン)にいますけども、リーダーや指導者、松田先生が言うところのガイド・案内人がちょっとCゾーンから外に子どもたちを出させてあげると、体験をしながら、心がどんどん広がっていきます。身長や体重が大きくなっていくのは数値で表すことができますが、心の成長は数値やデータで表すことは難しいので、この図は心が成長する様子を上手く表しているなと思います。子どもたちは、キャンプの中で、こういったことを通して、自己や仲間との関係、自然認識なども含めて心を大きくしていくのだと思います。

私は、キャンプを教育としてみた時、つまり野外教育としてキャンプを見た時に、キャンプにはどういう特性があるかをずっと考えてきましたので、次にその辺の話を少ししたいと思います。

教育としてキャンプを見た場合、子どもたちはいったいキャンプを通して何を学習しているのでしょうか。教室とは違った屋外や自然環境という場をどう考え、そこで何を教えるのか、つまり、教育目標や教育内容、教育方法といったものがいつも教育的な課題として残ります。私は、教室内の教育と教室の外の教育との違いについて、比較研究してみました。キャンプなどの野外教育を学校での教室での教育と比較すると、構造論的に教室の「内と外」インサ

イドとアウトサイドという素朴な構造モデルとして考えることが可能です。



アメリカでキャンプ教育を野外教育へと発展させたL. B. シャープという有名な方がいます。彼の有名なよく知られた言葉に、次のような言葉があります。「教室の中でより良く教えることができることは教室内で、学校外で直接体験を通してより良く学べることは、学校の外（教室外）で学ばれるべきである」という言葉です。

そして、少し難しい話になりますが、上の上下に並んだ図の下の方の図は、このL. B. シャープが言う教室の内と外で扱う学習内容の関係、つまり、教科書で容易に教えることができることと、教科書ではなかなか教えることが難しいことの関係を少し、いくつかの用語に置き換えてみたものです。哲学分野の「形式知と暗黙知」あるいは、「間接体験と直接体験」「客観的知と主観的知」「科学的思考と情動的思考」などの知の二項関係で捉えることができます。「左脳と右脳」「IQとEQ」「デジタルとアナログ」との関係とも同じ関係です。

キャンプでよく行う「ふりかえり」という行為ですが、これは、キャンプで体験したきわめて個人的で主観的な思い（図の右側の教室外の内容）をふりかえりという行為を経て、いわゆる学習されたものへと変換する行為（右側の

図から左側の教室内の世界へ橋渡しをすること）で、言葉や共有された知識として学べるものに変換していることになります。

私は、教育学者デューイが言う、第一次経験と第二次経験の関係は、この図の右側のきわめて個人的に体験されたこと（第一次経験）を自分自身の内省や仲間とのふりかえりを通して、左側の図の他の人と共有できる体験や知に変換すること（第二次経験）を指しているのだらうと解釈しています。私は、どちらの方が正しいか間違っているかとか、どちらの方が教育として良いか悪いかといった関係を言っているわけではありません。どちらも大事ですし、バランスが大切です。キャンプや野外教育は、体験を学びに発展させることができるきわめてバランスのとれた良い教育方法であるということが言いたいのです。

もう一つ話題を提供したいと思います。共有体験と文化とキャンプの関係です。私のキャンプの原点は、学生時代にありますが、もう一つ大きな影響を受けたことがあります。30代半ばに、1年間北イリノイ大学大学院に客員研究員で行きました、この写真は、ハンマーマン先生とクリフナップ先生ですが、先生方から直接1年間指導を受けました。

ハンマーマン先生は、野外教育を行うことの意義の一つとして、「野外での直接体験を通して、言葉や概念の本当の意味が身につくことである」と言われていました。私はいくつかある野外教育の意義のうち、そのことがとても印象に残りました。先生がこの点を強調されていたことは、教育哲学者ジョン・デューイのプラグマティズムの影響もあると思われますが、最近特に先生の言われていた「本当の言葉の意味がわかること、身につくこと」が野外教育の強みであり、かつ大事な視点であるということが実感として、私にもよくわかるようになってきました。

アメリカでの1年間で、文化というのは、共有体験や、生活体験の中から形作られる価値観を基盤に、じっくりと時間をかけて作られていくということを強く実感しました。周りに日本人が誰もいなかったものですから、私はものすごく日本文化というものを受け継いでいるんだなあと改めて強く感じまして、私は、どこから、いつから、こういう日本人になっていったんだろうと思いました。

ある言葉が含んでいる意味は、言葉を受け取る本人の側の体験コードと言いましょいか、経験を通して自分がわかっている範囲内で入ってきますので、同じ体験が共有されていますと、言葉も意味を含んで相手に伝わっていくということがよくわかります。この写真は、初日に明治大学の

多田先生が発表してくれましたデフキッズのキャンプの写真なんですけど、私もお手伝いさせていただいています。私は、手話はできないのですが、ところが不思議なことに、子どもたちと、会話と言いましょとか対話と言いましょか、できるんですよ。今回の基調講演の平田オリザさんの話を聞いていてよくわかったんですけども、私と子どもたちの間には、キャンプを一緒にしているという共有体験があるので、オリザさんが言われていた「コンテキスト」が直接伝わってくるんですね。直接伝わるので、手話はそんなに読み取れないんですけども、彼らが言いたいことはすごくひしひしと伝わってきました。そんな体験を通して、言葉の意味の理解と体験の関係についてあれこれと考え始めました。

キャンプでテントに寝たことのある子どもたちにとっては、テントという言葉の意味は、例えば、Googleで検索して出てくるテントという用語の意味とは全然違う意味で捉えているはずですよ。ましてや、悪天候の中、狭いテントの中で何日間か一緒に生活をした仲間であれば、さらに深い意味を持ってテントの言葉がお互いに伝わり合うんじゃないかと、そんな風に思いました。こんなこともあり、私は、共有体験を通して言葉の本当の意味がわかるとか、体験を通して身につけた言葉に本当の意味が生じるというのもキャンプのすごく大きい意義だなと思うようになってきました。ハンマーマン先生が言っていたことはこれなんだなと、感じるようになってきました。

パソコンとインターネットが1985年頃を境に世界に急速に広まりましたが、先日読みました本では、85年以降に生まれた子どもたちを指して、デジタルネイティブと呼んでいました。そういうデジタルな時代だからこそ、体験することの意味がますます大きくなっていくのではないかと思います。インターネット上の用語と、自ら体験を通して身につけた言葉の意味と、全然違うだろうなと思います。写真に写っています子どもは私の孫ですが、今年の夏、私の実家の川に連れていきまして魚の釣り方を教えてきま

した。彼は、すでに私より上手にスマホを使いこなすんです。デジタルネイティブそのものです。でも、この夏に体験を通して身につけた釣りとか川遊びはGoogleの検索用語とは違う意味になって、体の中、脳の中に残っているのではないかと思います。ですから、キャンプを通して体験したものは、身体性を伴うと言いましょか、体の中、脳の中に直接記憶されるので、とっても大事であるとそんな風に思います。

私たち大人がキャンプで使っている何気ない言葉の中には、日本人の自然の見方や考え方、自然と関わる暮らしの中から紡ぎ出されてきた言葉が豊富にあります。子どもたちは、自然の中でキャンプをするという共有体験を通して、私たち大人が先人から受け継いできた日本的な自然観やものの見方、考え方、自然との接し方を知らず知らずのうちに学び、身につけ、受け継いでいるのではないかと、それが、大きな目で見ると日本文化の伝承につながっているのではないかと、最近特にそう思うようになってきました。

先程は、キャンプの3つの教育効果を紹介しましたが、私は、さらに4つ目の効果としてキャンプを通じた文化の継承を挙げて良いと思っています。戦後70年、ますますグローバル化する国際社会の中で、今の日本の子どもたちが成長し、海外の同世代の人たちと交流し意見交換する時に、しっかりと日本のもの見方、考え方を基盤にし、自分の国を誇り、自信を持って意見が言えるような、そんな日本人がキャンプを通してたくさん育っていった欲しいと願っています。

いつの時代にも大事なことは、「良質な体験の場と自然環境と信頼できる指導者がいる場」を青少年のためにいつも用意しておくことです。そのために最適なのが組織キャンプです。皆さん、これからも共に手を携えて世界のキャンプ振興に励んでいきましょう。

ご静聴、ありがとうございました。



アジア・オセアニア・キャンプ連盟総会・閉会式

10月31日・大会4日目

アジア・オセアニア・キャンプ連盟総会

多数のアジア・オセアニア地域のキャンプグループの参加者を得て、アジア・オセアニア・キャンプ連盟の総会が開催されました。

この中では、アジア・オセアニア・キャンプ連盟の今後の在り方や、次期会長についてなどが話し合われました。そして、次回の AOCC が 2019 年にマレーシアで開催されることも発表されました。



閉会式

大会の締めくくりに、ジョン・ジョルゲンセン ICF 会長、ビル・オークリー AOCCF 会長、星野敏男大会組織委員長の 3 名より挨拶をいただきました。

そして、今回の開催国の日本から、次の第 7 回アジア・オセアニア・キャンプ大会 (AOCC2019) の開催国のマレーシアへ旗を手渡し、次回の AOCC2019 の紹介を行い、会を閉じました。

その後、ロシアより来年ソチで行われる国際キャンプ会議 (ICC2017) の紹介と、参加各国から開催国の日本へ温かい贈り物の贈呈が行われました。





フェアウェル・パーティ

10月31日・大会4日目

大会最後の夜、場所をリーガロイヤルホテル東京に移し、ふりかえりムービー鑑賞や参加者全員でのゲームで大いに盛り上がりしました。

アクション フォー ビル バウカー ファウンド Action for Bill Bowker Fund

次回以降の国際大会への奨学金制度に向けた寄付金を集めました。お金を寄付することでステッカーがもらえる仕組みです。本大会にも奨学金を利用している参加者がおり、御礼のあいさつをいただきました。



ふりかえり「感謝のスライド上映」

大会中、“感謝”をテーマにした言葉をホワイトボードに書いてもらい、写真を撮りました。その写真をムービーにまとめて上映しました。

ゲーム「ハンドクラッピング」



最後にみんな一つになれる思い出を作ろうと、手遊びゲームをしました。最初は2人で、次は6人で、次は10人でとだんだん人数が増えていくゲームで最終的に大きな円を作り全員でゲームを楽しみました。あんなに大きな円を作ることはなかなかできない体験になりました。

「幸せなら手をたたこう」

参加者の水流寛二さんをお願いし、ギター演奏、歌で「幸せなら手をたたこう」をリードしてもらい、全員で歌いました。

「If you're happy and you know it, clap your hands」という名前でアメリカでも親しまれている曲ということで、英語の歌詞も用意し全員で一緒に最後の夜を楽しみました。





イベント・インターナショナルルーム

モーニング・ミニ・セッション

29日～31日の早朝に集合し朝の集いを行いました。参加者は朝霧野外活動センターの職員によるキャンプゲーム、明治神宮の散歩の2つから1つを選択します。言葉がなくてもできるゲームを体験し関係を深めることができましたし、散歩ではお話を交えながら神宮の杜の神秘的な雰囲気を味わいました。



インターナショナル・ルーム

センター棟3階の310号室は、インターナショナル・ルームとしてインフォメーションデスクが設置され、参加者の交流の場となっていました。各国からの展示や大会記念グッズの紹介もあり、盛り上がりました。



村上康成氏 CAMPING 表紙原画展

国際交流棟1階では、絵本作家の村上康成氏による日本キャンプ協会の会報誌表紙原画の展示が行われました。CAMPING131号～173号までの全43点が披露されました。



分科会

大会期間中を通じて全 50 題を超える分科会やセッションが行われました。

分科会の内容については、日本キャンプ協会 WEB サイトより当日のプログラムをダウンロードいただき、ご参照ください。



特別セッション

スペシャル・ニーズ・キャンプについての分科会を行った各講師による、特別セッションを行いました。それぞれの講師の活動や取り組みについて、ゲスト・スピーカーを交えてより深く掘り下げていきました。

オリジナルセッション

教育支援人材認証協会 (JACTES) の主催による、オリジナルセッションも期間中に行われました。A0CC2016 の一部セッションも共有し、相互の参加者が、子どものサポートについての考えを深め合いました。

キャンプ白書

参加者に事前アンケートに協力を仰ぎ、日本のキャンプそして世界のキャンプ事情についてまとめたキャンプ白書を配布、披露しました。海外参加者にも、より深く理解してもらうため、英語のダイジェストを盛り込んだ内容となっています。



分科会発表題目一覧(発表者名順)

題 名	発 表 者
Less is More: Propless and Prop-Less Games and Activities Workshop	Allan Lee
Our International camp to create a better world.	Ayako Tateno
A Survey on the Effect of Outdoor Activities for Japanese Women's university Students in Teacher or Childcare Worker Training Programs	Daisuke Nishijima
The Autobiographical Memories of Outdoor Education Program for the Associates Training ;An Exploration of Narratives and Memory Characteristics	Fuyuka Sato
Relationship between task value and self-concept in the camp training	Hikaru Iida
Stressor and stress coping in the university camp training	Hiroto Takahashi
Celebrating Camp Anniversaries and Milestones	Jeff Bradshaw
Skills of Organizational Camp for Disaster Response	Kazuki Yamane
Putting Children First—The Protection and Welfare of Children at Camp	Linda Pllium
Workshop: Creating inclusive camps through Universal Design	Maree Feurill
Top Ten Interactive Games & Activities That Campers Love to Play	Mark Collard
How to Run Ice-Breakers & Get-To-Know-You Games That Work	Mark Collard
The Effect of Educational Camps on “Fundamental Competencies for Working Persons”	Masahiko Tokuda
Group journal writing: A tool for enhancing sense of community on wilderness educational expeditions	Morten Asfeldt
The Thinking Process and Anxiety in Solo Experience.	Nao Yoshizawa
How to make sure the parents are at ease when their children live in camp when there are - no phone calls, no daily visit, and parents can't see their kids for at least two weeks	Ruth Feng
Impact of camp experience on children's assertiveness -Focusing on the Inventory of Organized Camp Experience-	Ryuhei Hisata
The positive impact for college student through the outdoor adventure program in Canada	Shinji Murai
Creating Camp for People on the Autism Spectrum	Sara Gage
Meanings of cultural aspects of educational expeditions -a Canada-Japan university program-	Takako Takano
How “the life-long effectiveness” can be given by a camp -From the life-story interviews of people who were camp-leaders.-	Tetsu Oma
Develop into “Life education” through Outdoor Education and Disaster Education	Toshiharu Yanagi
ICDC 参加報告	ICDC チーム
組織キャンプにおける ADHD の疑いのある児童への対応に関する一考察	石崎 琢磨
子ども達が森で野営活動（ソロキャンプ）を行う方法を体験する	上原 貴夫
キャンプにおける主体性と協力	加藤 綾音
ふくろ de おむすび ～野外炊事と防災からみる日本のキャンプ～	木村 彰秀
生涯スポーツセミナー	久保 和之
手作り道具でキャンプをくすぐる	小西 巧
神戸 YMCA における LIT の試み(高校生キャンプカウンセラー)	阪田 晃一
朝霧野外活動センター事業報告	櫻井 良樹
「キャンプの安全いろはカルタ」を活用したキャンプの安全教育	柴田 俊明
発達気になる子ども・家族・スタッフそれぞれが成長するキッズファミリーキャンプ	竹内 靖子
木っ端でオリジナルクラフト	竹田 秀美
小学校の自然教室における火熾しの理科実験的展開	中島 宏
火熾し	中島 宏
日本固有の結びを覚えよう	中島 宏
あなただけの紐を作ろう	中島 宏
ニコニコキャンプの 5 年間	仁志田 華子
フィールドワーカーのための危険生物”ハチ “”ヘビ” 対策セミナー&交流会	西海 太介
キャンプ白書 2016 報告	白書部会
協同学習を用いた野外教育に関する実践報告：17 個の野外教育プログラムの実践を通して	久末 俊幸
キャンプで作る超簡単にぎり寿司	水沢 利英
“のんびり遊ぼう” ニコニコキャンプの 5 年間	山崎 亜子



プレ・ポスプロプログラム

国際キャンプ・ディレクター研修 International Camp Director Course

大会に先立ち、国際キャンプ連盟の指導者の養成プログラムである、国際キャンプ・ディレクター研修(ICDC)と、その上級研修で、ICDC のコースの講師の養成コースである、国際キャンプ・ディレクター研修トレーナーコースが開催されました。どちらも今回が日本初開催でした。

全体では、国内からの参加者 13 名に加え、海外 8 カ国から 19 名、計 32 名の参加がありました。

期 間：

国際キャンプ・ディレクター研修トレーナーコース	10 月 23 日(日)～28 日(金)
国際キャンプ・ディレクター研修	10 月 24 日(月)～28 日(金)

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者数・国別内訳：

国際キャンプ・ディレクター研修

日本	12 名	カナダ	2 名	モンゴル	1 名	カンボジア	1 名
中国	2 名	マレーシア	1 名	フィリピン	1 名	合計	20 名

国際キャンプ・ディレクター研修 トレーナーコース

日本	1 名	シンガポール	2 名		
中国	7 名	トルコ	2 名	合計	12 名

講 師：

Connie Coriterra / Andrew MacGukian / Kiu Tennant



国際キャンプ連盟理事会

国際キャンプ連盟の理事会が AOC2016 前、10 月 26 日(水)～28 日(金)の日程で開催されました。

ポスト・コンgress・ツアー

大会後に3つのポスト・コンgress・ツアーが開催されました。

日本のキャンプ体験 ―YWCA キャンプ野尻

日 程：11月1日(火)～3日(木) 2泊3日

参 加 者：国内3名 海外6名 計9名

運営団体：(公財)東京 YWCA

主なプログラム：

1日目：YWCA 野尻キャンプ場見学、懇親会

2日目：地元小中学校見学(授業見学・給食体験)、ラボランドくろひめ見学、日本文化体験(お茶席)

3日目：小布施町見学



日本のキャンプ体験 ―山梨の自然学校と富士山ツアー

日 程：11月1日(火)～2日(水) 1泊2日

参 加 者：国内0名 海外11名 計11名

運営団体：山梨県キャンプ協会

主なプログラム：

1日目：キープ自然学校施設見学、歓迎会

2日目：河口湖見学、御室山(樹海ハイキング)、富士山浅間神社見学



日本の世界遺産 ―日光

日 程：11月1日(火)～3日(木) 2泊3日

参 加 者：国内0名 海外2名 計2名

運営団体：栃木県キャンプ協会、奥鬼怒温泉八丁湯

主なプログラム：

1日目：瀬戸合峡見学、日本の宿体験(奥鬼怒温泉八丁湯)

2日目：奥日光(湯ノ湖、竜頭の滝、中禅寺湖)見学

3日目：奥日光(華厳の滝)見学





大会運営組織

大会組織委員

委員長

星野 敏男
(公社)日本キャンプ協会会長

副委員長

師岡 文男
アジア・オセアニア・キャンプ連盟前会長・名誉顧問
国際キャンプ連盟理事(AOCF 担当)

委員

田中 壮一郎
(独)国立青少年教育振興機構理事長
島田 茂
(公財)日本YMCA 同盟総主事
川戸 れい子
(公財)東京YWCA 代表理事
奥島 孝康
(公財)ボーイスカウト日本連盟理事長
浅野 万里子
(公社)ガールスカウト日本連盟会長
井上 成美
(一社)日本ウオーキング協会専務理事
山西 哲郎
(公社)日本オリエンテーリング協会会長
加藤 元彦
(公財)日本サイクリング協会副会長
水野 宰
(一財)日本ユースホステル協会理事長
小西 亘
(公財)日本レクリエーション協会理事長

明瀬 一祐

(一社)日本オートキャンプ協会会長
西澤 信雄
(公社)日本シェアリングネイチャー協会代表理事
永吉 宏英
日本野外教育学会会長
斉藤 泰幸
日本アウトドアネットワーク運営委員長
佐藤 初雄
(NPO)自然体験活動推進協議会代表理事
針ヶ谷 雅子
(公社)日本キャンプ協会理事(50周年事業担当)
藤枝 隆
(公社)日本キャンプ協会常務理事
吉田 大郎
(公社)日本キャンプ協会事務局長

監事

村松 真哉
(公財)ハーモニィセンター理事
宗像 弘行
(一財)日本ユースホステル協会総務課長

顧問

石田 易司
(公社)日本キャンプ協会顧問
アジア・オセアニア・キャンプ連盟副会長
田中 祥子
国際キャンプ連盟前副会長
アジア・オセアニア・キャンプ連盟名誉顧問

大会実行委員

実行委員長

針ヶ谷 雅子 (公社)日本キャンプ協会理事

委員

岡田 成弘 仙台大学講師
小森 伸一 東京学芸大学准教授
濱谷 弘志 北海道教育大学岩見沢校准教授
渡邊 仁 筑波大学助教
富山 浩三 大阪体育大学教授
多田 聡 明治大学教授
甲斐 知彦 関西学院大学教授
青木 康太朗 青少年教育研究センター研究員
柳下 史織 東京YWCA 教育キャンプ課主任
伊原 久美子 大阪体育大学准教授
藤江 龍 青少年教育研究センター研究員
熊澤 桂子 東京教育専門学校専任講師
小林 秀雄 東京YWCA リーダー
村井 伸二 玉川大学助教
清水 幸一 四国学院大学教授
花田 道子 九州共立大学助手

江川 潤 神田外国語大学特任講師
野澤 順子 代ゼミサテライン予備校成田校校長
久野 愛子 フリーランス
鈴木 かなえ 桐朋女子中高等学校非常講師
加藤 綾音 (NPO)S-space 本部野外活動担当
水村 賢治 フリーランス
太田 正義 常葉大学講師
中神 真紀子 (NPO)子どもの体験活動サポートセンター
前澤 桂子 (NPO)子どもの体験活動サポートセンター
工藤 福成 (公社)日本キャンプ協会地域連携委員会委員
大天 嘉行 (公社)日本キャンプ協会地域連携委員会委員
(一社)教育人材認証協会

アドバイザー

田中 祥子 国際キャンプ連盟前副会長
アジア・オセアニア・キャンプ連盟名誉顧問
高橋 伸 国際基督教大学 課程上級准教授
ICF アンバサダー
高野 孝子 (公社)日本キャンプ協会理事
NPO エコプラス 代表理事

ボランティアスタッフ

秋葉 大地	薄井 典子	川原 茉莉	鈴木菜津美	月見里知輝	西尾奈々子	益子奈央子
浅野 晨	大下 雄真	草野 晴菜	鈴木 梨沙	對馬リヤナ	野崎 真揮	松本紫央里
阿部 瑞	押山愛紀子	小泉 涼	砂見 努	照井 佳也	野中香菜恵	水村 賢治
池鯉鮒結子	小田切菜々	近 駿哉	関塚 絢子	富山 雄大	橋本 健秀	宮本 恵里
稲葉 麻里	加須屋里菜	下田 尾萌	高橋 優子	中島 啓輔	平櫛 瑤子	吉田 尚広
市ノ瀬双葉	鹿俣 智裕	杉山 璃奈	高橋 祐二	中田 克実	藤樫 亮二	
一番ヶ瀬瑤子	川田 泰紀	鈴木 瑛未	田中 美宇	新里 孝行	堀内 佳菜	
日本キャンプ協会グループ朝霧野外活動センタースタッフ 櫻井 良樹 向島 克明 立林 雅貴						

大会事務局

吉田 大郎 秋山 千草 林 健児郎 吉野 宏美 前田 将太 五月女真弓

ロゴデザイン emu 前田由加里

AOCC2016 奨学金

AOCC2016 大会参加者の有志の皆さまより、310,000 円のご寄付をいただきました。アジア・オセアニア地域をはじめとした、発展途上の国からの参加者への補助として全額活用させていただきました。厚く御礼申し上げます。

国際キャンプ連盟 Bill Bowker 奨学金

フェアウェル・パーティにて行った国際キャンプ連盟の持つ Bill Bowker 奨学金へのチャリティの募金総額は 97,405 円となりました。全額国際キャンプ連盟の Bill Bowker 奨学金へ繰り入れられました。ご協力いただいた皆さまへ厚く御礼申し上げます。

このサイズで、 驚く生産性。

ORPHIS FW

*1: A4 普通紙片動機送り、標準設定連続プリント、FWフェイスダウン後トレイ使用時。*2: A4 普通紙片動機、RISO FW インク「使用時、カラーは認定画像に ISO/IEC 24712 に定めるパターンを使用し、ISO/IEC 24711 に基づく測定方法によって算出。モノクロでは認定画像に ISO/IEC 19302 に定めるパターンを使用し、ISO/IEC 24711 に基づく測定方法によって算出。単位：枚/分。

SPEED		COST	
モノクロ	フルカラー	モノクロ	フルカラー
120 枚/分	1.52 円/枚	0.41 円/枚	1.52 円/枚



RISO
プリンターの新領域をひらく

理想科学工業株式会社 本社 / 〒108-8385 東京都港区芝5-34-7 田町センタービル

資料請求・お問い合わせ ☎ **0120-534-881**

受付時間 10:00~12:00 13:00~17:00 (土・日・祝日・夏期休業・年末年始を除く)

www.riso.co.jp

未来テクノ株式会社



三菱商事



Food for Globe

いのちと笑顔を支える

毎日がんばるあなたを、元気にしてくれる「食」。

なにより、いのちの源である「食」。

私たちは、この「食」に、心からのおもてなしを添えて、
世界中の人たちへ笑顔を届けていきたいと願います。

会社や学校で



病院や
シルバー施設で



レストランや
デリカショップで



シティホテルや
リゾートホテルで



株式会社 グリーンハウス

〒163-1477 東京都新宿区西新宿3丁目20番2号
東京オペラシティタワー17階 TEL.03-3379-1211(代表)
www.greenhouse.co.jp

なんかいいな、をプラスワン

Green House

アウトドアスポーツの発展を応援します。



株式会社ウィンパル TEL.0276-52-8125
〒374-0012 群馬県館林市羽附旭町300-1

青少年の健全育成に取り組んでいます



公益財団法人
関西テレビ青少年育成事業団
Kansai Television Foundation for Youth Development.

365日24時間緊急対応 お客様との信頼を守り続けて50年
東海プラント株式会社

ISO9001認証取得 水社会に貢献する環境システムエンジニア
環境分析計量事業所登録

本社 〒410-0861 静岡県沼津市真砂町267-2
TEL.055-951-5240内 FAX.055-951-5241
E-mail: eigyou@tokai-plant.co.jp

研究機関 アセス研究所・分析センター・環境アセスメントビル・実験機
営業所 東京/埼玉/神奈川/小田原/山梨/伊豆/下田/静岡/浜松

URL: <http://www.tokai-plant.co.jp/>

TOTAL GRAPHIC ARTS CREATION
株式会社 ミズカミ

オフィスづくりのパートナー

株式会社 **オカモトヤ**

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24 TEL: 03-3591-2231 FAX: 03-3503-8709
<http://www.okamotoya.com>

- オフィス移転
リニューアル
- オフィス家具
- OA 機器
- 文房具
- 事務用印刷

***** 担当: 松澤

貴方の大切な建物を
昼も夜も忠実に見はります
守ります



消防設備設計施工・保守点検

広伸防災株式会社

静岡県富士市川成島250番3 TEL (0545)63-2178
<http://www4.tokai.or.jp/koushinbousai/>

はっちょうのゆ

ハ丁湯

〒321-2717 栃木県日光市川俣 876

☎0288-96-0306 FAX 0288-96-0888

<http://www.8tyo-no-yu.co.jp/>

モノの時代から心の時代へ。

人々が求める「本当の豊かさ」を考え、
快適環境の創造に取り組んでいきます。

福祉用具レンタル/リネンサプライ/リースキン



ヤマシタ コーポレーション

<http://www.ycota.jp/>

サントリーホールディングス(株)
アイコム株式会社
株式会社阿咩

株式会社ニュートラスト
ホシノ自動車整備工場
有限会社エイコー東海
はつかいちキャンプ協会

